

第13回

明治大学文学賞



# 第十三回 明治大学文学賞 受賞作品

## 第一部門 倉橋由美子文芸賞

大賞 「少年の境界」

青沼 伶 (農学部3年)

佳作 「眼光」

菊地 旭輝 (文学部1年)

「飛びたつ準備はできている」

曾雌 美里 (文学部3年)

「おはよう、ユーグレナ」

堅田 瑛子 (理工学部1年)

## 第二部門 阿久悠作詞賞

大賞 該当なし

佳作 「紅葉かつ散る」

【A】 自由作詞形式 藤巻 亮太 (情報コミュニケーション学部2年)

「夜の空想」

【A】 自由作詞形式 小島 淳之介 (文学部4年)

「ありふれたい」

【A】 自由作詞形式 灰本 陽介 (理工学研究科1年)

# 【目次】

## 第一部門 倉橋由美子文芸賞

倉橋由美子文芸賞 選評

「少年の境界」

青沼 伶

(農学部3年) . . . . . 5

「眼光」

菊地 旭輝

(文学部1年) . . . . . 49

「飛びたつ準備はできている」

曾雌 美里

(文学部3年) . . . . . 67

「おはよう、ユージェナ」

堅田 瑛子

(理工学部1年) . . . . . 101

## 第二部門 阿久悠作詞賞

阿久悠作詞賞 選評

「紅葉かつ散る」

【A】自由作詞形式 藤巻 亮太

(情報コミュニケーション学部2年)

. . . . . 132

「夜の空想」

【A】自由作詞形式 小島 淳之介

(文学部4年) . . . . .

. . . . . 139

「ありふれたい」

【A】自由作詞形式 灰本 陽介

(理工学研究科1年) . . . . .

. . . . . 142

倉橋由美子文芸賞 選評

渡辺響子

昨年は世相を反映してか、不安に衝き動かされて書いたような作品、

極めて狭い世界を描いたものや、現実逃避的な作品が多かったが、今年度は普段から小説に親しみ、文章を書き慣れている人が多いように感じた。借り物のような文章の人は少なく、自分なりの小説観と、それを構築する固有の文体を手に入れつつある作品が多いという印象だ。

中でも、大賞の『少年の境界』はひとときわ抜きんでていた。審査中、去年もよく似た作品を読んだような気がしていたが、受賞決定後に、昨年度も応募していた人だとわかり、間違えるほどの変化を嬉しく思った。比喩や描写も個性的でありながら突飛ではなく、文章そのものに牽引力があ

った。強いて言えば、都市・街・スラム、あるいは娼婦と聖女という図式が、ややクラシカルに映じるかもしれないが、タトウの目など、細かい布石も機能している力作だと言える。

『眼光』は、過去二年、ファンタジー系の物語と並んで少なくなかった時代物。今年度は唯一の時代物だった。

情景が思い浮かぶ安定した文章で、いい意味で淡々とストーリーが展開していくのが小気味よかった。狩のシーンも仏の顕現も「まなざし」によって通底していて違和感なく読めた。

『飛び立つ準備はできている』は、若者の悩みとその克服が等身大に描かれた爽やかな作品。素直でてらいのない、まっすぐな文章で物語に引き込まれた。心地よい作品を書くのは苦しみを描くよりもむづかしい。ましてや昨今の状況で爽快な作品を書き上げたことに拍手を送りたい。

『おはようユーグレナ』は、「ミドリムシ」ではない「ユーグレナ」が美しく自由で、清らかな乙女たちと重なる。汚れてもまた何度でもユーグレナになれるというその特性で、非凡な作品になったと言えるだろう。いぎたない教師も、まだ清められるかもしれないという希望の残る結末に救われる。

個人的には、飄々とした雰囲気のある『蟹伍忌』、今ならではの設定の『潮目』、時間ループをめぐる『ウロボロスの命日』にも惹かれた。

過去二年と比べ、どの応募作も時間と労力もかけているように受け止めた。一人で五本応募した人もいたようだが、それよりも一作の推敲を徹底した方が、よい作品になったのではないだろうか。来年度も若い力と可能性に期待している。

井上善幸

今回大賞に選ばれた「少年の境界」について、語るべきことはほとんどないように思います。すでに固有の文体を獲得されているのではないかと、思うからです。これが大学生の駆使する文体であることに驚きを禁じえません。描きたい内容なり主題があらかじめ存在して、それを文章に移してゆく、というのであれば、不可能ではありませんまい。ここではそうではありません。文章が、言葉が作家の眼となつて、世界を、情景を模索しつつイメージを映し出してゆく、その現場にいわせるような感覚を覚えるのです。わが敬愛する澁澤龍彦でさえ、小説は作家が紡ぎ出すフイクションというより、やはりエッセイストの文章たることを免れていないという印象を受けますが、この作者の言葉は、そうではありません。廃墟のなかにうち捨てられたような卑小な物から、聖なる存在にいたるまで、複雑に敷きつめられた音階がアラベスクのように描き込まれていると思います。その意味で、今回の応募作の中で群を抜いた小説作品に仕

上がっていると思います。

「おはよう、ユークレナ」も読ませます。語り口にある種の切迫感のようなものが感じられ、それがこの作品の魅力になっていきます。語るべき対象の実在性が示されるにもかかわらず、モノローグ的世界から出てゆかないところを評価します。いわば私語する自己意識が複数の他者に分裂し、それらとの不思議な出会いと対峙とが緊迫感を孕みつつ展開されてゆき、それらの他者が明け渡すことのない神秘を蔵したものとしてみえられてきます。ミドリムシの学名がユークレナであることを知って、この悲劇的ヴィジョンとも言える世界にほかに明るい光をもたらしにくれているようで、そこに救いを見出しました。夕暮れと薄明とが連続しているようなヌーモアも感じられます。

「飛びたつ準備はできている」は、淡い水彩画を見るような空気感を感じさせます。実際まどかは絵画部で絵を描いており、登場する人物はほぼ女性ばかりですが、どこかアセクシヤルで、「きれい」なものが語り手の

意識の中心にあるようです。この作品の一番の長所は、終わり近く、棒高跳び選手であるつばさに対する肯定の言葉に尽きるように思います。

『跳べます』まどかが言った。『先輩は跳べます』。傷ついた小鳥のようなつばさの懐疑を前に、まどかの揺るぎない肯定性は、今の時代に切に求められているものではないかと思つた次第です。

「眼光」は歴史小説で、十世紀に実在した源光を主人公に据えた物語です。近未来に設定された応募作が多い中で、このように古い時代の日本をその舞台に選び、落ち着いた筆致で墨絵のように描いているところに好感を持ちました。しかもこの主人公の内面にまで入り込み、死後も沼の公からわたしたちを見上げている主人公の眼で終わっています。この眼差しの存在に、作者の近代性を認めることができるように思います。

福岡 具子

応募総数は37篇。全体的なレベルは高かったように思う。今や2年になろうとしているコロナ禍が良くも悪くも背景にあるのだろう。作品を濃縮させる閉じた時間があつたであろう一方で、現実を取材しない、頭の中で作られた近未来的世界観の作品が多かった。新しい世界を設計できるのは文学の潜在能力のひとつだが、実際にはその新世界も人物も会話もいささか薄っぺらなものが多いのが残念だった。フィクションを創る際にも、まずは現実をじっくり観察して欲しい。想像の入り口は現実の中にある。

大賞となつた『少年の境界』は、細部に丁寧に魂を込めていて、流れるような文体と際立つ繊細なセンスが素晴らしかった。だからこそ結末にもう一段深まりが欲しかった。他の作品にも言えることだが、頂点には

へ死シかないのだろうか。嬰兒の生命には確かにこの上ない神聖さがあるが、それを失つた母は死ぬしかないのだろうか。社会の底辺を描くならば、そこから立ち上がるちっぽけな生の尊さが見たい気もした。

佳作三篇もいずれも良作だった。『おはよう、ユーグレナ』は「ユーグレナ」をモチーフに選んだ点で勝利だった。ミドリムシと、眠る汚れなき少女のギャップが秀逸だった。『飛びたつ準備はできている』は、読みながらアニメ風の情景が浮かんでしまふのだが、「一番星」という言葉に素直に心を揺さぶられた。

個人的に一番推したのは『眼光』であつた。抑えつつも深い一文一文が素晴らしかったし、応募作の中では珍しく先が読めない点も良い。怨念の影が漂う展開も飽きさせないのだが、要所要所のイメージの絵画性が傑出していた。花を撒く仏が鳶へと

変貌する様子、泥から眼光が差し続けるイメージは鳥肌が立つほど美しい。

受賞のポスターライン上に位置していたのは『モフモフキマグレイトハキマリモトキ』であつた。文章力も構成力も優れていたが、題名をもっと無意味で不可解にした方が魅力は増したのではないか。他に『蟹缶忌』の雰囲気良かったが、晴人にもう少し個性が欲しかった。『逆恨み』は身体論の教科書という設定に引き込まれた。結末にもうひとひねり見たかった。



## 「少年の境界」

青沼 伶

### ■受賞のコメント■

原稿を封筒に入れ郵便局へ向かう道中は絶望に苛まれていました。自分の中にあつたすべての自負は失われ、今日まで一体何のために書き今はこうして足を動かしているのかわからなくなりました。喪失感は一カ月程抜けきらずその傷心すらも酒で忘れようとした自分に半ば諦めています。今回の受賞を受けもつとまともに人生を生きねばならないのだと思うようになりました。(実現可能かは置いておいて)

私の人生は言い訳と甘えの連続です。世の中の理不尽さに嘆き激甘な自身の人生を呪う手の施しようがない阿呆ですが、事実この世は途方もなく生き辛いのです。それでも人々は前を向いて力強く生きていくように感じて私は頭の中で何とも饒舌に言い訳を続けたいとやっつけていけないように感じます。自分の性根が腐っている限りこれからも文章に頼らざるを得ないかもしれませんがその存在は私を慰めもし今もこうして生かしてくれるかけがえのないものです。今回選評してくださいました先生方には私の駄々を捏ねる子供のようない分を温かい目線で辛抱強く聞いて頂き、本当にその事が一番嬉しく感じています。もつと精進し世のため人のためになるよう尽くしたいです。

最後になりましたが賞に関わってくださいましたすべての方々には心より感謝申し上げます。

## 少年の境界

## 1

ゴミ山に二人の少年がいた。どちらも背は同じくらいで、ぼろぼろのシャツと短パンからによつきりとした手足が伸びていた。一人は堆く積み上げられた生ゴミの間で果実の種子を探している。固く大きな種子で、育つとそこら中に甘い匂いが立ち込める幻の果実を実らせるやつだ。少年はまだその果実の甘さも、どんな色でどんな形をしているのかさえ知らなかった。生ゴミは死んだ家畜やペットの肉と、腹を食われた魚、その他多くの野菜の根や葉以外に手つかずのまま腐ったバナナの房が多かった。熱帯化に伴い日本では米や野菜に代わり多くのバナナの木が植えられたが、一度に大量の房をつける生命力漲るこの木を人々は不気味とさえ思い始めていた。主食にする文化も定着せず、たたき売りをしても売れ残りが減らないバナナは市場に運ばれることなくここに捨てられに来るものも多かった。少年はたく

さん植えられるようになったバナナの木を一本一本見上げるのが好きだった。まだ青い時は美しい菊の花のようにも見え、時には象の牙や巨大タコの脚にも見えた。少年はそんなふうの色々なものを見ては空想に浸ることが好きだった。それでもゴミ山の中ではバナナを好きにはなれなかった。全身を炙るような強い日差しの中でバナナもその他の肉もどろどろに溶けてしまい、その悪臭たるや凄まじいものだった。熱で溶けない肉には親指ほどの太さの白い黴が肉を締め上げるようにして生え、それが虫の死骸にも巻き付いていることもあった。空中の黒い蟲の大群が背の高い雑草を掠め旋回し、噎せ返る臭いと共に空へ昇っていく。少年は黒いゴム長靴を履き、溶け出したバナナの沼を渡って行った。時々房をどけてはその間に固く薄桃色の果実の種子が落ちていないか探している。

もう一人の少年は鉄製のガラクターが多く捨てられた場所で使えそうなものを物色していた。少年は主に家電などの電化製品を隈なく調べた。一日では到

底調べきれない量のためその日の終わりに変わった形の木の枝を置くようにしていた。少年はその枝で焦げ付いた部品や絡まった鋼線をどかしながら歩いていく。この少年はゴム長靴を持っていない。三週間前、一緒に作業していた年上の男が強い電圧を垂れ流すケーブルに誤って触れて焼け死んだ。少年にとってはアツという間の出来事だった。それ以来、少年はゴム長靴が落ちていないかも一緒に探すようになった。少年はゴム長靴を探しながら蝉の声を聞いていた。ゴミ捨て場には煙が上空に放出される音や泥濘を踏んづける音、その他の煩わしい音で満ちている。少年はいつもそういった音に包まれると、厚い布で全身を覆われているような気がして息がでないほど鬱陶しい気分させられた。しかし今日はすぐ近くで蝉が鳴き叫びそれらの音を掻き消してくれている。少年は今日まで蝉が鳴くことをまるで意識していなかった事に気が付いた。少年は蝉を探して、今にも崩れそうな巨大な電化製品の山を覗いた。その翳へ入ると蝉の声はますます大きく反響し

た。陽炎のような雑音が力強い鳴き声に塗り潰されていく。少年の耳は蝉の声に静かに塞がれ、世の中の騒めきが頭の中から排除されていくようだった。突然ぎい、という鳴き声がして今まで消魂しかつた蝉の声がびたりと止み、それから、カラリ、とひどく乾いたプラスチックのような音がやけにはつきり鳴るのを少年は聞いた。蝉の死骸が冷たい鉄の上に落ちた音だと思った。ぎい、という死んだ蝉の最期の余韻が家電ゴミの谷間で金属質の冷たさを含み漂っている。少年は蝉の死骸を探したが見つからなかった。代わりに壊れたラジオの隙間で青い小さな鉛筆削りを見つけた。色鉛筆やコンパスの付属品として売られている黄金虫ほどの大きさの鉛筆削りだ。薄汚れ色彩を失ったゴミ溜めの中で、それは不思議と眼が冴えるような鮮やかな青色をしていた。スモッグに霞む太陽に翳すとそれは青く煌いて、まるで美しい原石のようだと思った。暫く眺めた後、少年はふと思いつつてその小さな塊から指を離した。鉛筆削りは幽かな残像を残しながら落下し、プラスチック

ツクの乾いた音を立ててガラクタの上に落ちた。蟬の死骸とまったく同じ音だと少年は思った。なんて呆気ない音だろう、あんなに青く光る綺麗なモノも、命を震わせて鳴く生き物も、落ちる時はみな同じように乾いたプラスチックの音を立てるのか。少年は静かに絶望した。

少年は死んだ蟬と鉛筆削りの違いを考えて鉛筆削りと青い宝石の違いを考えて、それから蟬の死骸と自分の違いを考えた。あの鉛筆削りが本物の原石だったならあんな音はしなかったはずだ、人間の肉も宙を舞ってアスファルトに叩きつけられる時、蟬の死骸や鉛筆削りと同じようにひどく乾いた音しか鳴らないだろう、俺が煙を吹きだすあの灰色の塔の上から身を投げたとしても、きつとプラスチックのよな音がするだけだろうな、ドシンでもドサツでもなく、何か小さな破片をゴミ山に向かって投げた時に聞こえる死んだ音だけ、蟬も人間もプラスチックの破片もぜんぶ一緒だ、誰かから与えられた輪郭線が違うだけで、世界中の人間が生まれつきの盲人と

聾啞者で誰も真実を知ろうとしなかったら、鉛筆削りは青い美しい石のままではいられたし俺の体は蟬と同じだと知らなくて済んだ。またどこかのゴミ山の翳で蟬が鳴きだしたが少年の耳に届くことはなかった。

少年はゴミ山の翳でひとり立ち尽くしながら、この山の向こう側で光という光が一斉に目覚めたような気がして、その光が広大なゴミ処理場の何もかもを余さず照らすことによって無数の転がった廃棄物や何本も空に向かって伸びる塔の輪郭をくつきりと浮かび上がらすのが、まるで生きていないものにつひとつの生命を吹き込んでいく感覚に似ていると思った。少年は暗がりの中で目を閉じ、一層静かに息をしなければならぬのだと自分に言い聞かせた。この翳の中で俺は今、自分の輪郭がわからなくなっている、俺を俺の形に見せる境界線は肌から滲む汗によって歪んでしまった、それは溶け流れて行く輪郭と、形を失った腕や脚の肉と混ざって、もう人間でも何でもないびちゃびちゃとした汚い音を立てる

泥といっしょだ。

遠くから自分の名前を呼ぶ声で我に返り少年は目を開けた。瞬きをすると目が染みて涙かと思つたが、額から流れた汗だった。廃材の間からゴム長靴の少年がもう一度彼の名前を呼んだ。少年は目元を強く拭い、ここぞと叫んだ。鼻が挽げるような強烈な臭いを全身に纏わせ果実の種を探した少年はゴム長靴の中から胡桃ほどの大きさの種子を五つ取り出した。

「すげえだろ、大収穫だぜ。煙突塔の裏で八百屋がよく捨てに来る場所を見つけてさ、まだ誰も知らない場所だよ」

「これあの果物の種なのか」

「わかんね、黒ずんでるし色じゃ見分けはつかないな。でも種にしちや大きい方だと思う、高く買ってくれるだろ」

「ああそうかもな」

種子は色々な汁に塗れべたべたとしていた。笑顔の少年はそれを大切そうにゴム長靴に戻した。

なあ、あつちに来て手伝ってくれよ、今日は絶対種の方がいい収穫になるぜ、この辺は危険すぎるだろ、針金で傷だらけになるしうっかり感電しそうになるしさ、俺こんなところ居たくないよ。

二人は瓦礫を崩しながら煙突塔を目指した。長靴を貸してくれりや俺も危なくないぜ、少年が言う種子の入った長靴を履いた少年は、日替わりの約束だろ、と責めるような眼つきで返した。長靴を買うような金は無かった。買いに行くにしても街まで出なくてはならなかった。少年たちが住む地域では穴の空いたものを何とかして塞いだものか一度は靴底が剥がれたものしか出回ってなかったからだ。

ゴミ処理場は巨大な鉄条網で覆われている。その先は送電線の鉄塔が立ち並びいくつかの送電施設もあった。その敷地を超えると巨大なスラムが広がり、小さな工場と作業場が所狭しと並ぶ間に民家や市場が押し込まれている。ゴミ処理場に通うには丘を越えるため、少年たちは外から自分たちが住んでいる場所をよく見ることができた。顕微鏡で見た人間の

細胞の集まりとよく似てるんだとゴム長靴の少年はしよっちゅう教えてくれた。よおく目を凝らして見てみるよ、町が蠢いて見えるだろ、生きてるんだ、俺たちの町は生きてるんだなあつてあそこに居ると気付きもしないよ、おもしろいよなあ、あの町もこの国を動かす一部だよ。

ゴム長靴を持っていない方の少年はそういう話は嫌いだった。何度見たって自分たちの住んでいるところは醜いと思っていた。それは遠くで見ようが近くで見ようが同じだった。この少年は都市を見るのが好きだった。いつか絶対都市へ行きたいと思っていた。洗練された美しい建物、賑わう広場、着飾った女たち、スラムにはないものばかりだった。都市はゴミ処理場兼スラムを抜けたすぐ隣から始まっている。スラムは元々都市の中にあつた地域で都心に当たると言ってもよかつた。都市の高層ビルを取り囲むようにしてゴミ溜めが生まれ何年も経たぬうちに日本最大のスラム街となつたのだ。都市はかつて多くの人で賑わっていたが、今では大量の人間が流

出しスラムの方が圧倒的な人口密度だ。少年の家は三代続けてこのスラム地区に住んでいる。昔からここに工場を構えていたから一文無しになつて流れ着いてきた移民とは違ふのだと物心つく頃から教え込まれてきた。なら工場を売つて都市に住めばいいじゃないかと少年が言うと、一体どこの誰がこんな土地にある工場を買うんだいと頭を叩かれた。少年は不服だった。結局お前らはここの暮らしに甘んじているだけじゃないか、本当にここから出ようと思えば好きなどころに行けるはずだ。少年は頭を垂れるようにして働く母親の姿を見ると殴り倒してやりたいう気持ちで身悶えそうだった。

煙突塔の近くの瓦礫山からは都市がよく見えた。人の動きなどの細部までは到底見えないが銀色に乱反射するガラスの建物やオレンジ色の電飾と紅いグロスを塗った女の巨大な広告塔を垣間見ることができた。女はいつも此方に視線を向けている。いつもそこだけ濡れているような唇が何か言いたげに開きこつちへ来いとあの大きな瞳で見つめている。少年

にとつて女の顔が都市の顔だった。あの紅い唇に吸い込まれて都市へ身を委ねたかった。でも今はそれが叶わない。まずはこの炎天下の中、あの女が毎日食べているかもしれない果実の種を探すのだ。

辺りが暗くなるまで少年たちは種子を探し続けた。確かに煙突塔の裏には比較的新しい生ゴミが捨ててあり種子を探すのは容易かった。それでも二人がかりでようやく全ての種子を集め終わった頃には幽かに夜の気配があつた。これ以上暗くなると危険だった。踏みたくもないものを踏まざるを得ないし、昼間は日陰に隠れている野犬もこの時間帯から食事を始める。少年たちは集めた種子を抱え（ゴム長靴の少年は種子で一杯になった長靴を抱え）急ぎ足で鉄条網をくぐった。真っ赤に染まった空は焼け爛れた皮膚のようだった。紅い唇の色とも似ていた。二人は真っ直ぐ丘を下り農家の家へ急いだ。しかし幾らかも行かぬうちに突然立ち止まった。視線の先に此

方へ向かつて歩いてくる人影があつたのだ。電灯もない道を何も持たずにやって来るような愚か者を二人はまだ見たことがなかった。少年たちはすぐに警戒した。近付いてくるにつれその人影は人間の詳細な部分を現し始めた。歩いてくるのは女だった。ひどく痩せて青白い顔をしているが目だけはその中でも妙に生き生きと冴え大きく見開かれていた。口元には仄かな微笑が見られ、胸まで伸びた黒い髪は宵の闇に既に溶け込んでいた。不思議な女だと少年たちは思った。それは大きな目や静脈が透けて見える肌が僅かな光の加減で緑にも赤にも変色し、それが今まで女が歩いてきた街の様々な声や音や匂いやネオンを溜め込んで見たこともない異国人の肌のようにぼんやりと発光しているような気さえたからだった。その何ともいえない質感が少年たちを妙な気分にした。

「何所へ行くんだ」

ゴム長靴を抱えた方の少年が勇敢にも尋ねた。

「この先は暗くなると危険だ、戻った方がいいぜ」

女は早くも遅くもない速度でゴム長靴の少年を見て、それから首を回して隣にいたもう一人の少年の方を見た。すごいよねえ、それ。女はその少年に向かってにっこりと微笑んだ。おもしろい模様の刺青ね、目玉があるみたい。

少年は不意に突拍子もないことを言われ暫く喉に声が聞えたせいで、え、あ、とどもりのように息を吐き続けた。二の腕から肘下の方にかけて彫られた渦巻文と菱形の文様が組み合わさったタトゥーを観察しながら、女は博物館にでもいるような調子で感心していた。刺青は一年前に近所の彫り師に練習台として彫られたものだったが、今では少しずつ馴染み始め生まれつきの染みのように見えなくもないと少年はひそかに思っていた。この暗がりの中でスミが見えるなんて、と少年は内心舌を巻いた。この女は人より大きな目のおかげで猫のように夜目が利くんだなあ。

目が合ったのよ、と女は囁いた。あたしがあなたを最初に見た時ね、あなたの腕に描かれた目はずっ

とあたしを見ていたって言うてきたの、吸い込まれそうなほど大きな黒い目でね、その眼つきがあたしなんだかともりアルだなんて思った、そしてらあなたの渦巻の目が「リアルってなに」なんて急に話しかけてくるの、だからあたし考えたわ、リアルってなに、あたし達リアルを感じたくて毎日息をする、汗をかく、キスをする、だけどどんなに感じようとしてもリアルって遠いの、魚ってね、銚で突かれて痛みは生まれるんだけれどそれを感じることはできないんですって、どこかそんな愚かさに見えるわね、あたし達も目に見えている筈のリアルを認識できないみたい、昔一緒に仕事していた女の子がね、あたしの傍で泣きながら手首を切ったの、たすけて、たすけてって、泣いて剃刀をスツと引いたら、そこからは克蘭ベリージュースみたいな汁が流れただけだった、あたしその時クリームパスタを食べた後で奥歯に挟まった小松菜の端を舌でつついてたわ、彼女は痛みをもつてもリアルがわからないみたいだった。

女はまた突然、ほら見て、とゴム長靴に盛られた種子の上を歩く羽虫を捕まえて自分の手の甲に乗せた。この羽のついた小さな虫がいるでしょ、足を引き摺って、虫にとつては遙か彼方に見えるあたしの腕の地平線目指して前進してる、ガタガタしながら歩いて触角が細かく震えてるの、顔は見えないけど必死そう、汗も垂れてそう、これがリアル？ わからないけどすぐくリアルっぽい、そうしたらこの虫あたし達なんかより余程リアルに今を生きてるのね。そう言うとな女は反対の手を伸ばしてそのままプチッと音を立てて爪で虫を潰してしまった。

少年たちは呆気に取られて女の様子を見守っていた。女の爪の先には糸屑のような黒い虫の脚がぶら下がってる。あたし、そういう時戦争が始まってしまえばいいのになって思うのよ、そしたらあたしもあの女の子もこんなに思い悩まなくても済むのになって。女は刺青の少年を見て再び微笑んだ。正確には少年には少年ではなく彼の腕の渦巻の眼に微笑んでいた。女の声は歌うように滑らかで、女の躰そのものがなにか

一つの楽器のようだった。言葉はひとつひとつが独特なリズムを持っていて実に音楽性があり、少年たちは話の内容よりも言葉が紡ぎ出す旋律に聞き入ってしんと静まり返っていた。刺青の少年はその沈黙を破って「あなたはどこから来たのですか」と聞いた。そこには警戒心というより好奇心と期待を混ぜ合わせたようなものが込められていた。この女の言っていることは何一つ意味が分からなかったが、ふとした時の所作や立ち居振舞いの端々に品格にも似た何か滲み出るような気がしたのだった。女は今歩いてきた道を振り返り、ズーっと遠くからと言った。

「街ですか？」少年がさらに尋ねた。「もつと先よ、街のその先にある街から」そう言つて陽が沈んでいく都市の方角をただ黙つて見つめながら、夕陽が地平線を真っ赤に浮き上がらせその赤に溶けた都市のビル群が、ここから見るとまるで向こうの家々が戦火に燃えているようねと呟いた。少年の心は今まで感じたことのない興奮と欲の渦に吞まれていった。

俺の目の前にいるこの女は都市から来た女だ、それに違ひはないだろう。クリームパスタも女の着ているリネンのワンピースもスラムでは中々手に入らないことを少年は知っていた。

「ここで暮らすなら仕事を探さない」と

直感的にこの女はただスラムに迷い込んだだけではないと少年は思った。女は都市から追い出されたか逃げ出してきたか、いずれにせよもう都市には帰れない理由があると思った。

「でもこの先には仕事も家もないからな、一緒にここを下って街へ出よう。すぐに働きの口は見つかるさ」  
うんそうだ、と今まで黙っていた方の少年がゴム長靴を抱え直して小さく賛同した。降りよう、道が分からなくなる。

片手が空いていた刺青の少年が女の手を引いた。女を見ると相変わらず憂いとも喜びともつかない大きな濡れた目で笑っていた。農家の家の前に来ると二人の少年は別れた。ゴム長靴の少年に持っていた種子をすべて渡し、金は後日折半することになった。

農家の庭に消えていくゴム長靴の少年を見送って、二人は更に降り続けた。何所へ連れて行けばよいだろう。女の手を引きながら少年は考えた。街には二つの商業施設と幾つものレストランやバーがあり飲楽街が広がっていた。ウェイトレスや百貨店の受付嬢ならこの女でも働けるだろうかと少年は思った。ただどれを想像してみても薄ら笑いの女には似合わなかった。少年は女に背を向けながら、あの取り憑かれたように話し出した時の、女の焦点が合わない目を思い出していた。そういった狂った女は今までも何人か見てきた筈だった。けれどこの女は、他の女たちとなにかが決定的に違っているのだ。それはあの不思議な語り口調や、女の佇まいから感じる凛と張りつめた、威厳としか言いようのない雰囲気のことだった。けれど、それだけではまだ十分な説明とは言えないような気がした。

街に近付くと人の声や音楽などがラジオの周波数を合わせていくように鮮明になっていく。明かりも増えた。人々が電灯に吸い寄せられる虫のように

様々な色に光る店の入り口から出たり入ったりを繰り返している。ゴミ処理場にいた時と同じくらい強くて白い光が方々で焚かれ、往来する人々から時間感覚を奪っていく。パチンコ、キャバレー、居酒屋、デパート、昔からこの国にあったものばかりだ。並ぶ建物は一見華々しいネオンで飾り立てられているがよく見るとどれも、壁が老人の肌のようにひび割れ、煤けた灰色の建物だ。街に入ると独特な臭いが濃くなる。男も女も人間の体から染み出る動物の臭いを消すためにわざとらしいほど甘い花の匂いを帯びて擬態している。それが化粧や整髪剤や汗やアルコールのにおいと混ざり合って胸を搔き毟りたくなるような刺激臭へと変わる。街は所詮ただの街で都市ではない。街は都市に少しでも近づきたいスラムの人間と、都市にもスラムにも居場所がない行き場を失った者たちの吹き溜まりだった。足元には奴隷根性の染み付いた犬がだらしなく舌を垂らし人々の足にまとわりつく。街はあの犬にそっくりだ。俺がプラスチックの蟬であるように、この眩しさも楽

し気な音楽も女も男も、黒く毛が汚れた舌の長い犬みたいなものなんだ。でも今俺の隣を歩いている女は犬ではない。光の中で更に光が碎ける眩いネオンの街の酔狂なさざめきの中で青白い女は背筋を伸ばすでも乞食のように卑しい姿勢でもなく、本当にただそこにいることに意味なんてないというようなまるで動物園の広い檻の中で一匹の雌豹が遠くを見据え座っているように、見ている者に何らかの想像を掻き立てさせる対象として見えた。少年はスラムの画家の家で生まれて初めて絵画を見た時の感覚とよく似ていると思った。画家の部屋の小さなランプに照らされた沢山の油絵を一つひとつ覗き込むと、そこに描かれた娼婦の眼差しが実に寂しいものだとか背景の中に溶け込む老紳士から何かを訴えかけられていると錯覚するやるせなさや、胸を締め付けるような痛いほどの孤独を覚えるのだった。

少年と女は街の奥へ進み続けた。街を抜けるとその先から徐々に都市が始まる。少年の目は熱っぽかった。都市には苦しみも悲しみもない気がした。怒

りも恐怖もない気がした。俺は自分の輪郭を気にしたり、子供染みた無価値な祈りをして耐える必要もない、毎日果実を食べて本物の花の匂いに包まれる人間らしい人間になれるだろう。

都市へと続く道から少し逸れ路地裏へ行くと古くなった尿と酒の匂いがした。辺りも薄ら暗く全体的な湿り気が増している。少年は注意深く辺りを見渡していたが、突如現れたある建物の前で引き寄せられるようにして足を止めた。それは古い劇場だった。簡易的な箱の造りではなく、教会に似た塔を兼ね備えた小さくとも美しい建物だった。街の喧騒と都市の静けさのちようど間にある厳かな場所だ。建物は街の中で最も古いかもしれないが、そこには時間という刃物に切りつけられてきた生疵の跡が、決して醜いものではなく、厳然たる戦士の勲章のようには見ええた。少年はこの劇場で女は舞台女優になればよいと思った。女はぞっとするほど痩せていたが大きな目と口がのびのびとした印象を抱かせたし、少年は女が美人だと思った。あの広告塔の女ほどじ

やないかもしれないけど、この女は美しい声と言葉を持つてるんだ。

劇場の窓には青い硝子が嵌め込まれ、部屋の灯りが硝子を通して青みがかつた光となって闇の中へ溶け出ている。建物から幽かに漏れる笑い声やバイオリンの音は柔らかな西風のように心地よい。少年は意を決して女を連れ階段を上り、荘厳な扉を開けた。丸い天井がスーッと高く伸び、遠くにある中央の一点を見つめていると不思議な浮力が働いて少年を引っ張り上げていくようだった。海面で細かく砕かれて漂う光の粒のようにシャンデリアは揺れ光り、劇場の中には全体的に夕映え前の淡い空気に透けるような甘い光に満ちている。落ち着いた光沢の赤い絨毯が敷かれ、磨かれた壁や階段は中世ヨーロッパの建築を真似た洒落た石造りだ。男たちは一様に身形を整えて私たちの相手をし、彼女らの唾える細くて長い煙草に火を点けている。窓際では三人のバイオリン弾きがバロック調の弾むような音楽を演奏している。その音楽は、女のオペラ歌手のように甲高い

笑い声やヒールが床を蹴る音や男たちが愛を囁く息遣いによって完全な表現へと化していた。少年が中に進もうとすると、おい君ちよつと待ちなさいと低い声がし、黒服の男の手が少年の肩を掴んだ。黒服はゴミの臭いのする小汚い少年を見下ろし、ここに何用かと聞いた。分かっていると思うがお前が来ていいような場所でもないだろう、問題を引き起こす前に帰ってくれないか。少年は黒服の手を振り払った。俺たちは客じゃない、少年は震える息を吐き切り努めて冷静に黒服の目を見据えた。俺はある女を連れてきた、都市から来た女だ、この女はまだ卑しい街の空気に染まってない清くて誠実な都市の心を持つている、女をここに置き、俺たちはそのためにここへ来た。

女？女がどこにいる、黒服が怪訝な顔をした。少年が急いで振り返ると人々で賑わう広場の中にさっきまでいたはずの女がいない。少年は素早く辺りを見渡し女の名を呼ぼうとして、そして気付いた。少年も女もお互いの名前をまだなにも知らなかったの

だった。黒服の止める声を背後で聞きながら少年は駆け出した。人が最も密集している扉がある。飛び込みでやる着水の要領で少年は腕を伸ばし両手を合わすと、体を極力細くした姿勢で一気に群れの中へ突進した。人々がわあど驚きの声を上げ、少年が駆け抜けた後を何事かと見つめる。洗い立てのシャツの匂いに揉まれながら少年は黒い人影を掻き分けて、とうとうもう一つの部屋へ辿り着いた。そこはホールだった。スポットライトに照らされた舞台で、流れるような衣装を巻き付けた女たちが舞っている。

その奥には本物の楽団が居てバイオリンやチェロやクラリネットやオルガンが東洋の香りが強い美しいメロディーを奏でているのだった。客席は取り払われ、光が当たっている舞台とは別に部屋の中央には円形の舞台が設置してあり、その周りを絨毯と同じ色の赤いソファや細い脚の椅子が間を取って並べられている。舞台から伸びる花道は二階席へ続く階段と繋がり何人もの客が身を乗り出すようにして舞台を見ていた。

会場はさざめいている。ドラが鳴り今度は無数の煌びやかな寶石を縫い付けた薄い布を纏う女たちが、花道を通って客席へと散って行った。男たちが懐から紙幣を取り出し女たちの方へ結婚式の花びらを振りかけるようにして投げている。少年の前にも布を被った女がやって来た。薄暗い空間で目が慣れ始めると女たちの姿に少年は違和感を覚えた。布の中で女たちは籐網の籠を抱えている。そこにはブーケのように紙幣が盛られ溢れ出ている。歩いたり手を振る度、女たちの筋肉がしなやかに動くのがはっきりとわかる。少年は向こうの座席で客の目の前で舞う踊り子を見てアツと声を漏らした。舞台上の強い光の中では気付かなかったが彼女たちは皆薄い布一枚を隔て全裸であった。布が幾重にも折り重なるところだけ素肌は透けていない。女たちは客席を回りながら、体に巻き付けた布を広げ差し出されたグラスを呑み、時々体から外した布を客に預けながら華麗に舞い続ける。酔った客が手を叩く。踊り子はもつと早く回り出す。楽団員が床を踏み鳴らし始める、

弦が弓を擦る時の高い周波数、振り子そっくりに揺れる頭上のスポットライト、赤と青のゼラが張りついた照明が踊り子を食入るように眺める男の顔を浮かび上がらせる、白い背中の筋肉の伸縮、踊り子の手の中のグラスが傾く、冷たい飛沫が肌にかかり徐々に温み揮発する、少年は再びここが街だったことを思い出した。なんてことない、長い時間をかけて逃げてきた安息の地でも見知らぬ外国の街角でもない、ゴミ処理場を降つてやって来たあの街なんだ、俺たちの街、俺たちが暮らしている場所、それでしかなかったんだ。音楽は最高潮に達し大団円を迎えた。宙に舞う紙幣のせいで舞台の光が木漏れ日のように揺れている。この小さな街ではした金が動く、少年は足元に落ちた一枚の紙幣を拾った。紙幣に見えたのは数字が書き込まれた薄ピンク色の紙だった。踊り子に持たせて初めて換金機能を持っただけの紙切れだ。少年はそれを床へ叩きつけ泥がこびりついた靴裏で何度も何度も踏みにじった。衝動の理由はわからなかった。敵も裏切りもないはずだと信じたか

った、ただ無性に怒りの皮を被った悲しみが少年の精神を支配するのだった。紙は裂け数字部分は汚れボロボロの屑になった。少年の耳の奥で絡まり合う神経が軋み、泣き疲れたような虚無感で脳がじんと痺れた。

籠から溢れた紙を口にも咥えて踊り子たちが捌けていく。楽団員たちが足元の酒を飲み調弦を始める。赤い絨毯の床は大量の紙の欠片が落ち疎らに溶けだした雪のようだ。少年は床に座り込んだ。近くのソファーに座っていた恰幅の良い男がなんだこのガキと少年の顔を覗き込む。おい、薄汚え犬コロみたいじゃねえか、なんだお前こんなもん見たくてノコロコ入ってきたのか？ 助平なガキだねえ近所の小屋じゃ物足りねえか、ああ？これがそんなに面白いのか？ おいどうなんだ、おもしれえか。ぐっぐっぐと喉に押さえ込むような不快な笑い方をする男だった。少年は男を無視した。

また煩わしい喧騒が少年を包んだ。厚い布だ。息が出来ない、丈夫な膜に閉じ込められている感覚、

ああ蝉の声が聞きたいと少年は思った。耳を劈くような命の震えを聞きたい、たとえそれが死んだら無意味な存在のように思われたとしても。

初め少年はなにも聞こえないと思った。彼の心はひとり、太陽がちょうど真上に昇ったゴミ山の中に居た。蝉の声が耳を塞ぐ。劇場の騒々しさはもう頭の中から消えている。いや、まだ聞こえる。幽かに、冷たい霧のように時々頬を冷やす、雑音とはまた違うなにか。

切れ味の鋭いメスが少年を包む布に一筋の切れ目を入れたようだった。少年は、いつの間にか閉じていた目を開けた。歌声が聞こえる。ざわめきの中で決して突出するような大きな声ではない。けれど不思議な声だ。その声は人混みの一人ひとりに向かって、あたしの父さん知りませんか、この前出て行ったきり帰ってこないあたしの父さん知りませんかと尋ねているような、その訴えに立ち止まらず通り過ぎて行ったひとりの男が百メートル先の駅に着いて列車を待っている時、ふと、さつき私を見ていたあ

の娘の目を見てやればよかつたとぼんやり思い、そして目の前を通過する列車の音で何もかもをすっかり忘れてしまうような、そんな声だった。

ひとり、またひとりと客たちがその歌声に気付き始め、持っていたグラスを置き口を噤む。楽団員以外、舞台には誰も居ない。薄暗い会場の中で皆が声の主を探している。少年は立ち上がって蜘蛛の糸のように細い歌声を手繰り寄せるようにして歩き出した。誰かが舞台にいる。男たちが口々に誰かいるぞと囁き合い、おい照らせあの女を照らせと叫ぶ。明かりをつける、違うそっちの舞台じゃない、中央のステージだ、あの丸いステージの上に女が立って歌っているぞ。歌声が大きくなる。輪郭を帯びてはつきりとした響きを持ち始める。言葉の意味はわからない。聞いたことのない外国語で呪文のようだ。突然強烈な光を放つピンスポットライトが、中央の円形舞台を煌煌と照らした。人々が感嘆の吐息を漏らす。リネンのワンピースを着たあの女が緩いステップを踏みながら知らない異国の歌を歌っている。白

い光の中で女の顔は砂のように色を無くし、モノクロ映画のフィルムを通して見るようだった。少年の側にいた男がなんて痩せっぽちな女だと嗤った。少年は再びカッと頬が熱くなり直ぐにでもこの男を黙らせてやりたい気持ちで一杯になった。女の声は最初、全身の毛穴から沁み込み、それから身動きが取れなくなる毒のように聴く者の身体に作用する。普段使わない神経を集中させないと掴めなくなってしまう静かな低いメロディーから始まり、深い息遣いで一気に歌い上げるような曲調へと変化して今や嵐の中へ引きずり込まれる感覚だ。女のステップが複雑なものになっていく。その足の動きに合わせて楽団員がタンバリンや太鼓を叩きリズムを浮かび上げさせ、弦楽器はピチカートでそのリズムに乗る。女が踊り出す。これも不思議な身のこなしだ。先ほどの踊り子たちのようにただクルクル回ったり腰を振っているだけの舞ではない。女のダンスは剥きだした表現だ。手を広げ髪を振り乱し、力強く床を蹴って舞台の端から端までを飛んでいく。腕の解放、脚

の解放、肉体の解放、人々を地上に縛り付ける抗うことのできない巨大な力から、女はたつたひとり解放されて飛んでいる。どこからともなく歓声が上がった。その興奮は波のように会場全体に波及する。

この女の薄い体に秘められた未知なるパワーが人々に救済の道を示している。少年は、自由という言葉の意味を思い出した。他の力に支配されず、自らの心に、意志に忠実であるという状態。女の躰は女の思うがままに操られ、女が女以外の何者でもないことを証明する。誰もが自身の輪郭を失った今、女だけが自分の心が示す方へと四肢を投げ出し、声を上げて、魂を解放している。この世界で女だけは確かなものとして存在している。女の輪郭線に縁取られた声や躰は、生きる喜びに震える小さな希望を、人々の胸の中に確かに灯してくれる。生きる理由のすべての鍵をこの女が持っているのではないかと錯覚してしまふ危うさに、少年の心は一度死んだ状態から再び蘇生されたように一際大きく戦慄いた。俺が女と出会ったことは、と少年は思った。偶然なんかじ

やない、俺が引き寄せた運命だ、あの女は、あの女こそが俺が求めていた希望そのものだったんだ。

2

女は劇場でキョウコという名をもらい働き始めた。鮮烈なデビューのせいで彼女の人気は最初から驚異的に高かった。キョウコは他の踊り子と混じって裸になり布を振る踊りを嫌がった。その気高さが男たちをさらに夢中にさせた。ステージの上でキョウコは決して必要以上に肌を見せない。布をたっぷり使った美しいドレスを着て誰もいないステージの上で独唱する。時々客のリクエストに応じて踊る。それはラテンのリズムであったりモダンバレエの類であったりした。男の中にはキョウコとチャチャチャを踊ろうと広場に誘い出す者もいた。

少年は足繫く劇場に通うようになった。家にも帰らず夜通し劇場で過ごすことも屢々あった。入り浸り始めた少年を気に入った客たちは、煙草の吸い方を教え高価な酒を飲み比べさせ、この世の成り立ちと

男と女の関係について語って聞かせた。少年は差し出されたものはどれも試してみたが一向に心が晴れる様子はなかった。大人たちはそんな少年を、まだ子供だと笑った。少年は適当な愛想笑いを浮かべながらこれらの嗜好品こそ子供騙しのニセモノに過ぎないとひっそり思った。肉体の奴隷になり下がる快樂の類では、自分の惨めさを忘れることは到底できないことを彼はわかっていた。たったひとつ、身が焦がれるほど欲しているものは決して心が麻痺したことによって得られる悦樂ではない。少年は大人たちが与えてはくれない心からの生の共鳴を、キョウコの中にだけ見出すことができた。キョウコだけがこの世界で唯一信じられるものでそれを疑うことは野暮だと思った。少年はキョウコに自分の輪郭を見出そうとした。銀色の光を浴びて歌うキョウコの、息を吸う度に震える白い喉を眺めているとそこが真っ白な夜の砂漠のように見えると思った。この曲線がどこまで続いていくのだろうかと宇宙空間的な妄想にとらわれると、青い静脈が走る白い肌の砂漠と

その先に広がる真っ暗な闇がストロボのように強烈な瞬きを残して、その光景が臉の裏に灼きつき火傷にも似た痛みで全身が疼くような気がした。キョウコの歌声はこの世の中の煩わしさから耳を塞いでくれる、守られていると無条件に信じたくなる。俺が感じてきた、自分自身が剝奪されているという気が狂うほどの恐怖をこの女は丸ごと知っているような気がするのだった。ならば俺の輪郭はキョウコの中で生きていけばいい、そう考えられればずっと苦しんでいた心も幾分か楽になる。

夜が更ける頃、ステージの明かりが消され客たちが疎らになり始めると、少年はキョウコと劇場裏の階段に腰掛け、遠くの空で星々がスッポトライトのように一つずつ消えていく様を眺めた。東の空から薄い氷膜のような青白い光が徐々に広がっていく光景に見蕩れながら二人は夜明けを待った。

タバコくれない？とキョウコが手を差し出し、少年はポケットから角の潰れた煙草の箱を取り出すと一本を引き抜いてキョウコの指に挟んでやった。パ

フォーマンスを終え夢から覚めたばかりのキョウコは信じられないくらいイノセントな微笑い方で、スクリーンの向こう側で生きている本物の女優のようだと思った。キョウコは受け取った煙草を啜え、このためだけに生きているようなものねとひどく感情を失った声で呟いた。少年は無言のままポケットの中のライターを指だけで探した。

キョウコは猫毛のような煙を燻らせながら、ああ思いつくわねと独り言を言い、気持ちよさそうにもう一口吸った。

「において、どんなものより鮮明に記憶を蘇らせてくれるものよね、なぜかしら？ きつと嘘を吐けないからね、あたし達って、見たいように見て聞きたいように聞いてしまうから時間が経ってしまうと何を信じていいのか分からなくなってしまうんだもの、においては、無意識に入ってくる情報だからきつと嘘を吐く暇がないんでしょうね」

それがどういったことなのか少年にはまだ理解できなかつた。そこで彼は何を思い出したのかと尋ね

た。するとキョウコは突然、初めて聞くようなヒステリックな笑いを漏らして、そんなことが気になるなんてあなた変わってるわねと言った。神経を逆撫でするような嫌な響きが、静まり返った裏口にこたました。少年が固まっていると一頻り済んだキョウコはまた微笑の形に唇を歪めた。

「どうってことはないんだけど、これとまったく同じ銘柄の薄荷入りの煙草を盗んだことがあってね、その時のことをまざまざと思い出されるから嫌なよ、向こうにいた時の話よ、あたしはあの時歌手でダンサーで女優だったの、稀に見るでしょ、身体を極限まで扱い倒すことができる人間がたまにいるの、あたしはそうだった、それでも向こうでは皆があたしのことを有名人だの売れっ子だの思っていたかなんてことは、聞かないでちょうだいね、決して知られているような歌手でもダンサーでもなかったわ、女優になるつもりはなかったけど一度や二度ロマンス映画に出てみるのも悪くないかと思ったの、あたしの友人はいつも外国風な映画ばかり撮っていてね、

頼まれる役はいつもお金持ちで世間知らずな女の子ばかりよ、お相手の方も、もう必ず決まって身分は低くとも真面目で誠実で愛情深い方、あたし達はいつもローマやらパリやらスペインに呼び出されて売れない映画を撮っていたの、賞も取ったことないやつね、今思えばその時の思い出はそれなりに楽しいものばかりだったわね。あたしが歌手でダンサーで女優だった時、シャンペン毎日飲めたし恋人もあたしを世界で一番美しいと言ってキスをくれたわ、それはもう幸せよ、あたしはあの人を愛していた、歌うことも踊ることもあの人という時はどうでもよくなった、人魚姫のように声も心も何もかも失ったって、あの人と永遠に生きる権利をもらえるならあたしはよかった、あの人と出会うまであたしが生きる意味は歌うことと踊ることだけ、それってとても苦しいことよ、想像してみて？ あたしが歌うのも踊るのも生きていくためにただそうしているだけなのよ、それって生きるためにお酒を飲む人や注射器を自分の身体に打つ人と何が違うっていうの？ で

もあの人という時はあたしはそういった人たちとは違う生き方ができると思った、あたしは毎夜コンサート会場やお金持ちのパーティーに呼ばれて、そこにいる幸福に満ち足りた人のために歌ったわ、大勢の女の子たちと一緒におもてなしをすることもあった、パーティー会場の広い楽屋でお化粧をして、あたしは世界一綺麗な娼婦になったつもりで一番いい香水を振り掛けるの、みんなはもうとっくに行ってしまうってあたしひとりだった、今となってはどうしてそういうことをしてしまったのかわからないけど、あの時あたしは女の子たちのロッカーを一つずつ開けていって、そしたら綺麗な赤いエナメルの靴を見つけたものだから開けてみると、処方薬と煙草と、あとシトリンの指輪が出てきて、それをなんとなく暫く眺めているうちにふと盗ってしまったらどうなるかしらと思った、シトリンなんか全然好きじゃなかったし、石も大きくて厚化粧のマダムがつけてそんな趣味の悪い指輪だったわ、だけどあたしそれを盗ったの、みんなが帰り支度をしている時あの赤い



ご存じですかって聞いた、あたしが答えないでいると泥棒が入っているからお話を聞かせてくださいってあたしの手を掴もうとして、嫌、って声が物凄く大きく出て、あたしは自分で驚いて訳もなく涙が溢れたので逃げ出したの、逃げながら、もしここであの二人の男があたしを追いかけて捕まえてくれたなら、今日でこの理由のない苦しみのすべても終わらせてくれるんじゃないかって、ぼとりと一滴の虚しい期待が滲むみたいで、あるうことか古い友人を待ち侘びるような愚かしい親しみのようなものさえ込めて待つていたけど、結局あの二人はあたしを見つけて出して捕まえることはなかった、ねえ、あの人はあたしを待つているかしら、あの人はあたしを待つているかしら」

背筋にすーっと冷たいものが伝う感覚があり、少年はただキョウコを見つめることしかできなかった。空が白み始めている。夜明けの街はまだ青くキョウコの肌も髪も青く染め出されて、まるでまだ夢を見ているようだ。街はまだ眠りの魔法から覚めない。

今どこかの部屋で子どもの頃に見た悪夢に魘されて目を覚まし泣いている者や、明け方の空を見ながら首を吊った者がいたとしても、この魔法は解けないだろうと思つた。頑丈で強力な力がまだ覚めるなど人々を眠らせ続けている。少年は立ち上がった。今はただ早く眠りたい気持ちでいっぱいだった。

黒いゴム長靴の少年が種子を探している。うんざりするほど盛られた腐ったゴミをどけながら、ありもしない幻の種子を探している。その様子を少年は見ている。暫く顔を合わせない間にゴム長靴の少年は種子探し以外にも、煙突塔での掃除や火の番の仕事任せられていた。日替わりなんだ、とゴム長靴の少年は言つて、血生臭いゴミ袋の下から緑色に変色した半透明の液体が入ったボトルを注意深く持ち上げて、バナナの束が捨ててあつた間に置いた。だから長靴は心置きなく使つてくれていいからな、俺は煙突塔の番の日はそこに置いてある靴を履くから

さ。

また半透明の液に満ちたボトルが出てきた。今度は腐った卵の色をしている。容器の内部でガスのようなものが発生してボトルは極限状態にまで膨らんでいる。なあ、こういうのって蓋の隙間から漏れている気体を吸うと毒だったりするんだろ？ ゴム長靴の少年が不安気に尋ねた。

さあな、座り込んで様子を見ていた少年は、恐る恐るボトルを運んでいるゴム長靴の少年の反応を楽しんでいる。何かの拍子に破裂するかもしれないぞ。ゴム長靴の少年が今まさにボトルを置こうと屈み込んだ時、見計らっていた少年が叫んだ。気をつけろよ、その液体は皮膚にかかると一気に燃えるように熱くなって、液体を被ってない所にまで玉のような湿疹ができるんだ、人によっては皮膚が溶け落ちてずる剥けになるぞ。

ボトルを取り落としそうになった少年が声を震わせ、ふざけんなよと本気で怒った。そういう出鱈目を言って楽しいか？ 俺が今真剣にやっているのに、

お前は座り込んでやる事といえば俺をおちよくることだけか。ボトルを置いた少年は近くのゴミ山から腐ったバナナの皮を拾い、地べたで笑い転げている少年に向かって振りかぶって投げた。ペしやりと音がして皮は笑っていた少年の腹に張りついた。このためえ、返してやるよ、起き上った少年は少し崩れたバナナの皮をシャツから引つ剥がして、力任せに向こうにいる少年に投げる。ゴム長靴の少年はバナナの房の山に隠れ攻撃を見送った。二人は向きになり同時に大量の黒くなったバナナの皮を両手いっぱい投げつけた。気付けば二人の間ではバナナ戦争が勃発していた。散り散りになったバナナ皮の弾丸が、白く霞んだ青空の下で行き交う。夢中になった少年たちの頬や髪や耳は黒く溶けたバナナの粘り気で濡れている。息も絶え絶えになり暑さで目が眩み始めた頃、二人は朦朧とした頭で煙突塔下の比較的きれいな地面に転がり、荒い呼吸で胸が上下するのを落ち着くまで待つてから終戦協定を結んだ。戦争の跡地には黒く飛び散った弾丸の跡がそこら中を汚

していた。酷い有様だなど二人は顔を見合わせ、暫くは黙って空を見た。

風が吹いている。眠気を誘うような穏やかな風だ。遙か彼方の空で鳥が飛んでいる。ゴミ処理場に巢食う黒くて大きな鳥が、地面から遠ざかった高い空を飛んでいる時だけは針の点のように小さく見える。

こんな所にいるのはいやだ。驚くほど素直な声が少年の口をついた。ゴム長靴の少年はそうだなとだけ言った。

「なあ、ここを抜け出して街に出ないか」

「街に？」

「ああ、俺は最近よく街に行くんだ。前に丘を下る途中で会ったあの女のこと、憶えてるか？あの女は今、街で働いている。俺たちもきつと街でなんらかの仕事にありつけるはずさ。ここよりずっといい暮らしができる」

「そうかもな」

「そうだとよ」

「でも、俺は行かないよ」

少年は驚いて身を起こした。ゴム長靴の少年は真っ直ぐに空だけを見ている。

「どうしてだよ」

「どうもこうもないさ」

「こんな臭くて汚れた場所に嫌気が差さないのか？お前は、ずっとこのまま、こんな惨めな場所に閉じ籠って一生を送る気なのか？」

「それはわからない、けど今は行かないよ」

「今だっていつかだって同じはずだ」

「同じじゃないさ」

ゴム長靴の少年が此方を向いて、少年の目をじっと見つめる。

「いいかい、お前はいつだって今を生きていない。

俺たちの仕事はゴミ処理場で使えそうなものを探して、それを売って、要らないものを燃やす、都市の人間が捨てたものをまた俺たちが使う、そうやって俺たちの暮らしは成り立っているんだ。俺はここで生まれた、都市の人間でも一世紀先の未来に生まれた人間でもなく、今ここに居るんだぜ。ここで暮ら

していくからには俺は働かなきゃならない、それが今だ、今を生きるってことだろ。この仕事は臭いし危険だし誰もやりたがらねえ仕事だよ、でもこれが与えられた俺の場所だ。家族もいるし飯も食える、俺は明日一日を生きたくて、そのための金を稼ごうとしてここで働いているだけだ」

そう言うとは彼はまた首の位置を戻し空を見上げた。少年は湧き出る感情と言葉が胸に痞えて、すぐには返事をする事ができなかった。つまり、結局はお前もこの場所に満足してただけなんだ、少年は言葉になつたその一言だけ吐き出して、あとはまた何とも言えずに口を噤んだ。ただ何かが、自分とゴム長靴の少年との間にははつきりと異なる何かがあり、それが二人を隔てる一本の亀裂のように走っていると少年は感じた。俺に何か欠けているのか、それともあいつにはない感覚を俺が持っているだけなのか、少年はただ黙って背を向けることしかできなかった。

お前は街に行きなよ。ゴム長靴の少年が言った。

お前はきつと人間の本能に忠実なんだ、人は求めて、求めて、それでいろんなものを発達させてきた、お前はきつとそうなんじゃないのかなあ。

きつと俺とは違うんだ。ゴム長靴の少年がそう呟くのが聞こえた。少年は立ち上がりゴミ処理場の鉄条網を潜り抜けると、丘を降りて行った。

3

少年は劇場でキョウコ以外の女とも知り合った。瑠璃子は一番人気の踊り子で、キョウコが来るまでは中央の舞台を使うのは瑠璃子ただ一人だけだった。瑠璃子は劇場の女たちの中では最も経歴が長く最年長だったが、誰が見ても溜息が漏れるほどの美貌と、ヴィーナスのような豊満で美しい体型を保っていた。声は深いヴィオラのような音色で、滑舌の良いはつきりした物言いで他の踊り子たちからも慕われていた。

詰まる所、今の私はあの子たちの世話係なんですよと瑠璃子は客たちに笑って見せた。紳士たちが白

い手袋をした瑠璃子の指に煙草を挟ませる。

「あら、待つて細いのにしてくださる？ 私いつもそれしか吸わないのご存じなかったかしら？ 私は商売女ですから毎日何本も何本もお客様から火を点けていただくんですけど、これは太いのより数十分は早く吸い終わるんです。煙草が燃え尽きたら次のお客様のお相手をするんですよ、夜は短いですからね。でもそんながつかりしたお顔をなさらないで、今はお喋りを楽しみましょう、ねえ火を点けてちょうだい」

瑠璃子は少年にも此方へ来て紳士たちの間に座るよう言った。「彼は私が最近気にかけてる子よ、紹介させてちょうだい。」少年が立ち尽くしていると、あらあらと瑠璃子は白い歯をこぼして微笑んだ。

「そうだわ、何方か、あの子に服を買ってやつてくださらない？ あの子はキョウコさんの小さなナイトなの、勇敢で賢くて思慮深い子ですわ。今だって立場を弁えて決して皆さんのお傍には座りたがらないでしょう、あの子は今はたしかに身が窄る様では

ありますけど、身体の中には勇者の血が流れている子よ」

紳士たちは嬉々として懐に手を突っ込んだ。次々と瑠璃子の目の前に本物のお札が積まれていく。瑠璃子はもう一度少年を呼んだ。毒々しい花卉のような唇がいらつしゃいとゆっくり動かされる。瑠璃子の微笑はあの都市に立つ巨大な広告塔の女にそっくりだ。離れていても必ず引き寄せられるようにして視線が合う。少年は瑠璃子の側へ行った。これはぜひんぶ貴方のもの、瑠璃子は両手で掬った紙幣の山を少年の腕の中にそっくり落としした。

「これで新しい服や靴や帽子を買いなさい。街にはお金を出せば良いものが買えるはずだわ。それでももし気に入らなかつたら都市に買いに行つてくれる人に言つて、任せなさいね」

少年は口の中でありがとう、と舐め過ぎて小さくなった飴玉のようになった言葉を転がす感覚で一応のお札を言った。ズボンのポケットは煙草の箱と札束で膨らんだ。歩きながら指で触つて本物の紙幣か

どうか確認する。ざらつく紙の感触、本当にこの紙切れが俺たちが毎日必死で稼いでいる金つてやつなのか。少年はホールに入った。踊り子たちが舞っている。東洋風の音楽に合わせて裸の躰を揺らしている。この札束を見せたらゴム長靴の少年は一緒に街へ来てくれただろうか。少年は考える。ポケットの膨らみを服の上から触る。なんだろうこの気持ちは、あの時と似ている、ゴミ山の翳で蟬の死骸が落ちる音を聞いた時の、あの感覚、きらきら光る青い鉛筆削りの、あの音に似ているんだ。なんだろうこれは、信じたかったものが実はそうでもなかったんだと気付いて、汗が体中を溶かすから俺はあの昼下がりのゴミ山の中で死ぬほど惨めな気持ちになった、日が高く昇ると建物の影も人影も一層濃くなり、凜と浮き上がって輪郭線が作られる、俺はそういう時自分の輪郭だけがどんどん薄くなって見えなくなる、自分の存在と、信じてもいいものがわからなくなる。少年はポケットの中の数枚の札を握りしめた。今手にしているこの金も、輪郭がない、掴みどころがない

いんだ、生きていくためには金が必要なのに、いざ手にしてみると生きている実感がまったく湧いてこないのはなぜだろう。

少年はホールを抜けて暗い廊下に出た。進むにつれ背後で音楽が遠ざかっていく。突き当りまで行くとそこから非常階段が上へと伸びている。少年は手摺を掴み一段ずつ上って行った。夜の風が生温い。突如巻き起こる絡みつくような熱風に少年の足は幾度も取られそうになる。二階に上がるとまた暗い廊下が奥へと続いていく。廊下の両側の壁には扉がいくつもあり、それは倉庫だったり衣裳部屋だったりするのだろうと思った。扉はどれも閉まっていた。廊下は静まり返っている。しかし少年は歩を進める度、この湿り気を帯びた洞穴のような空間にどこか異様な雰囲気を感じ取った。扉の一つに手を置いてみる。十秒も経つとまさかと思っていた疑いが確信に変わった。ゴミ処理場の腐った魚の腸に集る黒くて小さな羽虫が悍ましく刺めているように、この中で何人かの人間がくつつき合

っている気配があつた。この部屋でなにか気味の悪い出来事が起こっていることを少年は瞬間的に予感した。鳥肌か汗か区別できないものが首の辺りの皮膚を覆つた。

廊下は右に曲がっている。少年はさらに奥へと進んだ。また扉がある廊下だ。何部屋もある。右の壁にある三番目の扉が僅かに開いている。少年は耳の奥で疼く痛みと呼応するように脈打つ心臓を抑え込み、そつと部屋の中を覗いた。

暗い空間に青い間接照明が一つ置いてある。弱々しい青い光が部屋に満ちた闇を海の底に変えるようだ。そこに少女がひとり居た。彼女の足元に銀色の爪切りが転がっている。少年は最初、子どもだと思つた。それは小さな身体をさらに小さく丸めて座っていたのと、抱え込んだ膝に埋めた頭から目だけが此方を覗き、その様子が子どもが外の様子を窺つたり大人に向かつて何かを訊ねる時にする、あのじつと睨むような上目遣いを思い出させたからだつた。少女は黒い肌と縮れた黒い髪をしていて、白目とそ

の中央の大きな黒目だけが暗がりの中でやたらはつきりと浮かび上がつていた。

「あんた子どもだ」

少女は微動だにしないまま、少女らしからぬ低い声で言つた。

少年はなにも言えずただそこに突つ立つていた。そうして少女の目がカメラのレンズのように閉じたり開いたりするのを見ていた。そのうち飽きたように臉が閉じられ少女の顔は闇の中へ溶け込んでしまつた。

「……タバコ吸うか？」

やつと喉から絞り出された言葉は自分でもがっかりするようなものだつた。少女の臉がまたゆっくり持ち上げられ「いい」という言葉とともにまた閉じられた。

「もつといいものがあるから」

「いいものつて……？」

少女の目が再び開き、膝の上から頭を起き上げさせた。そして部屋の隅の棚を探り小さなコップを少

年の方に差し出した。その指先にくつついた小さな爪は痛々しいほどの深爪で全体の半分ほどの長さにまで咬み千切られた跡があった。受け取ったコップの底に溜まった液体から腐った水の臭いがする。この街の水道を捻るとこの家からもこの臭いのする水が出てくる。透き通った水でも、口元に持つていくと薄まった下水のような独特の臭いが鼻を衝くのだった。少女は二つの瓶を持って少年の傍まで来ると、一つの瓶から無色透明の液体をほんの少し注ぎ、それから二つ目の瓶から琥珀色の液体を半分注ぎ入れた。

「飲んでいいよ」

鼻に近付けると酒の匂いがした。琥珀色の液体は強烈なブランドデーだった。少年は口をつけずにこれはなんだと聞いた。少女は明らかに機嫌を損ねた顔をした。

「要らないならいい」

少女は少年の手からコップを奪うと、一気に中身を叩ってしまった。少年は手だけを奪われた形のまま

ま伸ばして、呆然としていた。少女はコップを地べたに置き、ついてきてと少年を手招いた。二人は足音を忍ばせ反対の壁の扉の前へ来た。少女はその戸に手を掛け、動いているのかわからないくらいのスビードで慎重に扉をずらし始めた。少年に止める手段はなかった。少女が振り向いて何か囁くように唇を動かしている。少年は暗がりの中をそつと覗き込んだ。

中で二人の人間が折り重なっている。赤い間接照明がその背後にある。この位置からでは動きの詳細はわからないが、少年はいやな予感が当たり吐き気がした。二人の人間は暗闇の中で人の形を無くし一匹の大きな獣のように見えた。しかしその闇の中で指と思しきものが、もう一人の人間の体をなぞっていく、その線を辿ると女の形が露わになっていくのがわかった。自分を自分として生きていくための輪郭線を手放した者たちが、男の手によって女の人生の輪郭を与えられていく。その与える側の男たちのなんと輪郭線の太いことだろう。自分の存在を疑う

こともなくただ恍惚とした表情で一人の人間を女として造り替えていく。

重なって動いていた男が突如あの蟬のようなぎい、という音を出して動かなくなつた。あとには二人分の荒い息遣いが聞こえるだけだつた。反射的な嫌悪が少年をその場から立ち去らせた。劇場の中は黒い蟲でいっぱいだ。朽ちた木の中に住んでいる固い殻を持った小さな蟲、どこに行つたつて俺の周りから振り払うことができず影のように付きまとう。少女の低く幼い声が細い煙のようになどどこまでもついてくる。さっきの飲み物はね、私のところに来るお客さんが毎回持つてきてくれるもの、早く眠れるようになるおまじない、あの瓶の中のを薄めて飲めば少しずつ目が覚めてる時間が短くなるの、あのお客さんは工場か何かをやつていて、それが倒産して潰れてしまった時には家族みんなでこれを薄めて飲んで、工場でしか手に入らない薬品なんだつて。

少年は追ってくるその声を振り切ろうとして無我夢中で走り出した。少女の方を振り返りたくなくなつ

た。どうしてなのだろうという何に對しての疑問なのかもわからない思いが頭から溢れ、それが口や鼻や目から止めどなく流れ出し全身を包み込んでいくようだった。

ああ、これが俺をいつも包む厚い布だつたんだ。少年は非常階段を下りながら、自分の帰る場所はどこにもないと思つて涙がとまらなくなつた。

## 4

キョウコはハンドバックからいつも吸っている細い煙草を取り出して、一本だけだからと誰に許しを乞うのか、言い訳めいた口調で呟いてから火を点けた。それから百貨店の最上階にあるレストランまで昇り、窓際の広い席に通されてから羊と教会の絵が描かれたワインを飲んだ。赤は大抵気分が悪くなるから白を飲んだ。料理が出てきて、よくわからない豆のスープと赤ワインで煮込んだ牛すじ肉を銀色の輪の中で固めて、小さな丸い舞台のように盛り付けたものを食べた。肉の舞台には葎が添えてあつた。

キョウコは生クリームでマッシュしたポテトも注文し皿に残った赤ワインのソースと絡めた。都市のものと比べれば値段も味も最上階の位置も低かったが、ワインが美味しかったのでここが地上四十メートルの場所にあるホテルのレストランでフォアグラのポワレを食べた後だと思ふこともできた。キョウコは都市の方角を眺めた。明かりが灯っている。もうかなり遅い時間だ。百貨店の中でもこの店だけが最後まで営業を続けている。まもなくウエイターがそろそろお時間ですと告げにやってくるだろう。キョウコは都市に戻って、よく恋人が連れて行ってくれたバーにまた行きたいと思った。カラフルな色のカクテルを何杯も飲ませてくれて、帰り道は男に手を引かれながら道端と一緒に踊った。あの時間に帰れるならあたし本当に何もいらぬのに。キョウコは溜息を呑みこむようにまたワインを一口飲んだ。ついこの間まで何を食べても胃が受け付けなくて胃液だけできた吐瀉物が忙しく込み上げてくる日が続いたが、今度は胃の中には常に物を詰め込んでおきた

い気分だった。キョウコの鞆の中には、もう随分と経った使用済みの妊娠検査薬がティッシュペーパーに包まれて、未だ大切に入っている。時間の流れなんてまるで意識したことはなかったのに、一週間が過ぎるとまた身体のどこかが変化が生じて違和感が深まるようで、刻々と迫る時限爆弾の中で生きている気がした。あたしはあの検査薬の丸い小さな窓に一本の線がスツと入った時から、ずっとこの得体の知れない焦燥感を感じている。キョウコはスカートの上からそつと下腹部に触れた。いつまであたしはあの劇場で女を演じられるだろう。臍の下の張った皮膚の奥で、まだヒトの形には到底及ばない小さな肉の破片を孕んだ子宮が脈打っている。あの人の血が流れているのだと思うと、思わず我慢できなくなつて唇から笑みが零れた。掌に伝わるこの命の音が天国へのカウントダウンなのだ。あの人はよくあたしの頬に触れながら、僕たちの間に子どもができたらその子は本当に美しい天使のような顔をしているだろうねと笑っていた。あたしはそういう話をする

時の、あの人の幸せそうな顔が好きだったからその時はにこにこしていたけど、心の中でこの人は生まれてこの方、一度も子どもの顔つてものをじっくり眺めたことがないんじゃないかって本気で思ってたわ、でなかったらどうしてそんなことが言えるのだろう。

あの人は、子どもの眼が何よりも現実を映すってことを知らずに生きてきた人なのね、あたしから生まれてくる子どもはあたしの現実から生まれてくるのよ、それなら天使じゃなくて人間の子でしかないじゃないの、あたしに恨みを持った目をした人間の子どもよ、あたしはその目を知っている、だからあたしの中にいる子は、あの人の血が流れてはいるけど、決してあの人から授かった子どもではないはずなのよ、誰が父親になったってあたしから生まれてくる子は最初から既に決まっているの、誰の影響も受けないのだから。

ウエイターが恭しい態度で傍に近付いて、お客様失礼いたします今日はもう店仕舞いですと滑らかな口調で言った。店の中にはもうキョウコしか残って

いなかった。ガラスの底で揺れた最後の一口があの人濡れた瞳に見えて、ガラスの脚を名残惜しそうになぞってからキョウコはウエイターに礼を言い店を出た。

ゴム長靴の少年が死んだ。都市の一角にある化学工場が捨てた廃棄物の中にくつかの劇薬が混ざっていたらしかった。あの時、煙突塔で仕事をしていた少年は何らかの形でその化学物質を吸い込んで小さな身体の中に猛烈な速さで毒が回るのを感じたのだった。発見された時には既に憔悴しきって動けなくなっていた。呼び掛けても反応がない。白目を剥いて浮袋のように軽い死体になっていったと一緒に働いていたスラムの人間が教えてくれた。ゴム長靴の少年は火葬され、その灰は彼の家の庭に撒かれた。家の中庭にあたる本当に狭い場所だったが、そこには色々な形の葉をした多肉植物や背丈の違う果樹が身を寄せ合うようにして植えられ、見事に咲き誇っ

たゼラニウム鉢も置かれていた。美しい庭園はゴム長靴の少年がゴミ処理場から少しづつ拾い集めて来た種子や苗から生まれたものだった。

あの子が言ったんです、と彼の母親が言った。自分がもし骨になったら必ず灰にして植物の近くに撒いてくれて、ほらご覧の通りあの子は木やら花やらが好きだったもんですから。やつれた顔だったが笑うとあの優しい気な少年の面影があった。母親は気を遣ってお茶やお菓子を振舞ってくれたが庭を見ながら不意に、ちよつと、と顔を背け白いハンカチの裾で涙を拭ったのを見て、少年はカップの中に満たされた赤褐色の液体に視線を落とし膝の上で両手を強く握り合わせた。

日が暮れかけ少年が帰ろうとした時、彼の母親が「これを」と言つて玄関先まで追いかけてきた。差し出されたものはあの黒いゴム長靴だった。乾いた土が白くこびり付いて靴底には土と一緒に押された草の切れ端がくっついていてる。

あなたと仕事をするとときに交互に使っているって、

あの子が言っていました。

ゴム長靴を受け取った少年は、死んだ友人の母親の柔らかく温かい声を聞いた。危ないからね、あそこは、気を付けてね、あの子のようにならないで。

母親は少年が見えなくなるまで手を振った。

夕陽が燃えている。なんの役にも立たなかったゴム長靴を両手に抱えて、少年は当てもなく街を彷徨う。まるで真昼の暗い部屋で見る悪夢のようだ。俺は悲鳴を上げ飛び起きて、本当に自分が狂っているのではないかと思っている。舌先にざらりとした気味の悪い夢の後味がまだ残っていて、俺の人生のすべては舌先に乗った質の悪い夢の残骸に違いないと、それでもなければ俺は自分が崩れていく感覚に歯止めが利かなくなつて、もう二度と自分が誰だったかを思い出すこともできなくなるだろう。

眠つた分だけ夢を見て、夢を見た分だけ弱くなつた。悪夢に魘されていたあの部屋はいつか本当の殺人現場になつてしまうかもしれない。少年はゴム長靴を抱きしめた。蒸れたゴムの匂いが鼻を突い

て無意識に奥歯を噛み締めた。もし誰かがそこで眠っている俺を発見したなら、俺はもう死体と呼ばれてしまうかもしれない、手足を折り曲げて祈る胎児のポーズをした少年の死体だと。

## 5

女という生き物の中には決して消えることのない希望の灯がともっている。それは体の構造上、命を生み出すためのシステムが組み込まれているからなのか、その声や息遣いが本能を呼び覚ます性質を孕んでいるからなのかは定かではないが、人々は己の都合で女に限りなく神秘的な神話を期待する。キョウコは神話になりつつあった。歌声を聴いた盲目の若者が次の朝目覚めると陽の光が見えるようになったとか、キョウコに触れられた腕の怪我が治ったとか、あの知らない異国の言葉は旧約聖書に書かれたもので、キョウコは神の力を伝えるに再び地上に降り立った使者だというものとか、とにかく人々は彼女に纏わる噂をそれぞれにしたがった。

少年はキョウコの中に只ならぬ絶望に近いものが顔を覗かせようとしていることを知っていた。少年と同じように、キョウコもまた追い詰められているのではないかと思った。キョウコはとっくに正常と狂気の境を見失っている。キョウコは空洞だ。そこに人々の様々な願いが注ぎ込まれ何様にも姿形を変えられていく。あの暗闇の中で男に抱かれていた女と何一つ変わらない。舞台に立ち男たちに囲まれたキョウコは誰よりも無抵抗だ。掌に杭を打たれ磔にされたキリストのように、希望という名の杭に打ち抜かれてもキョウコは微笑を絶やさない。卑しい人間がどれほどキョウコを求めても彼女の輪郭線は揺らぐことがなかった。キョウコの声も、その存在すらも、人々が想像するよりずっと力強く見え、人間が持つ可能性を超えてどこまでものびやかに広がっていくので、全ての人の心はその生命力が放つ不思議な美しさに奪われていた。男たちは熱狂的なまでにキョウコを支持し、危うい信仰心まで持ち始める者もいた。歯が抜けて黄ばんだ顔をした老人があ

人はわしの女神さまだよと言って手を合わせた。今までは木だの石だのを崇拜しとったがなあ、生身の女にはどんな神さんも敵わんの。瑠璃子はキョウコに夢中になる男たちを見ながら「白痴美好き」と呼んだ。

「男が女に夢中になる理由なんてものは一つだけよ。男たちは、想像力と戦争を起こす力を失ったの。時代のせいとも言えるし、わたしから言わせれば、自分で自分のことを考える力、熟考することを放棄してしまっただけのね。思考が止まって燃え滓みたいになった男たちって、その体から何が失われたのかにも気付かないしそんなことは気にも留めない、ある意味では幸せとも呼べるのかしら。能天気な人生だと言えるかもしれないけど実はそんなこともなくって、爪を失った猫、牙の無い虎、まあ何と呼んでもいいけど、その行き場のない本能を信仰心と暴力力によってしか変換することができなくなるのよ」

少年が黙っている。瑠璃子は煙草を灰皿に置き、ごめんなさいねと少年の頭を撫でた。

「キョウコさんのことを悪く言っているわけではないのよ。でもね、わたしは本当に長い間、この劇場で男も女もうんざりするほど見てきたの、それだけは確かなことでしょう？ だからわたしにはまだ誰も気付いていないような小さなさざ波が起こると、それがはつきりとわかるのよ。この場所はね、異常も異常、引き寄せられる人たちの中に健全な心は一つもない、わかっただけ？ ここに居る人間はみんな、ほんの少しずつおかしくなっていくのよ」

あなたも見たでしょ、二階の部屋。

瑠璃子が少年を見ている、壁に掛けられた肖像画のように優しい微笑を湛えて。彼は金縛りにあったように動けなくなった。

「でも世の中って本当に不思議なことだけど、うまくできているのよね。可哀そうな身の上の女ほど、男に優しく頭を撫でてもらうだけで気持ちよくなっちゃってもう惨めなことなんて考えなくなるの。可哀そうな犬みたいに撫でられてるだけなのにね。そういう時、彼女たちは思うんじゃないかしら。自分

たちはもうどうやったって女なんだ、って」

キョウコは裏口に座って、ひとり夜が明けるのを待っていた。手の中にはさつき客から貰った葉巻があつたが吸う気になれなかつた。長い期間続けた避妊薬と睡眠薬の併用が慢性的な悪心を引き起こし、嘔気は常にキョウコの臓器に巢食つて蝸局を巻いていたが最近の気分の悪さはもはや比べ物にならない。しないはずの味や臭いを身体が勝手に感じ取り、その度に尋常ではない鋭さを持った拒否反応が起こつて口の中はいつも酸っぱい味がする気がした。とうとう待ち侘びていたものがやつてくるんだわ、とキョウコは思う。張り詰めるような静けさのせいで耳の奥で幽かな耳鳴りがする。それは子どもが出す長い悲鳴のようだった。悲鳴は、宇宙の彼方から地球に向かって落ちてくる隕石に似て、冷たい岩の塊が落下の空気摩擦で徐々に熱を帯び、いつの間にか耳を劈くような高い音を立てて青い空気の中を燃

えていくイメージをキョウコの脳裏に再生させる。あたしはいつも一人でこの音を聞いていたのね。空を仰ぐと意味の無い涙が一筋流れた。涙は顫かみを伝つて耳の奥を濡らしていく。なんて悲しい音なのかとキョウコは思う。あの時はどうして自分がこんなにも不安になるのかわからなかつたけれど、今ならほんの少しだけわかることもあるわ、この悲鳴は、あたしがシトリンの指輪を盗んだり、あの人の部屋の中で手当たり次第に物を盗つた時と同じ性質を持つているんじゃないかしら、あたしの中で本当に最後の、人間としてまだ正常に機能する部分が悲鳴を上げたんだわ。

キョウコは自身の下腹部に触れながら、羊水を漂う塵のような肉の塊に向かって語り掛けた。聞こえて？ ねえ、こんな世界に生まれてこようとしているなんて本当なら馬鹿げた話のはずよね、あたしは生きていくことが素晴らしいなんて、これっぽっちも思わない、だってそんなことを知ってしまったら、あたしはどんどん惨めな生き物になっていくだけだ

とわかつているもの、あたしは何も考えなければ空っぽのまま、ただ律義に漲ってくる命を使うことができるのに、あたしの心が、性懲りもなくまだ悲鳴を上げているのよ、耳を塞いだってその音は指の隙間から侵入してきて、あたしはただ楽になりたいだけなのにそんなことは決して許さないと言うの、皆が眠りたがっているのに、宇宙の彼方の悲鳴が人々を眠りの底から引き揚げてしまうのよ、あなたは、あたしの中の悲鳴とまるで似ている、その悲鳴がまだ鳴っているのを聞くとあたしはまだ人間だということを実を思い出せるのよ、もうとつくにそんな下らない考えは忘れたと思っていたけれど、最後まであなたはあたしが人間で在るためにその原型を留めて戦ってくれていたような気がするわ、あなたはそんなこときつと望んでいなかったわよね。

この子が最初に発する声が悲鳴であったとしても、そんなあたしを許してくれるのだろうか。キョウコの腹はまだ陽の光に当たっていないのに、陽だまりのように温かった。小鳥のような小さな心臓の鼓動

を確かに感じる。

6

キョウコは少年の前から姿を消してしまった。キョウコを見ない日が幾日も続き、瑠璃子に尋ねても何も知らないと言う。

「勝手な人ね、キョウコさんも」

目を閉じるとキョウコの微笑が泡のように浮かんで消える。夢の中に残り残された人間だけがする現実味の無い薄ら笑いが、記憶の一番深いところで刺青のように刻まれて消えることはない。少年はキョウコを勝手だとは思わなかった。彼女は最初から誰のことも信じていなかったのだと今になって気付いていた。いつも此方に語り掛ける時は、その存在に一切関心のない醒めた目をしていて自分のためだけに告白を続けていたことを本当はわかっていた。

キョウコの、生きることに心底うんざりした眼を俺は知っていたんだ。キョウコが踊ったり歌ったりしている姿を見ていると、この人はこうまで弱ってい

るのにその肉体を動かす命はなんて重いのだろうとぼんやり考えたりした。

少年は劇場の掃除や女たちの世話を手伝った。あの太陽の下でゴミを拾っていた頃と比べて、肌の色が大分薄くなった。少年は徐々に都市への情熱を忘れていった。考える間もなく働いたからだだった。朝陽が昇りきったところで眠りにつき、陽がさんさんと差し込む昼下がりには起きた。少年の一日は玄関と広間の掃除と窓硝子を磨くことから始まる。それから踊り子の衣装を用意して、楽屋の女たちから何か頼まれ事をされた日は、店が閉まる前までにお使いに行き、その足で水や食料の買い出しに行った。少年は照明機材の使い方や舞台の装置についても学んだ。二階席よりも高い機材部屋で、ホリに映す色の作り方や特殊照明の使い方を教わり、スポットライトで踊り子を一晚中照らし続けることもした。小さな丸椅子の上に立ち、自分の頭より大きいライトを操作していると蟀谷の辺りに照明の熱波を感じてよく眩暈が起こった。そんな時少年は、あのゴミ処

理場で働いていた日々のことを思い出すのだった。陽射しが肌を灼く時の、生まれたばかりの新しい皮膚が剥き出した状態でヒリヒリとするあの感覚、キョウコに惹かれる心が感じた痛みと似ている。あのゴミ山で、俺は全身でこの世の中に溢れるすべてのものに敏感に反応していた、光が濃くなり風が強くなると新しい皮膚に生まれ変わった俺が全身の感覚を使つて生きたいと叫んでいた、俺はそんなに叫んでもいいものなのかと思つた、だつてあのゴミ山で俺の意思に関係なく人は死ぬし、もうどこにも逃げ道なんかなかったんだ。キョウコはどうしているのだろう、キョウコに会いたい、キョウコに俺の話をしてみたい、俺が生まれた時から、母親や父親の仕事のことや、死んだ友達と輪郭線の話を教えてあげたい、キョウコに俺の持つてゐるすべてを与えたいと思つた、キョウコが俺になんの見返りもなく生きる意味を与えてくれたように。

しかし突然キョウコは再び現れたのだった。それはキョウコが姿を消した日からもう何か月も過ぎた

蒸し暑い夕刻だった。日が暮れかけようとする時刻で劇場が最も忙しくなる時間帯に楽屋の方から女たちの怯えたような悲鳴が響いた。ホールで朝礼をしていた少年たちは只事ではない気配を感じて、一目散に裏へ回った。駆け込んだ先では踊り子たちが楽屋の外で身を寄せ合い「キョウコさんが」と口々に声を震わせた。女たちを押し退けて楽屋に入ると、目に飛び込んできたのはキョウコが瑠璃子に馬乗りになって泣き喚いている姿だった。黒服の男が飛び込んでキョウコを羽交い絞めにする。キョウコは発狂した。甲高いのに嗚れていて、壊れたバイオリンのような音だった。外で女たちがつられて叫ぶ、ねえ、だれかはやく、この気違いを止めなさいよ。掴まれていた瑠璃子が首元の衣装を緩め喘いだ。キョウコが泣いている。黒服に暴れないよう抑え込まれて、脚と腕をばたばたと死にかけの蛾のように動かしながら、大きな目も涙と共に溶け落ちてしまうくらいに泣きじゃくり、呪いの言葉を吐き続ける。瑠璃子はさっさと立ち上がってキョウコを見下ろした。

なによあなた、なにがそんなに悔しいのか言ってごらんなきい、そんな風に犬みたいな声を出して、そこまで自分の非を認められないの。

キョウコは肩を震わせたまま何も言わなかった。壁の傍で豪華な香水瓶が割れ、中の液が床に少しづつ広がっていく。少年は自分の中の時が止まったようだった。呼吸も心音も血液の巡りも凍り付いたように動きを止め、病院のベッドで横たわっている植人物人間の患者のように耳だけが音を拾い続けた。人々のさざめきに混じって瑠璃子の声が聞こえる。ええ、それで私が化粧をしていましたら後ろに座っている子が声を上げましてね、キョウコさんだって言うもんだから、まあどうしてたんですと聞きまして、楽屋の入り口にすっかり顔が蒼ざめて目の周りなんかも骸骨みたいに落ち窪んだ彼女が立っていて、暫くお会いしていない間に十も老けたような顔でしたから一体何があったのかと思ひ、私はそう尋ねました、キョウコさんは焦点の合わない目で何やらぶつぶつと言つて、まあそれは初めてお会いした時か

らそんな感じでしたけども、とにかく私が化粧台の前に座らせてブランドーを一杯飲ませますと少し落ち着いてきたようでした、私はキョウウコさんが喋り出すまで待つておりましたら、ご自分の方から、実は赤ちゃんを産みましてという風にご報告を受けたんです、そんな風に言われたらまあそれはおめでたいことですよと私も皆さんも祝福しました、それでもあの浮かない様子が消えませんでしたので、仕方なく私の方から何かあつて？と尋ねたんです、キョウウコさんは、女の子が生まれましてと言うから、まあ可愛いとか美人さんねとか皆が口々に誉めてくださったんですけど、次に、死んだんですと一言仰つて、もう皆さんしーんと静まり返つてしまいましたわ、私がお気の毒ねと言つて肩を抱いてやつたんですけど、聞くと定期健診も出産の準備も何もされていなかったようで、産んだのも病院ではなく下町の名前も知らない老婆の家だと聞いて、もう開いた口が塞がらなくて、私思わずどういうつもりで？と聞いてしまいました、それは色々な事情があることは

承知しておりますわ、だとしてもいざとなればどなたかに聞くこともできたはずでしょう？私が、キョウウコさんそんな生半可な気持ちじゃ子供を産み育てるなんてことはできないんですのよって言いましたら何ですって、ってキツと私の方を睨み付けるんです、私は何人もこの女の子達が同じように妊娠してここを去つて行つたのを見ていましたし、そういう子は大体がプライドが高くて人に頼るのを拒む傾向がありますわ、そうでしょ、覚悟を決めたつて結局は育て方もわからないし、花を枯らすみたいに赤ん坊を死なせるわけですから、本当の覚悟を見せなさいと、そう思うのです、形振りなんて構わずね、でも、聞く耳を持たない人には何をどう言つたつてもう届かないんですよ、彼女はまだ幻想の中だけで生きているようでしたから、それでは本物の命は扱えないでしょうよと私ははっきり言つてやりました、自分の命も使いこなせないのに他人の未来を信じることもなんて誰ができるでしょう、キョウウコさんはぼろぼろ泣き出して私を突き飛ばすと、母親に叱られ

た子供のように駄々を捏ねていたわけです。瑠璃子の声は楽屋の様々な声の中で漂っていた。安堵、嫌悪、軽蔑、無関心、不安、怒り、平穩、この小さな部屋に渦巻く人々の感情が、言葉を拾わずとも息遣いを辿るだけで空っぽの心に止めどなく流れ込んでくる。さあ皆さん、と瑠璃子が手を叩いた。ご迷惑をおかけして申し訳なかったわね、もう随分時間が経ってしまったわ、こうしちゃいられない、用意のできた方から表へ行って準備をしてちょうだい、ああ、キョウコさんはそのままここで休ませてあげなさい、ええ一人で大丈夫でしょうよ、さ、ぐずぐずしないで出てちょうだい。

もう誰もキョウコのことを見ようとしない。キョウコの輪郭線は忘れ去られあの生来の誇り高い威厳は娼婦が啜えた煙草の煙のように霧散してしまった。キョウコはキョウコという名前を失って、醜い痩せこけた女に成り下がった。かつて女の中に見出されていた希望の灯は一灯もない。キョウコの腕と脚は、もう二度と軽やかに宙を舞い踊り出すことはないよ

うに思えた。少年は黒服に引き摺られ楽屋を後にするしかなかった。キョウコの啜り泣きが最後まで尾を引いて少年の耳に届いていた。

客がいつものようにやって来て、酒を飲み、女たちが笑い、バイオリンの軽快な音色が楽しい夜を演出する。踊り子たちは明かりのない舞台袖に身を寄せ合い疾うに裸だ。自分の布に借りてきた香水を振ったり小さな丸い鏡を覗き込んで睫毛の具合を確かめたりしている。楽団員たちがステージに入った。

調弦が始まり会場はまるでクラシックコンサートでも始まりそうな雰囲気だ。少年はすべてのスポットライトのコンセントを挿して回った。演奏は突然始まる。楽団員たちのタイミングで最初の曲が流れだすと、一人の若い踊り子が舞台中央の袖から出てくる。プリマのように客の視線はその踊り子にだけ注がれる。少しづつ踊り子を覆う布が剥がれていき、両手を広げ大きな円を描くように舞台上を舞い始め

る。曲調が変わる、上手から次々と踊り子たちが登場し、いつの間にか舞台は半裸の踊り子たちで埋め尽くされる。少年は趣味の悪い宮殿の催し物のようだと思う。ホリの色を二本の指で調整する。目の冴えるような緑色から、透き通るような青へと光が変わる。少年はいつかの夜に見た水の底にいたような少女を思い出す。この音楽も光も届かない場所で、今も少女たちが輪郭を消して新たな女としての軀を手に入れようとしている。女の悲しみは男には届かない。自分の死体がプラスチックの音を立てるとも知らないで男たちは純粹に今を生きている。それがリアルだった、赤ん坊が死ぬかけがえないこの世界こそがたった一つしかない現実だ。不満気な人々は、誰かがそのリアルをぶっ壊してくれないかと願っている。期待に満ちた愚鈍な表情を隠すこともしないで、誰かが神になることをただ只管に待ち続けている。客たちは退屈している。キョウコの演説を聞きたがっている。キョウコが都市を焼き払えと言えば、男たちは喜んで街中にガソリンを撒き火を点

けるだろう。美しい都市を血とも炎ともわからぬ濃い赤で塗り潰すことも容易にやっつてのけるだろう。俺たちから輪郭を奪うものが都市ならば自分たちの手でリアルを終わらせることもできるはずだ。なぜ都市の顔は笑っている？ 都市に帰れない女は自分のために泣くことしかできず、ゴミ山にいた少年は幻の果実を食べることもなく死んでいった。なぜ未来に頼らずに生きた者には時間が与えられなくてあんなに美しく威厳のある人が惨めに悲しまなくてはならないのだろう。キョウコは、純度の高い暴力にも似た信仰心で形を変えられた俺たちの神様だ。人々はキョウコの血を使って自分たちの死に場所の壁に遺書を書きたいと願っている。この場所にはやはりキョウコが必要なのだ。俺たちを救うために希望の灯を再び灯してもらおうしかない。

踊り子の布が肌蹴る、男たちが薄ピンクの紙を投げかける、音楽が早くなる、楽団員たちが足を踏み鳴らす、本当の快樂はキョウコの中にしかなかった、少年は居ても経つてもいられず機材部屋から飛び出

した。スポットライトは幾つもある太陽のようで、この光がある限り少年はいつだってゴミ山の日々に戻ることができた。

楽屋に辿り着くとそこにキョウコの影はなかった。裏口に回る。空には青白い月が煌々と光っているだけだった。少年は途方に暮れた。廊下を進むと奥の方から風の気配がする。暗い壁の隣に二階へと続く非常階段があった。少年は手摺を掴んで一段ずつ上っていく。本当の闇だけがそこにはあった。ここにいる人間は息をしているのだろうかと思いたくなるほど生きている感覚がこの闇の中では麻痺していくようだ。廊下を右に曲がった。何部屋も続く廊下の、右側にある三番目の扉が僅かに開いている。少年はその扉を開けた。キョウコと黒い肌をした少女が、青い間接照明に照らされ此方を見ている。キョウコの手には透明な液体で満ちた瓶が握られている。どこへ行くんだ。少年の喉から思わず声が零れた。お願いだから、もうどこにも行かないでくれ。キョウコが微笑む。あの最初に会った夕暮れの丘から何も

変わらない完璧な微笑み方で。あたしね、死んだあの子を両手に抱いて、あのゴミ処理場へ行ったの、あそこには昔からなにか生き物が死ぬ度に埋め込んでいたのよ、最初は金魚、次はネズミ、拾ってきた犬も家族の誰も世話をしないから結局みんな死んでいったわ、その度に母が父に車を運転させて、あたしと兄が死骸を持って乗せられたの、捨てに行くときはいつも夜だったわ、真夜中の道路で隣を走るトラックの巨大なタイヤがすごい速さで回転して、オレンジ色の照明灯が現れては消えて現れては消えて、まるで一枚の長い絵を見ている気分だった、兄と父が犬の死骸を運んでいくのをあたしと母は車の中から見ていたの、黒い布に包まれて、それが今までは生きていたなんて到底信じられなかったわね、あの子を布に包んでゴミの中を長いこと彷徨って、やっと綺麗な花が咲いていた場所に埋めたの、自分の手で死体を埋めたのは初めてだったわ、あの子は明け方に死んでいった、昔飼っていた犬のような目をしてあたしのことを見つと見ていたわ、そこには

恨んでいるのか甘えているのかわからないものが渦巻いていて、ああそうよ、まるであなたの腕の模様みたいに、ぐるぐるとした渦があつて、そこにあたしの悲鳴も吸い込まれていった、息が止まっているのを確認した時、踊り終わった後の何とも言えない感覚に襲われて、本当に本当にごめんなさいって、あの人に会うこともできず、この子はたつた二度しか星を見ないで逝ってしまった、あたしは、これで本当にすべてのあたしは死んだと思つて、もうこれで本当に何もかもが終わってしまったの。

キョウコは持つていた瓶に唇をつけ、そのまま一気に中身を呷つた。その瞬間はキョウコも少年も少女も動かなかつた。一瞬の静止の後、キョウコは口から血を吐き、真赤な叫びを身を絞るようにして発した。少年にはなぜかその声が赤ん坊の産声に聞こえた。キョウコの生が赤く燃え、星が死ぬときに散らす爆発のような眩さがキョウコの内側から発光した。

少女の爪のない手が少年の手を握つた。キョウコ

の血を被つて濡れたその手は生温かくぬるぬると滑つた。少年は少女の手を握り締めそのまま強く引つ張り上げた。二人は暗い廊下に飛び出して非常階段を駆け下りた。劇場の奥で歓声が湧く。これから何処へ行けばいいだろう。少年は少女の手を引きながら思った。最初は冷たかつた少女の手が少年の体温と重なり、二人を隔てるものは熔けて一つになった。キョウコの死体は夜明けとともに発見され処理されるだろう。その死体は火葬場で燃やされ真っ白な灰となつて、都市にいる恋人のもとへ届けられる。俺はいつか都市へ行こう。都市のどこかにあるキョウコの灰を一つかみもらつて、ゴミ処理場の綺麗な花の咲いている場所にそれを撒こう。そのために今は何も見えない闇の中を走らなければならない。

耳の奥で耳鳴りが聞こえている。真つすぐな孤独が少年の耳を貫いている。キョウコの歌声はもう誰の耳にも届かない。

## 「眼光」

菊地 旭輝

### ■受賞のコメント■

この度は、私の作品を明治大学文学賞・倉橋由美子文芸賞に佳作として選出していただき、大変喜ばしく思います。また、こうして受賞の機会を与えてくださった明治大学連合父母会、株式会社阿久悠、大学関係者などの皆様に感謝を申し上げます。

今回受賞した『眼光』は、『宇治拾遺物語』巻第二・十四「柿の木に仏現する事」と『今昔物語集』巻二十第三「天狗現仏座木末語」から着想を得たものです。ここに登場する右大臣、源光に興味を持つことが話を膨らませていくきっかけになりました。この二つの話は同じ内容ですが、物語の中盤に私の創作を含めて入れ込んであります。それから彼の人生を調べていくうちに、彼を話の中心に据えれば上手く短編としてまとめられそうだなと思って書き進めていきました。ちなみにラストシーンは『日本紀略』『醍醐天皇』の源光に関する数行の記述を参考にしています。こうして古典作品や史実を元に小説を書くのは初めてだったので勉強になりましたし、想像力を用いて話を解釈しながら書いていく作業は楽しかったです。これからもジャンルや形式にとらわれず、創作活動に励んでいきたいと考えています。

## 『眼光』

延喜十二年十一月。醍醐の治世である。赤黄色に付く京の外れの山肌は、所々踏み固められた葉により、まだら模様を作っている。空は曇天。濃淡が少ない灰一色で、冬の入りを思わせる涼やかな微風が吹き抜けていた。山の中腹の少し平坦になった野には、秋の嵐によつて今年に折れたと思われる一本の倒木があり、そこに烏帽子を被つた老人が一人で腰掛けてゐる。老人は鷹を飛ばして駆け回る若い男どもを見ては、足元に目線を落とし、時々じつと何かを見つめたと思えば、空を見上げて皺の寄つた目元を擦るなどしていた。老人は面長で切れ目。加えてその皺が意地の悪そうな人相を強調していた。髪も顎髭も一部白く細くなつて毛先は縮れている。今は倒木に腰掛けてゐるが、立つと痩せ型ながら身長があり、威厳と年功を感じさせた。彼の紫の狩衣はよれているが、金の精緻な刺繍が施されているのを鑑みても、身分が高い者と想像できた。実際彼は現役の右大臣で正二位の位を受けている、光（ひかる）

という名を持つ仁明天皇の御子である。今は若い貴族らと鷹狩に出掛けている。ただ、傍から見ると、光自身に鷹狩に対する興味がある訳ではなく、若者たちの面倒を見るといふ年長者としての責任感で出向いたように思われる。

「西三条殿、狩りの成果はいかがですか」

この老人に声を掛ける者がいた。えんじ色の衣身にまとつた好男子が、落葉の溜まつた斜面を歩きにくそうに登つて来る。男は光の隣に立つて白袴の裾を手で払つた。土や泥跳ねが下に落ちる。光はこの男をよく知っていた。歳は三十代で、名を忠平（ただひら）だひら）といい、以前左大臣だった時平（ときひら）の弟であつた。大納言の職に就いている。忠平は肉付きのいい頬に笑みを刻んで光を見る。光は彼独自の低い声でぼそりと答えた。

「あまり獲れませぬ。獲物もないし、この老体じや駆け回れませぬ」

忠平は「場所が良くないですな」と言つて狩りをする者たちを眺めた。忠平の瞳は二重でぱちりと開

き、黒目が真つ直ぐと視界の方向を定めていた。

「おお、獲った、獲った。あれは野兎ですか」

忠平は歓声を上げる若者たちを遠くに見やって少し口で笑った。光は視力が悪くてわからなかったが片眉を持ち上げて「ほう」と言った。鷹の鳴き声と青や緑の衣を来た若者の野太い声だけは光にも聞こえた。

「兎はここらでよく獲れますのか」

「どうでしょう。すばしこくて中々鷹でも間に合いませんが、上手くやったのでしよう。私は先ほど逃しました」

忠平は苦笑で答えた。忠平の瞳は真つ直ぐ光の顔に向けられる。光は照れた子供ののように顔を背けるしかなかった。光はこのとき、この若者が時平と同じ親を持つ兄弟であるのを不思議に感じた。兄の時平は糸のように細い目でどこか柔らかい表情をする人間だった。この忠平はどうも私の目を掴むような強い視線を持っている。それは堂々と目を合わせて話す彼の性格や二重まぶたのためかもしれないと思

った。それに対し、光は嫉妬や引け目ではない、驚きのようなものを感じ取った。

「そう言えば、西三条殿は噂をお聞きになられましたか。仏様の話です」

ふと忠平が真面目風の口調で尋ねた。しかし光は年上や目上の人にも臆さず笑顔を湛える忠平の性格を見抜いていたから、口元のわずかな笑みを見つけてしまった。この真面目さが演技であり、本心では噂を楽しんでいるように聞こえた。光は口角の右端を吊り上げ（この癖のために彼の皺は左右非対称であった）、「知りませんな」と言った。忠平はやはり神妙な顔で頷き、噂の解説を始めた。

「私が聞いたところに拠りますと、五条の天神辺りに仏が出たそうであります。ここ二日、三日の話です。仏はほとんど実のならない柿の木に現れて、ずっとそこに座ってらっしゃるとか。五条のあの辺りには町衆どもが老若男女集まって、来る日も押んだり供え物をしたりで大変な騒ぎでありまして、車も人も全く通れぬほど混み合っているそうであります。

私の家の女房なども一度見ておこうかしらと申して、困った騒ぎです」

忠平は形の良い鼻を指で搔いてそう言った。光は鼻で小さく笑って「はあ、そんなことが」と言った。そして沸き上がってくる嘲笑を堪えるのに必死だった。彼の顔を正面から覗く者があれば、彼の目が黒く濁ったことが確認できよう。彼は侮蔑の感情を胸に抱くと表情には出さないでも、目を伏せて嘲笑うことがよくあった。

「それを、信じていますかな」

光の質問に対し、忠平は困ったように眉の端を下げた。一度空を見て、飛ぶ鷹の様子を確かめると口を開いた。

「さあ。真偽は判じかねます。この目で見ない限りは。京の町に仏がそう易々と訪れる訳はありませんから。しかし一寸信じてみたい気持ちもある。これは私の信仰心です。きっとこういう心に訴えての騒ぎでしょうが」

光は足元の赤茶色の土に目を動かした。一つにこ

の若者の真つ直ぐな目が苦手だったため。もう一つに「信仰心」という言葉に皮肉を言い放ちたくなつたからであった。光の足元は土が幾分掘られ、足の形がくつきりと刻印されていた。

「仏などいらっしやいますまい」

光はこの一言で溜飲を下げた。忠平は少し間を開けて「確かに信じがたい噂です」と頷いた。それから光は手を組合せて自分の白くなつた短く平たい爪を見ていた。

「ですが、噂は本物でしてね。見紛うとしたら何でしょう」

「ふむ」

光はこの話に興味を抱かぬだろうと思っていた。自分自身、信仰心なるものは歳を取るにつれて徐々に減じていたからである。職歴を経るほど、寺社の坊主が飲み食いするのを見る機会があつたし、賄賂や搾取だって彼らは利益のためなら積極的に行っていた。だが特別それに失望したことは無い。光は人間であれば誰もそう動くものだとしていた。む

しる慈善や仏の道を成すために奴らが動いた方が不気味だった。彼がその時分に発見したのは、信仰は政治手段であるということだった。それは先輩の役人から無言のうちに学び継いだことでもあった。

しかし、仏の姿を直接見られるとなると、この猜疑心を打ち破れるような気がした。光が今まで疑ったものは、僧侶と壮大な寺と経文の験であった。彼自身が、もし実物の仏を見たのならそれをそのまま信じることができよう。体が衰え、そろそろ出家を考える身になった光は、ぜひこの目で見たいという心持ちがした。偽物なら偽物で、信仰心を起こせば構わないように思った。

「儂が見て来ましようか。本物の仏が穢土にわざわざいらつしやるのだ。見に行つて損ではあるまい。もし下郎が仏の物真似をしているなら、見破つて笑つてくれよう」

光が口の端を吊り上げて言うと、忠平は意外の感に打たれたようだった。目を丸くして光をちらと見た。だが、すぐに余裕のある微笑を取り戻した。

「右大臣殿が直々に足を向けなさるとは。様子を窺つてはいかがでしょう。人々のつまらぬ冗談でしたら私の顔が立たない」

「でしたら、五日、六日ほど目を開けましようぞ。外道の者なら幾日も経てば力を失つて自分から逃げて行くでしょうから」

忠平は「では、そうなさつてくださいますか」と言った。そして空を見上げる。空はじきに雨が垂れ落ちそうな厚い雲に覆われている。光は手元から忠平の横顔に視線を移す。忠平は聞こえるか聞こえないかの小声でこう呟いた。

「ええ、きつと見ている」

光は二つの正反対の感情に裂かれそうになった。一つは「信仰心」などと素直に言う忠平に向けた侮蔑。それとは反対に、天頂の日のように眩しいばかりの生き生きとした目に対する羨望であった。光は右目を擦つてあくびをした。

その日、西三条の邸宅に帰つた光は夕食を取ると、

早々に寢床に就いた。午後から雨が降り出して、それは時が経つにつれて勢いを増した。光が木製の天井を見つめているときも風雨が壁を打ち付け、ばらばらという音が室内に響いていた。どうもこの辺りの天候が不安定で嵐が起きているようである。最近寝付きの悪くなった光にとつて、雨音はそれだけで睡眠を妨害する大きな障害であった。仰向けから右に寝返りを打ち、外廊下の方をじいっと黒い瞳で眺めていると、何者かが部屋の入りに立った。

「失礼いたします。本日は冷えますから、お布団を厚くしましょう」

そこにいたのは、この屋敷で働く初老の侍女であった。この侍女は、年若い頃からこの家に仕えているが、当初から世話焼きである。光がまだ四十のときは、客人を招き入れると出しゃ張るこの侍従を鬱陶しく扱ったものであった。だが、文句を言ってもこの侍従は「いいじゃありませんか」、「お気になさらず」と言つて八重歯を見せながら微笑んだ。どうやら、主人が嫌がるくらいまで世話をすることが役

割だ、とても思っているらしいと光は気付いていた。ここ数年は諦めきつて挙手傍観している。今日もわざわざ掛け布団を抱えて来ているらしい。そして今使っている布団と入れ替えた上で光を横たわらせ、肩の位置まで掛けて八重歯を見せて帰って行った。光はぼんやりとした目で、「ああ」とか「どうも」など言いながらやり過ごした。

突如、外がぴかりと輝いたと思つたら雷鳴が響いた。雨足は強まって、葺の隙間から少々吹き込んでくるようだった。光は布団を肩から耳の位置まで引き上げて眠ろうとした。濡れた猫のように丸まった。何かにくるまっていけないと思つていたのであった。思い浮かんで来たのは約十年ほど前に死んだ道真（みちざね）のことであった。それは五条の天神辺りに彼の住居があつたからか、それとも……。

菅原道真は光の前に右大臣を務めていた。光と道真は同い年であり、幼少期から何となく彼の噂は耳にしていた。彼は陰気で自嘲的で、いかにも学者風

という印象だった。噂通り頭の切れる男で、彼の方が随分出世が早かった。それ自体に嫉妬したことは無い。彼はその性格のために味方以上に敵が多かったからだ。しかし上皇に気に入られていたおかげで道真は右大臣の地位まで手にした。光はというと年齢を重ねて、現在の帝に代わってから大納言の地位に就いた。そこで光は道真とも会話をする機会が増えた。彼からいくつかの皮肉や発言の訂正を受けたこともあった。それでも光の気持ちに怨恨が生まれることは無かったと今でも断言できる。光は道真の臆病を感じ取っていた。道真が人に皮肉を言うときは、常に追い詰められた鼠のような目を向けた。彼は自分より有能である人物を見つけることだけでなく、自分より優れた発言がなされることすら恐れていた。

帝の寵愛が無くなってからは、焦燥に喘ぐじじいの姿を光は見ていた。その年には道真はやつれ、同年代とは思えないほど老け込んでいた。やがて左大臣であった時平を中心に道真排除の機運が高まった。

当時は道真に対する讒言や性質の悪い噂が飛び交っていて、道真は益々臆病に意固地になっていった。

自分より二十も年若い時平から道真排除に協力するよう話をされたとき、光は承諾した。光はやはり恨みよりも憐れみが強かった。でも引導を渡すとなると、不思議と唇の右端が上がって目を伏せていた。ああのじじいの悔しがる姿に興味を湧いたのかもしれない。それとも内緒話をして謀略を企てるとき特有の緊張感がそうさせたのか、当人にはわからなかった。光が主導的に何かを果たすことは無かった。

道真の左遷に賛成票を投じるくらいであった。最後に内裏で道真と目を合わせたとき、彼は予想に反して悔しがる素振りを見せなかった。枯れて干からびた松のように、生気も無く弱々しい様子で、すんなり身を引いた。光は呆気からんとして老いぼれの背中を見送った。空席になった右大臣には光が選ばれた。

程なくして道真は太宰府の地で死に、続いて若い時平もぱったりと死んでしまった。今、布団に籠る

のはそのためかもしれない。時平とその周辺の人物が倒れ、道真の怨霊と一時は騒がれたのだ。光は、怖がる必要は無いと自らに言い聞かせていた。そもそも今まで神仏やら祟りやら占いを一切信じていないし、道真に恨まれる道理も無いのだ。しかし不運に見舞われるたび、光は道真の痩せ顔に嵌め込まれた、濁る眼球を思い出す。自分を追いやつて、大臣になったのはお前だろうと言われる気がしなくもない。いや、しかしこうして思い出すことそのものがきつと信仰なのだ。祟りなど自分の内にしかない。そう思つて、光は静かにニヤリとし、布団から目元を出した。

「ああ、これが正体だ。相違ない……」

稲光が何度も室内と老人の薄い頭を照らした。

きつかり五日後の朝、光は西三条の家から左京の五条にある柿木の仏を見物に行くことにした。町民や下級貴族、僧侶も集まっていると聞いていたから、(正妻の強い勧めもあって)装束は正装に決めた。

黒く艶のある、ここ一年で拵えたばかりの束帯を例の世話焼きの侍女に着せられた。最後に黒の冠と金の飾太刀を身に付け、家を出た。天候は快晴であり、真つ青で雲一つない空が光にとつてはただ不気味であつた。門の前には牛車が停まっている。侍従や警護の者など三十名ほどが集まっていた。前には先導の車も二台あり、それに乗る親族の若者や二名の職務を補佐する者(光にとつて片方はただの太鼓持ちにしか思つていなかった)が礼をして出迎えた。光は「どうも。よろしくお願いします」とお辞儀をして自分の車に向かった。光の乗る檳榔毛の車は綺麗な檳榔の布が掛かつていた。後ろから、恭しく置かれた榻を踏んで車に上がる。光は右前方にじつと座りながら牛車が歩き出すのを待った。動き出すのにかなりの時間が経つてうつらうつらし始めた頃、ようやく牛が家の前を発った。五条の仏が出たという所まで距離はそれなりにあつた。光は仏の姿を思い浮かべたり、眠くなつて船を漕いだりしながら到着の時刻を待った。

やがて人々の声が大きくなっていった。車輪が軋む音よりも外を行き交う者たちのざわめきが大きくなっていく。目が覚めて外の様子をちらりと確認すると、既に目的地の手前であった。道真の寢殿付近は通らなかつたようで安心した。

「ええい！ どれ。車だ」

どうやら前方では仏を見んとして集まつた民衆を掻き分けているようであつた。中には突き飛ばされて尻もちをついた者まで見える。光は自分より位が高いか、あるいは顔の広い貴族がその退かせた人の中にいないか不安がつて、小さく溜息を吐いた。車が停められると、車夫らしき男が汚くかすれた声で「ご到着です」と言った。光は「降ろせ」と一言呟いた。車の前が開けられ、外光が車の中に差し込む。眩しさに一度目を擦つてから、榻を踏み台に地に足を下ろした。護衛の者によつて野次馬は一行とは距離を隔てられている。近くの町衆は仰々しく登場した右大臣の方を見ていた。

「どこだ、仏は」

そう言うのと、汚らしい染色がされた衣を着た、十歳に満たないようなおかつぱ頭の少女が光の顔を見上げながら笑つた。

「大臣様、あつちの木のところ」

まさか市民に、それも子供に答えられると思つていなかつた光は、目を逸らして「うん、どうも」と答えた。少女は蟻の行列を観察するときのような真剣な眼差しで光のことを終始見ていた。光は五人ほどの若者に囲まれながら、先導に付いて行つて角を曲がつた。確かにそこには実が一つも無い柿の木があり、天辺にはなるほど仏がいた。

仏の背丈は人の背とほとんど変わらない。見た目は木彫りの立像だつた。だが作り物や絡繰りでないことは明らかである。仏は蓮、桜、桐、山茶花、梅など様々な種類の黄金の花を降らせていた。また、後光は目も眩むほどであり、老人の目で見るには辛抱が要つた。

「これは本物ですがな。仏様が現世をお救いにいらつしやつた」

隣にいた太鼓持ちの肥満男がそう言った。目を剥いて上を見上げ、大して暑くもないのに大粒の汗を流して驚嘆している。光はしかし感動が大きくなかった。思ったより規模が小さいように思った。仏自体の大きさもそうであるが、他の仏閣で見た銅像の方がもう少し体躯に迫力があつた印象だ。でも黄金の光や花を生み出すこと自体は、仏の力であるとも思われた。人の手で黄金の花を生産し続けることはできない。その力は認められる。しかしまた、どうして花であるのかを不思議に思った。まるで仏が客寄せをしているように思われた。光が思い描いていたのは、降り立って人々に説法を聞かせる老人の姿だったのである。

そして光自身が意識しているかは微妙だが、もう一つ彼を白けさせる要因があつた。それは参拝に来ていた人々の反応であつた。ある老人は骨と皮だけのような肉体で地面に額を擦り付けていた。ある旅装の男は米俵を置いて拝み倒している。ある尼の少女はぶつぶつと経の文句を唱えながら涙をはらはら

と流していた。この大袈裟とも言うべき民の反応に、知らず知らず侮蔑と嘲笑の気持ちが出来上がっていたのだ。

光は彼の黒い目でじっと仏を見た。付き人たちは特に何も言わず、拝んだり光の様子を窺ったりしていた。花は永久に生まれては消えた。後光は青空を背に綺麗に伸びていた。仏の微笑は崩れることは無かった。長い時間が経ち、正午には牛車が来て榻を用意し、座って見るよう言われたので光は従つた。

簾を持ち上げ、その下で光はただ見つめていた。皆は光がどうして何も言わず見つめているのか不思議に思った。仏に魅入られているんだとか、畏れるあまり目が金縛りに遭つたんだと言う者がいた。

光は、この仏を食い付くように見ていたが、決して夢中になつていない訳ではない。光は次の行動を見逃したくないのであつた。仏は見る限り奇跡のような佇まいをして、道行く人を虜にしている。確実に、見たい、祈りたいという衝動を起こす何かがある。それ自体は立派であるが、果たしてこの後、仏は何

をするのであろう。善人を救い悪人を裁くのであろうか。ありがたい教えでも喋るのだろうか。それとも釈迦のように神がかり的なことを成し遂げるのか。光はそれを知りたがった。輝きを放ち人々に認められたその次に、一体何をしたら良いのかを見定めなかったのだ。もちろん時間が経つにつれて少し飽きて、部下に仏の足を触って来いと言いたくなつたこともあつたが、自分にばかりが当たるのが怖くてやめた。そういうときは、堪らずに石を投げつけた頭の悪そうな子供の企みが成功することを祈つた。

一時が過ぎたとき状況は変わった。仏は光の出力を弱め、花も出さなくなつた。そして仏から折れた翼が生え、くちばしが出て、膿の溜まつた目玉が出たかと思うと、たちまち鳶に姿を変えてしまつた。人々はどよめくと「偽物か!」、「仏を侮辱しておつて!」と怒号を上げ始めた。鳶は仏になるのに体力を使い果たしたのか、よろよろと柿の木から落ちてしまつた。そこへ石や木の枝を携えた少年が集まり、一瞬で打ち殺して無残な死骸だけが残つた。一人の大柄

な男子が木の枝を首に刺して掲げて見せた。そこでは落胆したり嘆いたり笑つたりする声が起こつた。供え物をつかさう者もいた。泣き伏せる仏僧もいた。祭りでも催されたかのような賑わいで、あちらこちらで無秩序な騒ぎが起き始める。ついにはいつもの町にすっかり戻つたのである。

光が帰ろうかと思つてしていると、太鼓持ちから「右大臣様はわかつておられたのですか」と尋ねられた。光は顎髭をさすつて首を傾げた。

「本物の仏が京の町中に、それも木の上に現れる訳なからう。真偽を確かめず妄信するのは仏の道に反することだ」

光がそう言うと、周囲の人だかりも含めて感心したような反応を示した。光は嬉しくないはずがなかつた。車の奥に入つて簾を開めた。「やはり賢明な方だ」という声が聞こえてきた。その場で光の様子を見た者は、特にそのことを広めようと話したのである。

光は帰りの途中で口角が吊り上がるのを感じ取つて

いた。結局のところ仏など無かった。それを知れただけで十分だった。奴らは紐れるものに紐つただけだ。いつもは納税を嫌う人々だって仏になら何でも献上した。偽物と知るや一気に尊敬から嘲りに変わった。そして自分のことを賢いと、仏道を心得ると信じた。光は顔を上げて、大口を開いて笑いたい気分だった。これは自分の勝利だと思った。光は仏に關する色々のことを思い出した。小さい頃、寺で同年代の子供と戯れてふざけ合っていると、法衣を着た坊主に仏の前だからとこっぴどく叱られたこと。熱心に写経をしていたら父から褒められたこと。最初の妻を早くして亡くしたときに涙を堪えながら葬儀をしたこと。それら全ては欺瞞だと悟った。別に仏でなくとも光にとつては良かったのである。本当に必要だったのは何かを信じることであり、それを通じて人生の手順と基準を作ることだったのだからやはり宗教は政治のためのものだ。これらを了解しただけで光は上機嫌で自宅に帰つたのだ。その日は久しぶりに酒を目一杯飲み、早いうちに寝てしまった。

二、三日後に登庁したとき、たまたま忠平と出くわした。大納言である忠平とはすれ違うこともままあった。忠平は会うなり笑みを見せて、深々と礼をした。

「これはこれは西三条殿。聞きましたぞ。仏の正体を見破りなされたようで。やはり賢い方だと我々の中でも評判でございます。私などが下手にお参りに行かなくて良かった。いやいや、それにしても流石の信仰心でいらっしやるようだ」

光は目を少し伏せながら「いえ。そこまでは」ただ言つて去つた。実はここ数日、忠平以外の官僚からも同じような賛辞を受けていた。しかし忠平から言われると、くすぐったいような嬉しさがこみ上げて来ないでもなかった。同時に、仏のことを喜んで報じてきた忠平が、自分の噂を聞いて驚いたり感服したりする姿が目に見え、嘲るような気持ちが出た。

光は帰りの牛車の中でだけ笑みを見せた。老人特有の嫌らしい笑みであつたが、光からすると褒めら

れて喜ぶ子供心から来る笑みだった。牛車の物見から日が暮れた町中を覗く。東の空には十六夜の月が浮かんでいた。その欠け始めた月を瞳に収めるうちに、道真を思い出した。彼は濁った瞳でこちらを見上げている気がする。光はふと拳に力を込めた。

「儂はまだ……」

十一月の冷たい風が京の路地を吹き抜ける。牛車の車輪の軋む音だけがその場に残った。

延喜十三年三月のこと。雪の薄く張った京の山は、木々の葉がすっかり落ちきっていた。黒い枝が白い雪と対照をなしている。そこに鷹狩に來た京の貴族たちがいた。その中でも年長なのはやはり光であった。光は寒さに足元が震えていた。六十を超えた肉体には、山の寒さは堪えるものがあつた。しかし彼も他の多くの貴族のように自分の鷹を右腕に伴って、一応狩りの支度を整えていた。彼の鷹は帝から賜ったもので、翼の艶と大きさが群を抜いていた。鷹の目玉は黄色く、黒目がぐるぐる動いた。目が合うと、

今にも突かれる気がして顔の近くにやらなかつた。

「右大臣殿、出られますか？」

光の近くに寄つて來たのは、藏人所の役人の男だった。彼の烏帽子の紐の乱れが、光にはなぜか異様に目に付いた。「ああ、一度出る」と足元を確認しながら言った。

「先日の狩りでは、白鳥なども得られたようでした。本日も天候が良いですし、右大臣殿も必ず良い獲物が獲られるでしょう」

空を見上げた。今日は雲の少ない、久方ぶりの晴天であつた。風も少ない。

「獲れるといいですが、白鳥なんかもありますか」

光の質問に役人は眉を上げて頷いた。彼は右大臣の興味をわずかでも惹き付けたことに愉悦を感じているようだった。烏帽子は気に留めず手をさすりながら話す。

「ええ、いるそうです。大納言殿が獲られたとか、獲らないとか」

光は平坦な音で「ほう」と言った。白い吐息が形

悪く吐き出される。忠平が大物を捕らえたことに軽い驚きがあったが、あの若者ならやりそうだとも思っただけだった。光が鷹を連れて山の茂みの方に行くのと、役人も付いて来る。

「とは言え、ここらの山には白鳥などいますまい。獣も冬籠り中でしょうし」

役人の前言に対して保険を掛けるような言葉に、光は耳を貸さなかった。山の深くに分け入って物陰に目を光らせている。生憎と生き物の影は全く無かった。冬ということもあり、地面には雪と靴跡以外、何も無い。そして物音もほとんど存在せず、生き物がごっそり掻き出されてしまったかのようだった。

「やや、いませぬな。わたくしが勢子を務め申し上げましょうか」

役人はいつの間にか烏帽子を付け直し、険しい表情をしていた。光は自分の浅靴に雪が染み込んで、指先に痛みを感じた。明日以降の霜焼けを想像して引き返したくなっていった。

「ああ。頼みます。右から行くので」

そう言つて、光は鷹を構えながら緩やかな斜面を右にじりじり下つて行つた。鷹は今にも飛び立ちたく羽を羽ばたかせていた。その目はやはり、光の瞳でも突きそうである。

「あ！ 兎だ。兎がそつちに行きましたぞ」

役人がそう叫び声を上げた。その声と足音で、兎がどこにいるのか暫く見当が付かなかった。兎は光のかなり前方にいた。茶色のくすんだ体毛が、雪の禿げた部分に上手く隠れて見えづらかった。腕を前に振つて鷹を飛ばす。兎は斜面の下へ下へと逃げて行つた。

「深追いは得策じゃありません。退きましよう」

役人は上から光に叫ぶ。しかし光は「もう少し」と言つて追い掛けた。適度な所まで追つてみようと考えていた。斜面を駆け下りて、獲物を探す。鷹は旋回して戻つて来た。腕に鷹を戻して辺りを窺う。木々の隙間から見える茂みの一つに、茶色の毛を持つ輪郭が見えた。兎は息を潜めてやり過ごそうとしていた。光は一歩ずつ慎重に詰め寄る。

「堪えろ。まだ、まだだ」

光が小声で自分自身に言い聞かせる。瞬きを忘れ、枝一本の揺らぎすらも見逃さぬように注視していた。やがてあと四歩というところ、兎は音を立てて振り向いた。突き出た方の左耳は怪我を負っていて、どことなく生氣がしぼんでいた。

「それっ」

光は鷹を飛ばす。兎は斜面の向こうに走って行く。山の深くに逃げ込もうとするのを、光自身も追って行った。鷹は上空から兎を目がけて足を伸ばす。爪が背に引っ掛かって捕らえた、と思うと転がって逃げ続けた。光は走って斜面を上がり、先回りをした。そして開けた斜面の下に追いやる。

「捕らえたも同然。観念しろ」

兎は急激に空から降って来た鷹に押さえつけられ、手足を醜く動かす。しかし鷹は兎の上で毅然とした様子で立っていた。兎は円らな目玉を光に向けた。その目は、光の征服心を一層増幅させた。この成果は、ある種の達成感と自信を与えたに違いなかった。

それは、光が唇の右端を引きつらなばかりに上げているのを見ても明らかだった。獲物を自分の手で掲げるため、光は斜面に向かおうとする。

「う、右大臣殿。やりましたか」

「ああ、そうだ」

役人を振り返って、光は答えた。そのとき、光の足が雪でぬかるんだ地面に滑った。光は留まろうと近くの枝を掴んだが、ばりばりと虚しくも折れてしまふ。老人の体に態勢を整える筋力など大して残っておらず、斜面の途中から丸太のように転がって落ちていった。

「右大臣殿！」

光は視界が回っていて、何が起きたのか判断できずにいた。ただ、顔に掛かる雪の飛沫の冷たさ、肩と腰を打ち付けた痛みは感じていた。光は体を弾ませながら、あらゆる方向に転がり落ち、黒い泥沼に入ってしまった。粘度の高い水音がして姿が消える。役人は助けを呼ぶために、ほとんど裏返った悲鳴のよな声を上げた。そういう声は光には全く届いてい

なかった。

光は焦っていた。黒い泥に溺れ、上下の感覚を失ってじたばた暴れていたのだった。口には砂利が入って気持ち悪さを感じた。足はどの方向に伸ばしても、何も触ることは無かった。泥が静かに光を圧していた。何度も何度も手足を動かすと、やがて腕が泥の外に出た。それを頼りに頭も出そうと努める。息が限界であった。

「そんな、ことが……」

光の顔は黒い泥と緑の苔にまみれながら外に出た。だが足を着こうにも底が深くでできず、浮き上がれなかった。やっと何かに足が触れたと思うと、すぐに感触は無くなってしまふ。光は重々しい衣服に引っ張られるように再び沈み出す。光が最後に見たのは、目が痛いくらいの木漏れ日だけだった。光は睨むように、太陽を見つめた。しかし息が足りずに淀んだ黒目は、外界の誰かに訴えることなく消えていく。薄れる意識の中で光が思い出したのは、やはり道真のことであった。光は心中で道真に許しを乞う

た。仏に助けを求めた。家臣の救助を待った。しかし一向に光を引き上げる者はいなかった。そうして光は自らの運命を悟った。ああ、お前と同じで泥には逆らえないのだ。光は自分を見上げる道真にそう呟いた。

右大臣源光の遺体はどうとう沼から上がることは無かった。多くの人々によって遺体の掘り起こしが行われたが、結局日が暮れるまで深く掘っても何も出て来ない。噂は道真の怨霊説と共に広まった。若くして死んだ時平に続いて、光は遺体が消えるという結末を迎えたからだった。この噂のある者は怯えて、ある者は興味津々に話した。だが道真の怨霊と結び付けないで話す者はいなかった。

光の死によって右大臣は空席となり、そこには当時大納言であった藤原忠平が間もなく就任した。葬儀は権威ある寺で国を挙げて行われ、正一位の地位と絹布等の物品が光に贈られた。十年もすると噂も死に場所も皆から忘れ去られてしまい、道真が神格

化されるにつれて彼の死を重視する者はいなくなつた。

今もなお、光は京の泥中から我々を見上げている。



「飛びたつ準備はできている」

曾雌 美里

■受賞のコメント■

好きなものを好きなままでいつづけたい。この作品に込めたのは、そんなシンプルな思いです。

執筆を始める前、私は「好きなことを仕事にしても良いのか？」ということ悩んでいました。夏休みに入って様々な企業のインターンシップに参加するなか、「好きを仕事にしたいなあ」と思う一方で、「好きを仕事にしたら嫌いになってしまわないか」「だったら好きなことには趣味程度に関わっておく方が良いのではないか」という気持ちもあり、出口の見えない迷路をぐるぐると回っていました。

そんなある日、ある企業の、ある社員さんが放った一言。

「やっぱり、好きだから、頑張れるんですね」

この言葉で、私は迷路を抜け出せました。と同時に、小説のテーマも決まりました。

未来の自分が、好きを見失ってしまいそうになったとき、それを思い出すことができるような。

そして私と同じように悩んでいる方々の、背中をそっと押せるような。

そんな作品になっていけば良いな、と思います。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった明治大学連合父母会の皆様、および関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。

飛びたつ準備はできている

彼女は瞳を閉じた。

その手に握られているのは、一本のカーボンファイバー・ポール。彼女はこれから、このポール一本で空を飛ぶ。

放課後の校庭は喧騒に包まれている。演劇部の発声練習に、ポールを求めるサッカー部のかげ声。校舎の屋上からはトランペットの音色が響く。しかしそれらは、どれ一つとして、彼女の耳には届いていないようだった。

まるで目には見えないボールが、彼女の周囲を覆っているみたいだ——と私は思った。そしてそのボールのなかはきつと、衣擦れの音さえしない完全な静寂で満たされている。

彼女はかっと目を開くと同時に、スローテンポで歩きはじめた。ポールの先端を斜め上に向け、手が振れないぶん両肩を揺らしてリズムを作る。そのスピードは徐々に上がっていき、踏み切りのポイント

が近づいてくる。彼女はポールの先を、重力の流れに任せるかのごとく自然と下していくと、それを一息にポールボックスへと突き入れた。

右足で強く地面を蹴る。カーボンファイバー・ポールが大きくしなる。反発で彼女の身体は、天へ天へと持ち上げられていく。

そして。

そして彼女は空を飛んだ。

雲一つない真つ青な空に、彼女のユニフォームの赤色だけが、鮮明だった。

二〇一九年 夏

放課後の県立明日葉女子高等学校は、心地良い解放感に満たされていた。たった今、一学期の期末試験が終了したばかりであったから、その解放感は格別のものだった。

教室でおしゃべりに興じる者、さっさと学校を後

にして遊びに向かう者。はたまた、試験週間が明け今日から解禁となった部活動に急ぐ者。

様々な生徒がいたが、一年の大平まどかはそのうちの最後に当たる、部活動に急ぐ生徒の一人であった。

まどかは教室を駆け足気味で飛び出すと、階段を一段ぬかしで下りていった。一年生の教室がある四階から、二年生の教室がある三階へ到着し、今度は三階から旧校舎へとつながる渡り廊下に行く。通常の授業を行う一から三年生の教室は新校舎に、音楽室や理科室などの特別教室と部室は旧校舎に集中しており、両者は一階と三階で渡り廊下によって結ばれているのだ。

旧校舎の三階に着くと、そこからさらに階段を下りて一階へ。

廊下の突き当り、最も東端に位置するのが、まどかが所属する美術部の部室だった。

まどかが建付けの悪い部室の扉を、がたがた音を立てながら開けると、そこにはいつも通りの先客が

いた。

「おつ、今日も来たねまどか。偉いぞ、皆勤賞だ」

それは三年の西園寺深冬だった。一応、この美術部の部長でもある。まるで深窓の令嬢のような名前をしているが、実際の性格はずぼらでがさつ、淑やかな令嬢とはまったく対極の位置にいる先輩だった。今だって、椅子にだらりともたれて両足を長テーブルの上へ投げ出し、ペットボトルのコーラを一気に流し込んでいる。

「……先輩、パンツ見えてますよ」

まどかがスカートの奥にちらつく白色から目を逸らしつつ言うと、深冬は「がはは」と豪快に笑った。

「なに、パンツぐらいで恥ずかしがってるの？ここ女子高だよ？女子に見られたからってどうってことないでしょ。別に減るものでもないんだし」

「でも、急に西谷先生とか入ってくるかもしれないじゃないですか」

まどかは唇を尖らせて反論した。西谷とは美術部

の顧問で、当然、美術の教師である。

「いやいや、西ちゃんとは定年間近のおじいちゃんだよ？ パンツ見たくらいでなんとも思わないって。女子高歴も長いからこういうの見慣れてるし。てかさあ、なんで女子高にいる男の先生っておじいちゃんばかりなんだろうね。イケメン教師を取り合って戦争勃発、とか完全にフィクションだよね」

深冬は日本人が思う外国人のステレオタイプみたいに、ヤレヤレと肩をすくめてみせた。どうやら、足を机から下したり、せめて閉じたりしようという気は微塵もないらしかった。

まどかは諦めて、深冬の向かい側に腰かけた。深冬は隣の椅子に置いていたクーラーボックスからチューブ型のアイスを取り出すと、それを二つに割って片方をまどかに差し出した。

「はい、これあげる。期末試験終了おめでとく、つてことで」

「先輩はいつも、試験とか関係なくアイス持ってきてるじゃないですか」

まどかは苦笑しつつも、お礼を言つてそれを受け取った。深冬がわざわざ家から持ち込んでいるクーラーボックスは、アイスも八時間は溶けないという高性能のものだ。

七月に入り、気温も夏日を記録するほど高くなってきたが、この部屋にはクーラーがなかった。新校舎の教室と旧校舎の特別教室は昨年から今年にかけてそのすべてにクーラーが設置されたのだが、各部室への設置は予算の関係で遅れるとのことだった。

だがそれは建前で、このまま設置されずに終わってしまうのだろう、というのが大半の生徒の予想であった。

だからまどかと深冬は、今にも動きを止めそうなおんぼろの扇風機一台と、アイスで暑さを凌ぐのだった。

クーラーボックスから取り出されたアイスは、手で温めるまでもなく熱気でみるみるうちに溶けていく。まどかは垂れてきた雫を舌で拭くと慌てて口を付けた。キンとした冷たさが火照った身体に心地よ

かった。

「さして、いつちよ始めますか」

さつさとアイスを食べ終えた深冬は、棚から作りかけの作品を持ってきた。それは幼い少女の彫刻だった。本人の談によれば、可愛がっている十歳年の離れた妹をモデルにしているそうだ。まだ完成には程遠いが、それでも少女のふつくらとした頬や、今にも喋りだしそうな小さな唇が見て取れた。

深冬の彫刻の腕はたしかで、全国レベルの大会でも数々の賞を受賞していた。その作品はふだんの大雑把な性格とは似ても似つかず、精巧かつ繊細。まるで一瞬を切り取って、それをそのまま閉じ込めたかのような写実性は圧巻だ。口では色々と言いつつも、深冬の才能と努力をまどかは心から尊敬していた。

「よしっ、私も描きはじめます！」

まどかは座っていた椅子を窓際まで運ぶと、通学カバンとは別に持ってきたトートバッグからスケッチブックと鉛筆を取り出した。B4より少し小

さい、F4というサイズのそのスケッチブックは、相当使い込んでいるのか、表紙の角は折れて、表面に施された加工が剥がれていた。

旧校舎の一階の、端っこにある美術部室は、東側でグラウンドと面していた。窓からはサッカー部やソフトボール部、陸上部の生徒たちが、初夏の太陽の下、汗を流しながら練習している姿が見える。そしてその奥には、新緑鮮やかな山々がそびえ立っていた。

この場所が、まどかがスケッチをする際の定位置だった。

「今日もつばさのこと描くの？飽きないね〜」

深冬が冷やかすように言った。まどかは少しムムとしたが、言い返す言葉はなかった。

美術部に入部してからの約三か月間——まどかは陸上部所属の棒高跳び選手、日高つばさの姿しか描いていないからだ。

まどかがつばさと出会ったのは、忘れもしない。四月の中旬、入学からちょうど十日が経つ日だった。当時のまどかは、ちよつとしたスランプに陥っていた。絵を描くことが大好きで、中学時代美術部に所属していたまどかは、高校でも一切迷うことなく美術部に入部した。だが、入ったはいいものの、自分がこれまでどうやって絵を描いていたのか、一体何を描けばいいのかということが、さっぱり分からなくなってしまうていたのだ。

その原因は、受験期間中まったく絵に触れていなかったことにあるらしかった。成績が芳しくなかったまどかは、部活動を引退した中学三年生の夏以降、両親から絵を描くことを禁止され、塾に通い詰めていた。その最中は、絵を描けないことに対するフラストレーションが溜まりに溜まり、受験が終わったあれれを描こう、これを描こうと妄想していたのだが、いざ第一志望校に合格し、美術部に入ったにもかかわらず、ぴくりとも筆は進まなかった。

例えるなら今まどかの心は、干からびたスポンジ

のようになっていているはずなのだ。本来ならばその渴きを癒すため、ぐんぐんと水を吸収するのが道理であるというのに、なぜかまどかのスポンジは水をはじいてしまう。何を見ても心は動かされず、創作意欲は湧かなかつた。

私はもう描けないのかもしれない——まどかは本気でそう考え、絶望を感じていた。

一週間の体験入部の期間が終わって今日から正規の部員になったばかりだというのに、早くもまどかの脳内には「退部」の二文字がちらつきはじめていた。

いい加減鉛筆回しをしているのにも飽きて、何となく後ろを振り返ると、そこには一心不乱に作品制作に打ち込む深冬の姿があった。まどかはその姿を見てどうしようもなく悲しくなつた。深冬が羨ましかった。何も考えずに絵を描けていた中学時代に戻りたくて仕方がなかつた。

「あ——っ！」

突然、深冬が大声を出したので、まどかは椅子か

ら飛び上がるほど驚いた。

「どうしたんですか、先輩」

「いやあ、夢中になってすっかり忘れてたよ。まだかに見せたいものがあつたんだ。体験入部の期間中はさ、二、三年より一時間も早く帰らなくちゃいけない決まりだったでしょ？だから、本入部になったら絶対見せてやるよ、って思ってたんだ！」

深冬はまだかの腕を引っ張ると、窓際まで連れて行った。

「この時間ここにいるとね、いいものが見られるんだよ」

「いいもの——って？」

まだかの問いに、深冬はにやりと笑った。

「インターハイ常連、我が校のスター！日高つばさの跳躍だよ」

そう言つて深冬が指さしたのは、一人の女生徒だった。

身長の倍以上あるポールを持ち、赤いユニフォームを身に付けたその少女は、両目を瞑つて微動だに

しない。動いているのは、風に揺れる茶色いポニーテールだけだ。どうやら精神統一を行つていららしいということは、スポーツに關してはまったく無知であるまどかにも分かった。

やがて、彼女はふーっと息を吐くと同時に、目を開いた。その鋭い眼光が向かう先は、青い空を四角く切り取る三メートル九〇センチのバーだ。

徒歩から加速して助走に入り、バーをボックスに突き入れて地面を強く踏み切る。大きくしなるポールに身を預けて、ポールが伸びきったところで器用に体の軸をひねり、腹の下でひらりとバーをかわず。瞬間、彼女の身体は宙を舞い、そのまま落下して着地マットへと吸い込まれていく。

そのわずか十秒たらずの光景に、まどかの目は釘付けになった。

——なんてきれいなんだろう。

助走から着地までが、まるで一本の糸に導かれていくかのように。淀みなく、自然で、そして美しい。何と言つたらよいのか分からないが、もし「跳ぶた



い？言ったとしても、つばさはそんなことで怒るような子じゃないとは思うけどねえ」

「そうでしょか……」

深冬にそう言われても、まどかの不安は消えないのだった。

それから丸一日、まどかはつばさ以外に何か良い作品の題材がないかと考えたが、結局何もアイデアは降りてこなかった。

ため息を吐きながら部室の扉に手をかけると、そこには鍵が掛かっていた。いつもは部長である深冬が鍵を開閉している。まどかよりも深冬の方が部室に来るのが遅いდანんて、入部以来初の出来事だった。

深冬から渡されていた、古ぼけたクマのキーホルダーがついた合鍵をカバンの底から引っ張りだし、まどかは部室に入った。なぜ入部したてのまどかが合鍵を持っているのかというと、ゆるいことで有名な美術部の部員は兼部あるいは幽霊ばかりで、毎日

部室に通っている生徒はまどかと深冬しかいないからだ。

スマートフォンを確認すると、深冬からメッセージが届いていた。

〈ごめん、今日部活行けない！妹がちよつと熱あつて、面倒見られるの私しかいなくてさ。帰る前には戸締りの確認、よろしくね！〉

まどかは、前に深冬が、両親は仕事人間で家を空けていることが多いと話していたのを思い出した。

深冬が妹を溺愛しているのも、きっと自身が幼少期に寂しい思いをしていたからなのだろう。

〈分かりました！妹さん、お大事にしてくださいね。〉と返信して、まどかは窓際の定位置に腰かけたが、いつもは騒がしい先輩がいなくて何だか変な気持ちがあった。グラウンドからは、準備体操をする運動部の発声が騒がしく聞こえてくるにもかかわらず、静かだな、と感じる。心なしか、部室も少し広くなつたように思えた。

だが、違和感を覚えたのは最初のうちだけで、まどかはすっかりスケッチに没頭した。

外は陽も傾きはじめ、運動部は片付けを行っているが、まどかがそれに気が付く様子は一向にない。こここの筋肉がなあ、とぶつぶつ独り言を言いながら、先ほど見たつばさの跳躍を描き起こすことに集中していた。

「……あの一」

頭上から声がした。しかし、まどかはスケッチブックから目を離さない。

「……あの、大平さん？部活動終了の時間だよ」

「もう、先輩、今いいところなんだから邪魔しないでください……」

言っている途中でまどかは気が付いた。今日、深冬はいないのでということに。

顔を上げると、窓の外に立っていたのは、部活のユニフォームから制服に着替えた日高つばさだった。

「う、うわあああああああああ！」

まどかは椅子から転げ落ち、大きく尻もちをつい

た。

「だっ、大丈夫?!ごめんね、驚かせちゃって……!」  
心配したつばさが窓から入ってこようとすると、まどかは平気でずと言って制止した。床に投げ出されたスケッチブックを胸に抱えて素早く立ち上がり、体に問題はないということアピールすると、つばさはほっとしたような表情をした。

これは自分の見ている夢なのだろうか、とまどかは思った。つばさが自分に話しかけてくる理由が見つかからない。そもそも、つばさは自分のことを知らないはずだ。まさか、つばさを描いていたのがばれてしまったのだろうか……?

そうした疑問が顔に出てしまっていたのか、つばさが説明をはじめた。

「私、三年の日高って言います。美術部の部長の西園寺さんと同じクラスなんですけど、今日は部活に行けないから、もし大平さんが絵を描くの集中して終了時刻に気が付かないようだったら声をかけてほしい、って頼まれて」

そういうことか、とまどかは納得した。時計を確認すれば、部活動終了時刻の六時をすでに回っている。まどかは集中すると周りの状況が見えなくなってしまうのだ。だから、ふだんは深冬が終了時刻だとまどかに教えてくれていた。

「そうだったんですね。ご迷惑をおかけしてしまつて、すいません。教えてくださつてありがとうございます。私ならもう大丈夫ですので……」

帰つていいですよ、と暗に促したつもりだったが、つばさはその場から動かなかつた。それどころか、少し身を乗り出して尋ねてきた。

「あの、大平さんつて、いつも何を描いているの？」

つばさはまどかの胸にあるスケッチブックを指さした。予想外の質問に、まどかの背中を冷たいものが駆け抜けた。

「え、えと、な、何つて、ど、どうしてその、これが、気になるんですか」

焦るあまりまどかはどもつてしまう。スケッチブックを抱く腕にぎゅつと力がこもつた。

「大平さんつて、いつも窓際で絵を描いてるよね？だからグラウンドから見えるんだけど、私、実は大平さんのことずっと気になつてたの。なんて真剣な目をして絵を描く子なんだろう、つて」

まどかは驚いた。自分がつばさのを見ていたように、つばさもまた自分のことを見ていたのだ。

「大平さんが描いてるのが何なのか分からないけど、描いてもらつてる人は幸せ者だなあ、羨ましいなあ、つて思つてた。だつて、あんなに心を込めて描いてもらえるんだから」

つばさの言葉に、まどかの目頭はツンと熱くなつた。こんな風に言つてもらえるなんて、絵描きにとつてこれ以上の喜びがあるのだろうか。

今なら正直に告白できるかもしれない。まどかはそう思い、口を開いた。

「――輩なんです」

「えっ？」

「私が描いてるのは、日高先輩なんです」

声が震えた。つばさの反応を見る勇氣はなく、ま

どかはうつむいて話を続けた。

「……承諾も得ずに描いて、本当にすみません。でも私、先輩の跳躍を初めて見たとき、すごくきれいだって思って、感動してしまつて。描かずにはいられなくて、それで……」

「嬉しい」

まどかの言葉を遮って、つばさは言った。

「大平さんに描いてもらえて、跳躍がきれいだって言ってもらえて。本当に、本当に嬉しい」

まどかは恐る恐る顔を上げた。沈みかけの太陽に照らされたつばさは、満面の笑みを浮かべていた。

翌日、放課後のチャイムが鳴ると同時にまどかは教室を飛び出した。しかし、向かった先は美術部の部室ではなく、夏の日差しが容赦なく照り付けるグラウンドだった。

グラウンドの左端には、陸上部員二四名が並んで体育座りをしていた。練習前のミーティングを行っているのだ。少しつり目気味の部長が、部員たちの

前に立って話をしている。

「えー、前に注目してください。今日はみなさんに紹介したい人がいます」

部長に手招きされて、まどかはぎくしゃくと歩を進めた。あがり症のまどかはこういった場面が大の苦手だ。品定めをするような、遠慮のない視線がまどかに突き刺さってくる。

「美術部一年の大平まどかさんです。作品制作のため、今日から終業式までの二週間、棒高跳びの練習を見学することになりました。じゃあ、大平さんからひとこと」

「……おつ、大平です！みなさんの練習の邪魔にならないよう気を付けますので、今日から二週間、よろしくお願いじつ、い、痛っ!？」

思いきり舌を噛んでしまい、部員からどつと笑いが起きた。最後列でくすくすと笑うつばさと目が合つて、まどかの全身はかーつと熱くなる。噛んでしまった舌が、ひりひりと痛んだ。

昨日、この絶好のチャンスを逃すわけにはいかないと、ぜひつばさを題材にして作品を描かせてほしいと頼んだまどかに対して、つばさの出した返答は予想の斜め上をいくものだった。

「それなら、棒高跳びの練習を見学しない？私、絵のことは全然分らないけど、美術部の部室から見て私を描くんじゃ少し距離があるでしょ。もつと近くに来た方がいいんじゃないかな」

それはまどかにとって願ってもない提案だった。つばさの指摘する距離の問題に加えて、グラウンドの東隣に位置する美術部室では、左側から見たつばさの姿しか描けない。グラウンドのなかに入って、反対側や後ろからもつばさの跳躍を見ることができたらいいのにと、まどかは常々思っていた。

「見学できればありがたいですけど、でも、いいんですか？ご迷惑になってしまうんじゃない……」

「大丈夫だよ。練習の様子を見られてた方が張り合っても生まれるし、たぶん部長も顧問の先生も反対し

ないと思う。それに、その方が良い作品が作れるんじゃないよ？」

まどかがこくりと頷くと、つばさは満足げに微笑んだ。

「じゃあ、今から部長と顧問の先生に許可をもらいに行こう」

「えっ、今から、ですか？」

「そう。善は急げ、って言うでしょ？」

靴を脱ぎ、窓から入ってきたつばさに手を引かれて、まどかは職員室へと走った。

結果として、驚くほどあっさりと許可は下りた。

顧問の教師から出された条件は、二週間後の終業式までには見学を終えるようにという、その一点だけだった。なぜなら、終業式の翌週にはインターハイが控えているからだ。

インターハイ直前の七日間は、体調やメンタル面などで特に細かな調整が必要になってくる。そこに部外者のまどかがいて、ちよろちよろ動き回ってい

たら邪魔になってしまうのは言うまでもない。今年のインターハイには、棒高跳びからつばさが、四〇〇メートル走から二年生が一名出場することになっていた。

まどかはウォーミングアップを始めた棒高跳びのメンバーを眺めつつ、トートバッグからスケッチブックとカメラを取り出した。このカメラは、これから本格的に作品作りに取りかかるにあたって必要だと思ひ、家から持ってきたものだ。跳躍はあまりにも一瞬だから肉眼では捉えきれない部分も多いが、カメラを利用すればその点はカバーできる。

棒高跳びの練習は、いきなり跳躍を行うわけではない。肩や足をほぐすための各種ストレッチ、鉄棒のぶら下がり、ゴムチューブを使った足踏み、最初からボックスにポールを突き入れた状態での動作確認など、様々な基礎トレーニングを行ってからようやく跳躍に入る。ちなみにボックスというのは、ポールを突き入れる鉄製の四角い窪みのことで、コの字型をした着地マットの引込んだ部分に設置して

あるので外からは見えにくい。

そして跳躍にしても、最初から自分の最高記録レベルを跳ぶのではなく、段階を踏んで徐々に高さ上げていく。だから本気の跳躍ができるのは、一日にわずか数本だ。

華やかな跳躍の瞬間だけがクローズアップされがちな競技だが、その裏には地道で泥臭いトレーニングがある。

そういった、競技の派手なだけではない地味な部分も絵に含めたらどうだろうと、じつと基礎練習を見つめていたまどかに、休憩中のつばさが近寄ってきた。

「大平さん。私のポール、触ってみる？」

「えっ……いいんですか？」

ポールは棒高跳び選手にとつて命のようなものはずだ。素人が触れて良いものなのかと、まどかは戸惑ってしまう。

「いいのいいの。そんな簡単に壊れはしないから。ぜひ実物に触ってみて、ね？」

では貸していただきますと言って、まどかは慎重にポールを受け取った。重さは二キロほどだと、インターネットで調べていたので知っていたが、それでも実際に持つてみるとその軽さに驚く。こんな軽い棒一本であんな跳躍ができるのか。

まどかがポールに夢中になっている間に、つばさはまどかの足を起点として二〇メートルほど、等間隔でミニハードルを並べていた。

「じゃあポールを持ったまま、このハードルを越えてみて！」

ハードルの向こうからつばさが叫んだ。つばさが言うには、これは棒高跳びの初心者が行う助走練習なのだそうだ。

つばさに言われるまま、まどかは走りはじめた。ポールは重くないが、なにせ長さが五メートル近くあるので、持ったままのハードル越えはバランスを取るのが難しい。ただでさえ運動神経の悪いまどかは体の軸がぶれて上手く走れなかった。自分で自分の姿を見ることはできないが、きつとすごく変な格

好になっているのだろうな、とまどかは思った。

「あー、懐かしいなあ。私も最初のうちはこればかりだったんだよ」

そう言つてつばさは笑った。世の棒高跳び選手はみなこのステップを乗り越えてきたのだ。まどかは改めて尊敬の念を抱いた。

その日、跳躍の練習が始まったのは、部活動開始から一時間近くが経過し、空の青に朱が交ざりだした頃だった。

助走を始めたつばさにカメラを向け、連写機能を使つてその姿を追う。

——あつ。

メモリで撮影した写真を確認していたまどかは、あることに気が付いた。

——笑つてる。

ポールから手を離し、その身一つで空を舞った瞬間。

つばさは、たしかに笑つていた。

「うーうーん」

最終日の見学を終え、部室に帰ってきたまどかは、腕を組んで唸っていた。テーブルの上には、二週間のうちにとまった写真とスケッチが、所狭しと並べられている。

まどかが悩んでいたのは、つばさの身体をメインにして描くのか、それとも表情をメインにして描くのか、ということだった。まどかが最初に惹かれたのは、つばさの美しい跳躍——つまり身体だったのだが、カメラで写真を撮っていくうちに、跳躍時のつばさの、瞳をきらきらさせた笑顔も捨てがたいと思うようになったのだ。

そのとき、コンコンと窓を叩く音がした。振り返ると、窓の外には制服に着替えたつばさが立っている。風に乗って、制汗剤のオレンジのような香りが漂ってきた。

「よかったら一緒に帰らない？見学は今日で最後だ

し、大平さんと話がしたくて」

つばさからこうした誘いを受けるのはこれが初めてだった。見学をしていた二週間、陸上部が練習後のミーティングを行っている際にまどかは部室で写真やスケッチの整理をしていたので、二人の下校時間にはばらばらだったのだ。

「わ、私もぜひ先輩と帰りたいです！すぐに後片付けをするので、少しだけ待っててもらえますか？」  
「分かった。じゃあ校門で待ってるね。慌てなくて大丈夫だからね」

つばさはそう言って校門へ向かった。慌てなくて良いとは言われたが、先輩を待たせるわけにもいかない。まどかは大急ぎでスケッチと写真をカバンに詰め込むと、部室を後にした。

「どう？良い絵、描けそう？」

二人並んで歩きながら、つばさが尋ねた。学校から駅まで続く、両脇を田んぼに挟まれた田舎道には、すでに街灯がともっており生徒の姿はまばらだ。カ

エルとセミの大合唱がうるさいほどに響いている。  
「はい、おかげさまで。見学させていただきました。本当にありがとうございます。今はちよつと構図に悩んでるんですけど、でも絶対に良い作品になると思います」

「そっかあ、よかつた。作品、楽しみにしてるね」  
そう言われて、なんとか期待に応えなくては、とまどかには気合いが入る。

「とういか、先輩もいよいよインターハイですね。本当は私も、現地に応援に行けたらいいんですけど……」

「今年は東北開催だから、遠いよね。移動だけで一日かかっちゃう。気持ちだけで充分だよ。全然気にしないでね。ありがとう」

つばさは穏やかな表情をしていたが、その瞳の奥には静かな闘志が燃えているように思えた。もうすでに気持ちは、来週のインターハイに向かっていくのだらう。

そんな様子のつばさに聞くのは少しためらわれた

が、こうして並んで歩ける機会は今後ないかもしれない。まどかは思い切つて、前々からの疑問を尋ねることにした。

「あの、先輩はどうして棒高跳びを始めたんですか？失礼ですけど、棒高跳びってわりとマイナーな気がして……」

陸上競技には様々な種目があるが、そのなかでもよくメディアに取り上げられていて馴染み深いのは短距離走や長距離走のイメージだ。正直まどか自身も、高校でつばさの跳躍を目にするまでは棒高跳びの存在を意識することすらなかった。

「ああ、そうだね。なんで棒高跳び？って、結構よく聞かれる。始めたいと思つたきっかけはね、実は、大平さんが私を描きたいって言ってくれた理由と少し似てるんだ。ある人の跳躍を見て、『すつごくきれいな！私もあんな風に跳べるようになりたい！』って思つたの」

二人の傍らを、自転車に乗った女子中学生たちがぶざけながら駆け抜けていった。つばさは遠ざかっ

ていくその背中を、どこか懐かしそうに眺めた。

「中学一年生のときにね、三歳年上の兄さんが出る県の陸上大会を見に行ったんだ。兄さんは短距離の選手だったんだけど、私はそっちよりも、同時にグラウンドの奥の方でやってた棒高跳びに夢中になった」

そこでつばさは言葉を切った。青々と育つ稲の香りを孕んだ風が、二人のスカートの裾をばたばたとはためかせた。

「――すっごくきれいに跳ぶ人がいたの」

そう言つて、つばさは瞳を閉じた。記憶のなかにあるその美しい跳躍を、思い出しているのだろうか。

「その選手は、特に結果を残せていたわけじゃないんだけど。何というか、跳べることに喜びを全身で表現してたの。ああ、めちゃくちゃ棒高跳びが好きなんだなあって、見てるこっちも分かるような、そんな跳躍だった。それを見たら、私も棒高跳びやりたいうって、いてもたってもいられなくなつて。親に頼み込んでクラブに通わせてもらったの。私の

通つてた中学には、棒高跳びの設備も教えてくれる先生もいなかったから。高校は棒高跳びができるかどうかだけで選んじやつた」

つばさはタンつと前に大きく一步を踏み出すと、くるりと半回転して後ろを歩くまどかを見た。

「だからね、記録や賞ももちろん大切なんだけど、私にとつて一番嬉しいのは、跳躍を見てきれいだって、感動してもらえることなんだ。大平さんに絵を描きたいって言われて張り切っちゃつたのも、実はそういう理由」

そう言つて笑うつばさは、まさに跳躍の瞬間と同じ表情をしていた。大きな瞳が光を閉じ込めたかのようにきらきらと輝き、頬はほんのり赤く上気している。

これまでの競技人生は、決して楽しいことばかりではなかったはずだ。つらいこともあっただろう、苦しいこともあっただろう。つばさと出会う前のまどかと同じように、もう逃げ出してしまいたいと思つたことも、きつとあっただろう。

だがそれらをすべてひつくるめて、つばさは棒高跳びが好きなのだ。本当に、心から好きなんだというところが、その表情からは伝わってくる。

自分が何を描くべきなのか。今のまどかにとつて、それはもう明らかだった。

夕暮れの空を見上げると、そこには、つばさの瞳に似た一番星が輝いていた。

二〇二二年 夏

つばさは瞳を開いた。

開けた視界に映ったのは、曇天を四角く縁どる三メートル九〇センチのバー。今のつばさにはそれごとく、とても、とても高く見えた。

つばさはポールを持ち直すと、軽いテンポで歩きはじめた。棒高跳びの助走には二つ種類があるのだが、つばさが行っているのは「ローリングスタート」と呼ばれる方だ。あらかじめセットした足から助走

を開始するのではなく、徒歩からだんだんとスピードを上げていく。

バーが近づいてくると、つばさの脳内は悪いイメージに支配された。つい先ほど失敗した跳躍のイメージだ。何とかかわせたと思ったのに、右の太ももがわずかにバーにかすってしまった。その感触が、今もまだそこに残っているような気がする。

つばさは必死にそのイメージを拭い去ろうとしたが、どうしてもそれは頭にこびりついて離れてくれなかった。わずかに二秒足らずの跳躍では一瞬の気の乱れさえ命取りになる。しまった、と思ったときには、もう遅かった。タメの時間が長すぎた。

右足がバーに触れ、上下に大きく振動した。練習用のバーは、本番用のものとは違ってゴムで作られているから、揺れるだけで落ちてくることはない。失敗する度にいちいちバーを上げていたのでは効率的ではないからだ。しかし、落ちてはこないというだけで、跳躍に失敗したという事実は何ら変わりはない。

「日高、ちよつとこつちに来い」

グラウンドの外から、ベンチに座って練習の様子を見ていたコーチが手招きをした。こうしてコーチに呼び出されるのは今回で何度目だろうか。周囲の部員たちが、気まずそうにつばさから視線を逸らす。コーチのところに行きたいわけではなかったが、周りを部員に囲まれたその場所に立っているのも居心地が悪くて、つばさは小走りでコーチの下へと向かった。

「日高、少しのあいだ競技を休め」

「——えっ？」

つばさが到着するなり、コーチはそう言った。頭をガンと殴られたような衝撃が走った。

「休め、つて……それは一体、どういうことですか」

「言葉通りの意味だ。自分でも分かっていると思うが、お前は今スランプの真つただなかにいる。そしてそれは、頑張つて練習すりゃあ治るつてもものじゃないんだ。今の日高に必要なのは休息だ。俺はそう判断した」

しばしの沈黙のあと、つばさは口を開いた。

「……お言葉を返すようですが、それはできません。自分のことを一番分かっているのは自分です。たしかに私は不調です。でも、だからこそより一層練習しなければならぬんです。練習を休んだら、私はさらに悪くなつてしまいます」

「日高、お前な……」

コーチの諭すような声に、つばさの全身の血は逆流した。ボールを握る手に無意識に力がこもり、かたかたと小刻みに震えた。

「とにかく、今休むことは絶対にできません。それでは、失礼します」

言い切つてつばさは踵を返した。背後からコーチの呼び止める声が聞こえたが、つばさは決して振り返らなかつた。

——今休むなんて、冗談じゃない。

グラウンドに戻ってきたつばさに声をかける者はいない。誰しもが、つばさの存在を見て見ぬふりをしている。

——私の気持ちなんて、誰にも分からない！

怒りに任せた跳躍は高さが出ず、バーを足で蹴り上げる形になって失敗した。

二年前——つまり高校三年生の夏、つばさはインターハイで優勝を果たした。近い将来、必ず日本を代表する選手になると期待され、名コーチが指導する都内の有名私立大学にスポーツ推薦で入学した。

しかしつばさは、入学以降じりじりと調子を落としていった。

最初のうちは、田舎から東京に出てきたせいで、環境の変化に心と体が上手くついていけていないのだと思っていた。慣れてくれば元通りの跳躍ができるようになるはずだと、どこか楽観的に考えていた。だが調子は良くなるどころか日に日に悪くなっていった。大会でトップ争いに加われないのはもはや日常と化し、最近では予選の通過すらも危ぶまれる状態だ。インターハイ勝者のつばさをちやほやしていたメディアや部員たちは、みな蜘蛛の子を散らし

たように去って行ってしまった。

これまでもスランプに陥ったことは幾度かあった。しかし、こんなにも長く、かつ終わりのまったく見えないものは、これが初めてだった。

つばさ自身、何とかこのスランプを抜け出すことはできないかと、心当たりを自分なりに探ってはいた。その結果、原因として頭に思い浮かんだのは次の二つだった。

一つ目は、インターハイでの優勝がプレッシャーになってしまっているのではないか、ということだった。人間の心というのは氷山のようなもので、自分自身で認知できるのはそのわずか一角に過ぎないのだという。自覚はないが、もしかしたら勝者にふさわしい跳躍をせねばならないと、無意識下で重圧を感じているのかもしれない。

二つ目は、つばさがスポーツ推薦で入学したということだ。スポーツ推薦の生徒は授業料が免除されるのだが、成績があまりにも振るわなければその資格は剥奪されてしまう。

つばさの家は四人兄弟だ。兄は自立しているが、下に中学生の妹と小学生の弟がいる。授業料の免除が家計にとって大きな支えになっているのは紛れもない事実だ。このまま成績が落ち込みつづければ免除が打ち切られるかもしれないという焦りは、たしかに感じていた。

しかし、いくら原因を分析したところで、不調を抜け出す方法が見つかるわけではなかった。それに、この二つが本当にスランプの原因なのかと問われると、つばさは自信を持って頷くことができない。もつとほかに、より根本的な問題があるような気がしていた。

練習を終えて陸上部の寮に帰ったつばさは、食事と風呂を済ませると早々にベッドに入った。プライベート空間の充実を謳ったこの寮は、ひとりひとり個室が割り当てられており、壁は防音仕様になっている。だから今つばさの部屋には、枕元に置かれた時計が秒針を刻む音だけが聞こえていた。

カチ、コチ、カチ、コチ……。

秒針の音がやけに大きく頭に響いた。三〇秒、六〇秒、九〇秒……。もうベッドに入ってから何分が経ったのだろうか。

つばさは最近、うまく寝付くことができなかった。寝る前にホットミルクを飲んだり、ヒーリングミュージックを流してみたりしたが、どれも効果がなくて止めてしまった。睡眠薬に頼るのは何だか怖くて、まだ試せていない。

眠れなくても横になって体を休めた方が少しはまし、という考えから、なるべく早くベッドに入るようにはしているが、本来眠るはずの場所で眠れないというのは精神的につらかった。

結局その日、ようやく浅い睡眠に入れた頃にはすでに明け方だった。目が覚めたのは午前一〇時二〇分。三〇分後には二限目の授業が始まってしまふ。いくら部活で疲れていても学業は疎かにしない、というのがつばさの信念だった。つばさは大急ぎで身支度を整えると、部屋を飛び出した。

講義室に後ろの扉から駆け込むと、すでに教授が黒板に文字を書きはじめていた。期末試験が二週間後に迫ってきたせいで教室は超満員だ。きよろきよろと室内を見回し、中央あたりの席でこちらに向けて手を振る友人の姿を見つけた。つばさは足音を立てないよう、極力努力してその場所まで移動した。「おはよう、つばさ。プリント取っておいたよ」

友人が小声で言った。彼女の名前は、添島弥生という。ころんとした丸い黒ぶち眼鏡と、肩の上で切りそろえたボブヘアが印象的だ。

つばさと弥生は、たまたま新入生オリエンテーションで隣の席に座ったのがきっかけで仲良くなった。スポーツ推薦の枠の都合で半ば強制的に文学部が割り当てられてしまったつばさに対して、弥生は根っからの文学少女で、カバンのなかには常に二、三冊の文庫本が入れられていた。

二人の趣味嗜好は正反対だったが、それが不思議と噛みあうような感覚がつばさにはした。弥生の隣

にいと、自分の知らない新しい世界が開けていく。お互いに地方出身者ということもあって、二人はあつという間に打ち解けた。

つばさは今、弥生と過ごす時間が一番心地良かった。なぜなら弥生は競技のことに関して口を出してこないからだ。つばさから話題にすれば興味を示してくれるが、自分から尋ねることは一切しない。素人の自分があれこれ言うべきではないと、気を遣ってくれているようだった。

あくびが出そうになるのを堪えながら、つばさは何とか一〇〇分間の授業を乗り切った。学生たちが一気に喋りはじめ、講義室はにわかに騒がしくなった。

「はー、授業長かった。朝ごはん食べてないからめちやくちやお腹すいたよ。弥生、お弁当持ってきた？」

「ううん、今日は持ってきてない」

「そっか。じゃあ食堂に行く？それともコンビニで何か買う？」

つばさは素早く荷物をまとめ、講義室を出ようとしたが、弥生は机の前に突っ立ったまま動こうとしない。

「弥生？どうかした？」

つばさが問うと、弥生は意を決したような表情をした。

「……あのね、つばさ。実は前から言おうと思ってただけど……。部活、少しのあいだ休んだ方がいいんじゃないかな」

「——は？」

自分でも驚くくらい、威圧するような低く鋭い声が出た。弥生の肩が、びくりと震えたのが分かった。

「ごめん、素人の私が出すことじゃないって、分かっている。でも、それでも言わせてほしい。ここ最近のつばさ、本当にひどい顔をしてる。全然眠れてないんでしょう？つばさにとつて競技が大切なのは知っているけど、それで体を壊したら元も子も……」

「弥生に何が分かるのよ！」

つばさは声を荒らげた。講義室がしんと静まりかえり、二人に視線が集中した。

「弥生は競技のことなんて何も知らないでしょ！私はいま休むわけにはいかないの。そんなことをしたら私は、もう二度と競技に戻ってこれなくなるかもしれない……！」

「つばさ、落ち着いて……」

弥生の宥めるような声が、昨日のコーチのそれと重なった。弥生が差し出した手を、つばさは思わず振り払ってしまった。

「痛っ……」

その声で、つばさははっと我に返った。

「——あつ、ごめん弥生。大丈夫？私、私、そんなつもりじゃ……」

つばさは混乱した。私は何をやっているのだろうか。競技は上手くいかない。大切な友達は傷つける。自分は一休、いつからこんな駄目な人間になってしまっていたのだろうか。

黙ってうつむいているつばさに向かい、弥生は笑

顔を作った。

「大丈夫。私の方こそごめんね。つばさの気持ちも聞かずに……」

——違う。

——悪いのは私だよ。

そう言いたいのに、喉がひりひりと焼け付いたようになつて上手く声が出せなかった。込み上げてきた涙で視界が歪む。弥生の目を見ることはできなかった。

「——ちよつと頭冷やしてくる。本当に、本当にごめん」

つばさは掠れた声でそう言つて、逃げるようにその場から走り出した。

つばさは講義室前の階段を下りたところにあるトイレに入った。洗面台の水道で手を濡らし、それを額に当てる。血の上った頭が強制的に冷やされると、徐々に落ち着きを取り戻しはじめた。

「私、何やってんだろ……」

ため息を吐きながらつばさは鏡を見た。そして、鏡のなかの自分と目が合つて驚いた。

つばさの顔は寝不足のせいか全体的に青白く、頬やあごの所々には吹き出物ができてしまつていた。

目は赤く充血し、その下にははつきりと濃い隈が刻まれている。見るからに健康的ではない。とても醜い顔だ。

「いつからこんなひどい顔になつてたんだろうな……」

頬に手を添えて、つばさは力なく笑つた。鏡をじっくりと見る心の余裕すら、自分にはなかったのだ。

本当はどこかで自覚していた。こんな状態で良い跳躍ができるはずはないと。それでも練習を止めるのは怖かった。コーチや弥生に対して怒りを露わにってしまったのは、凶星を指されたからにほかならない。

つばさは頬を両手で叩くと、講義室へと引き返した。まず弥生に謝ろう。そして、その後にコーチと話をしに行こう。

自分がこれからするべきことを、確かめるために。

「あつつい……」

周りに誰がいるわけでもないのに、つばさは思わずそう漏らした。

つばさは両脇を延々と田んぼに挟まれた道を一人歩いていった。山の麓にある無人駅から、母校である明日葉女子高校へと続く道だ。

空は灰色の厚い雲に覆われ、太陽は隠れていたが、湿度が高いせいでじんわりと纏わり付くような暑さだった。額には汗が滲んで、前髪がべったりと張り付く。これなら太陽が出ていてもカラッと気持ちよく晴れてくれた方が良いのに、とつばさは内心で愚痴をこぼした。

前期の試験が終了し、八月から夏休みに入ったつばさは、二週間の休部届けを提出して実家に帰って

きていた。少しのあいだ競技から離れ、まずは心身の回復を図るべきだと、弥生やコーチとじっくり相談し、つばさ自身も納得して決めたことだ。

つばさは今まで競技を最優先して夏休みも正月もろくに帰省していなかったから、家族はとても歓迎してくれた。毎日のように車で市街地まで連れて行かれ、東京で足りていないものはないかと、洋服や食料品をたつぷりと買わされる。つばさはもう充分だと遠慮をするのだが、何かしら買わないと母親が納得しないので最後には折れるしかなかった。

買い物から帰つてくると、今度はやんちゃ盛りの子に外へ連れ出される。ある日は河原に行つて水切りを、ある日は山に行つて虫捕りを。夕方に帰る頃にはもうへとへとだ。母の手料理をお腹いっぱい食べ、虫やカエルの鳴き声を聞きながら布団に入ると、久しぶりに良く眠れた。隈はなくなつたし、吹き出物も少し跡にはなつてしまつたけれど落ち着いた。頭に競技のことがちらつかないと言えば嘘になるが、家族はそれを話題に出すことはないし、買い物に遊

びにと一日中連れ回されていれば、自然と競技についてぐるぐる悩む時間は少なくなつた。

そのようにしてあつという間に時間は過ぎ、明日がいよいよ実家で過ごす最終日になつた。滞在を延長することもできるが、一度延ばしたが最後、そのままずるずると帰れなくなつてしまいそうだから、期限を切つて二週間後には必ず東京に戻ると決めていた。

だがこのまま帰つたところで、果たしてスランプから抜け出すことはできるのだろうか。川原で石遊びをする弟を眺めながらつばさは考える。東京に戻つた自分に待っているのは、あのつらい日々の延長戦でしかないのではなからうか――。

ぼんやりと向こう岸に目を向けると、そこには歩く一人の学生の姿があつた。つばさが三年間を過ごした、明日葉女子高校の生徒だ。

それを見て、つばさの頭にはある考えが閃いた。

「――あつ」

思わず声を出してしまい、弟が不思議そうにつば

さの方を振り返つた。つばさが何でもないと云うと弟はふうんと答えて、それきりつばさへの興味を失つたかのように、再び石遊びに没頭した。

つばさが思い付いたこと。それは、明日葉女子高校へ行ってみることにだつた。つばさが今までの競技人生のピークを過ぎたその場所に行けば、何かしら復活への手がかりが掴めるかもしれない。空振りだつたとしても、このまま何もしないで帰るよりはマシだろう。

そんな思い付きで、つばさは母校を訪ねることにしたのだつた。

駅から二〇分ほど歩いて、ようやくつばさは明日葉女子高校に辿り着いた。

周りを人の背より高い塀でぐるりと囲われたそこは、正面からは数年前に建て直されたばかりの新校舎だけが見え、歴史を感じさせる旧校舎はその陰に隠れている。新校舎の白く輝く外壁は、田と山が織

りなす緑のなかでは一層目を引き、ここ一帯のシンボルマークとなっていた。

校門から敷地内へ足を踏み入れると、つばさは緊張してしまつてそわそわと落ち着かなかつた。三年間通つた母校のはずなのに、なぜか懐かしいという感情は湧いてこない。まるで話には聞いていた友人の学校を訪ねていったときのような、既視感と新鮮さの入り交じつた変てこな感覚がした。

それはたぶん、今の明日葉高校にとつて自分は他人だからなのだろう、とつばさは思う。学校は絶えず変化する。なぜなら学校を作っているのは、そのときそこにいる生徒たちだからだ。今の明日葉高校は今ここで学ぶ生徒たちのものであり、そこに自分の居場所が用意されているはずはない。

つばさは入校の許可をもらうため校舎のなかに入った。職員室には二年生のとき英語を習っていた女教師がいたが、彼女はちょうど三年の進路相談に乗っている最中だったので、内心で覚悟していた長い世間話に付き合わされることはなかった。

昇降口に戻つて靴を履き、新校舎と旧校舎の間の通路を通つてグラウンドへと向かう。だんだんと生徒たちの声が近づいてきて、壁の隙間からも練習を行つている様子が見えはじめた。

陸上部のメンバーのなかに、つばさの見知つた顔はなかった。つばさが知っているのは当時の一年生——つまり今の三年生だが、三年生はインターハイ後に全員引退してしまうのが慣例だ。明日葉女子高校は一応県内では四、五番目くらいの進学校だから、三年生はみな夏には部活から受験勉強へとスイッチを切りかえる。

つばさの知らない後輩たちが次々とバーに向かつて跳躍していく。つばさは彼女たちの姿に、過去の自分のそれを重ねた。あの頃は良かった。あの頃に戻りたい。どうしてこうなつてしまったんだろう。どろどろとした感情が心の奥から溢れてきて、つばさの足はその場に張り付いたように動かなくなった。そうしてしばらくそこに佇んでいると、急に右脇から名前を呼ばれた。

「――もしかして、日高先輩ですか？」

その声には聞き覚えがあった。声が出た方に顔を向けると、そこには旧校舎の窓から身を乗り出す一人の生徒がいた。

「大平……さん？」

「はい！大平まどかです！先輩、お久しぶりです」

そう言つて笑つたまどかは、二年前とはだいぶ雰囲気が違つていた。当時は制服に「着られている」といった感じの、どこかおどおどした少女だったのに、今ではすっかり大人びて、落ち着いている。それも当たり前だとつばさは思う。まどかはいまや三年生、この学校の最高学年なのだから。

つばさとまどかは、作品制作のための見学以来、校内ですれ違えば言葉を交わすくらいの仲にはなつていた。連絡先も交換したし、昇降口でばったり会えば、一緒に帰ることもあった。

だがつばさが卒業してからは、連絡は一度も取つていなかった。学校のなかの人間関係とはそういうものだ。特別仲が良くないかぎり、学校という共通

のフィールドを失えば、急速に疎遠になる。

つばさは言いようのない不安に駆られた。自分の跳ぶ姿に惹かれて、絵まで描いてくれたまどか。まどかは今の自分の状態を知っているのだろうか。まどかが憧れたあの頃のつばさはいないのだと分かつたら、どう思うだろう。幻滅するだろうか。それとも、そんな興味すら、今は失っているだろうか。

そんなつばさの心情を知つてか知らずか、まどかは明るい調子で続けた。

「先輩、いまお時間ありますか？」

「えつ、うん……ある、けど……」

まどかの発言の意図が読めず、つばさの語尾は小さくなる。

「実は、先輩を描いたあの絵が三階の渡り廊下に飾られてるんです。校長先生が気に入っちゃつてどうしても飾りたいって言うので、私が卒業するまでは、つてことにして。私もあの絵はすごく好きだから、学校にあげちゃうのはちよつと嫌で……」

まどかの言葉を聞き、つばさの頭は絵に関する記

憶を辿りはじめた。

つばさは二回だけ、まどかが描いたその絵を見た。一度目は完成直後、二度目は学校の文化祭でだ。たしかタイトルは『一番星』といったその絵は、文化祭のあとに出品した県展を勝ち抜いて全国まで行つた。だからつばさが卒業するまでにまどかの手元に戻つてこず、以降は連絡も取つていなかったから見る機会がなかったのだ。

二年も前のことだし、二回しか見ていないから、正直つばさはどんな絵だったかぼんやりとしか思い出せない。初めて見たとき、すごくよく描けているなあ、なんか照れくさいけど嬉しいなあ、と思つたことだけは、はつきりと覚えていた。

「そうだったんだ。……うん、私も大平さんの絵、久しぶりに見たいかも」

せつかく描いてもらったのによく覚えていない、というのも申し訳なくて、つばさはそう答えた。

「ありがとうございます！それじゃあ、行きましようか」

まどかは、どこかほつとしたような笑みを浮かべた。

まどかに連れられて、つばさは旧校舎の階段を上つていった。

一階と三階の渡り廊下には壁が一部奥まっているスペースがあつて、そこに卒業生が寄贈した書道や彫刻などの作品が展示されている。まどかの絵も、そこに飾られているということだった。

二人が三階に到着し、渡り廊下を歩いていくと、空を塞いでいた分厚い雲にほんの少しの切れ間が生まれた。そして、そこから淡い一筋の光が差し込み、壁を照らした。

まどかの足は、その光が差しした場所の前で止まった。

「着きました」

つばさは優しい光を浴びたその絵を見て——言つた。

「……私、こんな顔してた……?」

そこには、喜びに満ちた笑顔で跳ぶ自分の姿があった。  
つた。

バーを越え、ポールから手を離れた瞬間を切り取ったその絵は、つばさの表情にフォーカスしたものになっている。光を含んできらきらと輝く瞳、生き生きと口角の上がった唇。そこからのぞく白い歯と、興奮で少し赤くなった頬。

「はい。先輩は跳ぶとき、とつても楽しそうな顔をしてました。先輩、覚えてますか？あの日……初めて一緒に帰った日に、話してくれたこと」

——すつごくきれいに跳ぶ人がいたの。

——だからね、記録や賞もちろん大切なんだけど、私にとつて一番嬉しいのは、跳躍を見てきれいだって、感動してもらえることなんだ。

「ああ……」

決して忘れていたわけではなかった。ただ、思い出す機会がなかった。記録、記録、記録。今のつばさはそればかりで、見失ってしまった。自分なぜ跳んでいたのか。なぜ、跳びたいと思ったのか。

とても大切な、立ち返るべき原点を。

「……私、跳べるのかなあ。また、この頃みたいに……」

自然と涙が込み上げ、頬を伝った。まどかが隣にいるのに情けないと思いつつも、それは堰を切ったようにぼろぼろと溢れて、止まらなかった。

「跳べます」

まどかが言った。

「先輩は跳べます」

その声は願望を込めたような、「そうならいいな」と言い聞かせるようなものではなく。確信しているようだった。絶対に変わることはない、揺るぎない事実として。

まどかは、つばさ以上に、つばさのことを信じてくれている。

「だって私、知ってます。先輩は棒高跳びが大好きなんです。誰よりもずっと。もう一生絵は描けないかもって苦しんでた私に、思わず絵を描かせちゃうくらいに」

ああ、きつとまどかはすべて知っていたのだ、とつばさは思った。そして、これを伝えるために、自分をここに連れてきてくれたのだろう。

「だから、先輩」

まどかはつばさの手を握って、まっすぐな瞳で言った。

「私にまた、先輩の絵を描かせてくださいね」

翌日、つばさが東京に戻ってきた頃には、もう夕方だった。

つばさは荷物も片付けなまま、真っ先に大学のグラウンドへと向かった。突如として現れた運動着姿のつばさを、陸上部の部員たちは驚いた様子で遠巻きに眺めた。

「良い顔してるじゃないか。まるで憑き物が落ちたみたいにさっぱりしている」

コーチはそう言って笑った。憑き物か、たしかにそうだったのかもしれないと、つばさもつられて笑

ってしまった。

「どうだ。一本、跳んでくか？」

「えっ、いいんですか？」

つばさが問い返すと、コーチは少し呆れた顔をした。

「いいんですかって、お前、ジャージで来てるじゃないか。今、跳びたくて跳びたくて仕方がないんだろう？」

「——はいっ！」

つばさは大きく返事をする、走って倉庫から自分のポールを持ってきた。二週間ぶりの感触。やはり、自分にはこれがしっくりくる。

もう大丈夫だ、とつばさは思った。これから先、つらいこと、苦しいこと、どんなことがあつたとしても。自分には原点がある。それはまるで夕空で最初に輝き出す星のように、いつでも私を導いてくれる。そのことを、彼女が思い出させてくれたから。

つばさは走り出した。

赤い空に光る一番星に向かって。

飛びたつ準備は、  
できている。



「おはよう、ユーグレナ」

堅田 瑛子

■受賞のコメント■

この度、佳作を受賞できたこと、大変嬉しく思います。

私は、実家から生田キャンパスまで、往復三時間以上かけて通学しています。電車の中では勉強していることが多いのですが、疲れている時は、景色を眺めながら、空想を描いていることがあります。夏前のある日、偶然この賞の存在を知り、折角だからこの空想を小説に昇華してみようと思いいちました。小説を書こうと思ったのは、これが初めてで、受賞どころか、完結させることを目標に書き始めました。

しかし、頭の中の事を文面にするというのは、思いのほか難しく、また、別に誰に頼まれたわけでもなければ、強制されているわけでもないのに、自分は一体全体何をしているのだろうと、変な気持ちになって、書くことを途中で止めてしまったこともありました。ですが、締め切り直前になって、何とか完成させることができ、形容しがたい喜びを得たことを覚えています。この賞の存在は、私に文学の新しい楽しみ方を教えてくれました。

最後になりますが、このような素晴らしい機会を設けてくださった、明治大学連合父母会様、(株)阿久悠様、および、この賞に関わる全ての皆様に、心より感謝申し上げます。

おはよう、ユーグレナ

反省文、というものとは、無縁な人生を送ってききました。

何を書けば良かったのでしょうか。当たり障りのない、普通の文を書いたつもりです。まあ、でも、そこに私の真意はありません。貴方は、あまり当てにしないで下さい。いえ、そもそも、貴方は読んでいないのでしょうか。

これは、反省文ではありません。ただの私信です。別に、この内容を反省文に書いても良かったのですが、皆さんには、信じてもらえないでしょうし、無駄なことですから、それは控えました。与太話を語り始めたと思われても、仕方ないようなものなのです。また、学校宛ての反省文では、貴方に読んでもらえない可能性があります。それは絶対に嫌でした。

私は、貴方のことを嫌いですが、それ以上に貴方を信じているのです。私のことを理解してくれるのは、今や、貴方だけなのですから。貴方にも置いて

いかれたら、私は、ああ、すみません。話が逸れました。とにかく、これから書くことは、私が知っている全てのことであり、私しか、知らないことです。私は、私の思い出を共有しようと、貴方に言っているのです。私は、恥を忍んで、相当の覚悟で貴方に伝えようとしているのです。

でも、そんなことは、どうでもよいのです。この私信も、自己満足に過ぎません。いえ、単なる愚痴、なのでしょうか。私の中にあつたのは、正義でも、義務でも、権利でも、何でもなかったのですから。ですが、貴方が、これを読むことによって、私はやつと救われる気がするのです。私には、貴方以外、何も残っていないのです。なんて空しくて、つまらない。でも、貴方が認めてくれるのならば、私は、少し前に進むことができる気がするのです。ええ、何から書けば良いのでしょうか。そうですね、とりあえず、私が彼女と初めて会った時のことを書きましょう。

私が彼女に初めて出会ったのは、高校二年生の夏

のことです。

夏休みが始まったばかりのある日、私は、学校にいました。部活にも所属せず、普段、つまらない勉強に時間を費やしている私ですが、その日は、学校に置き忘れてしまった生物のノートを取りに来ていたのです。

日が沈みかけた頃に家を出たのですが、夏のうだるような暑さに、運動不足の身体は、今にも音を上げそうになっていました。そんな中、グラウンドで大きな声を上げ、必死に白球を追う男子生徒たちを尻目に、私は、教室棟に向かいました。

無人の教室は、茹るような熱気に包まれていました。その不快感に辟易しつつも、私は、自席の机の中を覗き込みました。しかし、そこは空でした。その後、ロッカーにも向かったのですが、隅に埃が溜まっているだけで、何も残っていませんでした。ノートは、いくら教室を探しても、見つかりません。そこで、ふと、夏休み前最後の生物の授業が、生物実験室で行われたことを思い出しました。あの時、ノートを実験室の机に置いてきてしまったのかもし

れません。そう考えた私は、教室棟から少し離れた、生物実験室のある三号棟へ向かいました。

慣れぬ暑さに閉口しながらも、がらんどろになったグラウンド脇を三号棟へ向かって、真つすぐ歩いていきました。ようやく校舎まで着いた時、私は、生物実験室の鍵を借りるのを忘れていたことに気が付きました。もし、生物実験室に誰もいなければ、鍵が掛けられているでしょうから、入ることが出来ません。しかし、鍵を貸し出している事務室と、職員室は、いずれも教室棟にあります。引き返すのを面倒に思った私は、誰かが実験室を利用していることに賭けて、階段を上りました。

三階の生物実験室までたどり着くと、実験室の明かりが灯っていることに気が付きました。実験室からは、ガラスの擦れ合う音が響いてきます。私は、引き戸を三回、ノックしました。しかし、中から返事はなく、また、声を掛けても、何の回答もありませんでした。恐る恐る、私は、引き戸に手を掛けました。すると、鍵は掛かっておらず、小さな音を立てて、簡単に扉が開きました。

そこには、少し汚れた白衣を身にまとい、長い黒髪を粗雑に縛った女子生徒がおりました。

「ああ、もう片付けて出ます……、あれ、先生じゃない。どうかしましたか。忘れ物ですか？」

突然の闯入者である私に、彼女は友好的な姿勢で、話しかけてくれました。事情を説明すると、自由に探して構わない、と、私に言って、彼女は、机に置かれたガラス器具を手に取り、水道でそれを洗い始めました。その間、私は、先日、使用した机と、教卓の周りを見たのですが、ノートはありませんでした。

「どう？ あった？」

ちらちらと、こちらを気にかけてくれた彼女に、見つからなかったことを話すと、彼女は、まるで自分手のように、残念そうな表情を浮かべ、私に励ましの声を掛けました。

何かしらの実験をしていた彼女の邪魔をしてはいけないと考えた私は、すぐに立ち去ろうとしました。しかし、ふと、彼女の手元にある十本以上の藍色の液体が入ったフラスコに目が行きました。それらは、

それぞれ色の濃さが異なり、美しいグラデーションを形成しておりました。思わず、私は、それが何か尋ねました。

彼女は、突然、話しかけられたことに驚いていたようでしたが、やがて口角を少し上げると、わざと声を低くして、一言、こう答えました。

「ミドリムシ」

はあ。

自分でも分かるほど間抜けな声が出ました。

ミドリムシ。教科書で見たことはありませんでしたが、直接、顕微鏡で見たことはありません。そもそも何故、ミドリムシがそこにあるのでしょうか。彼女が育てているのでしょうか。また、それが名の通り、全身が緑色の微生物であると認識していた私は、藍色の液体を指してミドリムシだという彼女の言葉を疑いました。

顔に出っていたのでしょうか。そんな私の様子を見た彼女は、クスクスと笑い始めました。

「ごめん、ごめん。分からないよね。ミドリムシは分かる？ 教科書に載っている、微生物」

私が小さく頷くと、彼女は、穏やかな笑みを浮かべ、いいねえ、と漏らし、話を続けました。

「これは、ミドリムシの栄養になる、農薬の色。これらは、今日、セッティングしたのだから、農薬の色しか見えないの。そのうち、ミドリムシの数が増えて、綺麗な緑色になるよ」

なるほど。でも、なぜミドリムシを、そう聞こうと口を開くも、今度は本当に見回りの先生がやってきて、それを遮りました。

「おや？ 人がいたのですね。もう下校時刻ですよ。鍵を閉めるので、早く出なさい」

実験室の時計の針は、すでに下校時刻を二分過ぎたところを指していました。

私は、教師の言葉に従い、帰り支度を始めました。彼女は、手元のフラスコを、恒温機の中に一つひとつ、丁寧にに入れていきました。その姿を見て、手伝いを申し出たのですが、彼女は、あと少しだから、と優しくそれを断りました。手持無沙汰になった私

は、彼女に礼を言つて、先に立ち去ろうとしました。しかし、突然、彼女が、力強く、私の手首を掴んできました。鈍痛に顔を歪めた私に構わず、彼女は口を開きました。

「毎週金曜日、ここにいるの。気になったらおいで」

私は、返事を濁しました。彼女にも、ミドリムシにも強く惹かれたにも関わらず、その時、彼女がひどく不気味に思えたからです。身の毛がよだち、全身の血の気が引いていくことを実感しました。

彼女の手が、夏にも関わらず、ひどく冷たかったからでしょうか。

彼女の背後の剥製標本に気味の悪さを覚えたからでしょうか。

私は、彼女の手を強引に払って、その場から逃げ出しました。隣の教室を先に施錠していた先生に挨拶をして、階段へと向かう途中、生物実験室の方から、カチャリ、と鍵の閉まる音が聞こえました。彼女に追いつかれることを嫌って、振り返ることもなく、私は、階段を駆け下りました。右手首は、赤紫色に染め上げられていました。

夏休み明けの金曜日、授業を終え、私は、生物実験室へと向かいました。夏休み中、私は、生物実験室どころか、学校にも足を運びませんでした。彼女の不気味さに気後れしていたからです。しかし、その恐怖心の一方で、彼女に会いたい、会わなくてはいけないという、願望や、焦燥感に駆られるようになっていました。

単に親切にしてくれた礼を言いたかったからかもしれません。

先日の非礼を詫びたかったからかもしれません。

或いは、彼女にただ会いたかったからかもしれません。

自分でも訳が分からないまま、私は三号棟の階段を上っていました。

生物実験室の引き戸の隙間から、かすかに光が漏れていました。ガラスのかち合う音が聞こえ、その音の心地よさと、彼女という存在の不気味さから、私は実験室に入るのを躊躇っていました。すると、引き戸が音を立てずに静かに開かれました。

「やっぱり、貴方だったのね。さあ、入って」

彼女は、外にいた私の様子に気づいていたようでした。私は、彼女に促されるまま、木製の丸椅子に座りました。

正面の机には、少しふやけたノートや、使い込まれたペンが散乱し、また、駒込ピペットや少し緑色を帯びた液体が入ったフラスコがいくつか置かれています。彼女は、机に備え付けられた水道でガラス板や、駒込ピペットを手際よく、丁寧に洗っていました。洗い終えたものは、水気を払ってから、ペーパータオルの上に、順に並べられているようでした。

一区切りついたのか、彼女は濡れた手をいい加減に払って、私の向かいに座りました。

「来てくれてうれしいわ。話し相手が欲しかったのねえ、何を話そうか」

彼女は暖かな笑みを浮かべ、私の目を見つめながら話しかけてきました。何故、ミドリムシを育てているのか、何故、実験室を一人で使っているのか、あなたは誰なのか、聞きたいことは沢山ありました。

しかし、突如、この前と同様、私は彼女が不気味に思えてきました。私の足は恐怖で小さく震え始めました。何故かはわかりません。彼女の暖かな微笑みと、以前、私を捕らえた、氷のように冷たい彼女の掌のちぐはぐさに、私は、底知れぬ恐怖を感じたのです。すると、たちまち、何の言葉を発せなくなり、ただ、彼女を見つめることしかできなくなりました。まるで、誰かに喉元を押さえつけられたような感覚でした。

「ああ、ごめんなさい。緊張しているのでしょうか。急に言われても思いつかないよねえ。そうね、ミドリムシでも見る？」

私は、彼女のその提案に、かろうじて頷くことができました。すると彼女は、嬉しそうに立ち上がると、乾燥している新しい駒込ピペットに、ゴム製の持ち手を取り付け始めました。その様子を見て、我に返った私は、感謝の言葉を述べました。この声も、小さく、震えたものだったでしょう。ですが、彼女は、聞き返すこともなく、柔らかな笑みのまま、口を開きました。

「気にしないで。私が、あなたに見てほしいの」  
彼女は、三角フラスコに入った液体を駒込ピペットで吸い上げると、ガラス板に一、二滴垂らししました。カバーガラスを静かに被せ、さらに、上からペーパータオルを優しく被せると、カバーガラスの周りから、はみ出した液体が吸い上げられ、ペーパータオルを徐々に濡らしていきました。無駄のない、彼女の美しい所作に、私は、思わず見とれていました。

「こつち」

彼女は、手招きして、実験室の一番奥の机まで、私を連れて行きました。その机には、顕微鏡が、一台と、古臭いブラウン管テレビが置かれていました。

彼女は、顕微鏡の正面に座ると、先ほどのガラス板をセットし、レボルバーを回しました。調節ねじをゆっくり回し、ピントを合わせていきます。ねじをひねる、白く、しなやかな彼女の指は、彫刻のような美しさを秘めていました。

やがて、彼女の指の動きが、ピタリと止まりました。

た。

我に返って、彼女の指から目をそらしました。彼女は接眼レンズから目を離し、立ち上がって、私に席を譲りました。

「覗いてごらん」

彼女に勧められるがまま、席に座って、接眼レンズに目を当てると、視界に、緑色の紡錘形をした生物が飛び込んできました。それらは、まるでステンドグラスのような透明感と、トルマリンのような鮮やかな輝きを放ち、生命力に満ち溢れた美しい緑の身体を持っていました。全身を大きく伸縮させ、自由自在に動き回るその生物は、私の知る限りで、最も魅力的な生命力を秘めていました。私の腹の奥底が、これまでに経験のない感動に、痙攣を起こしていました。

「綺麗」

無意識の内に、その言葉が出てきました。

私は、この時まで、ミドリムシを教科書の写真で

しか見たことがありませんでした。その時は、特に感動することもなく、興味も持っていませんでした。たかが、微生物。そんなものに、綺麗だなんて、思いませんでした。

しかし、実際に顕微鏡で見ると、不思議なことに、何よりも輝いて見えるのです。狭い視野の範囲で、入れ代わり立ち代わり、別個体が視界に侵入してくるのですが、その中に、全く同じ形、同じ動きをしているものは、一つとしてないのです。少し丸っぽい個体や、細長い個体、伸び縮みしながら、ぐんぐんと進んでいく個体、ぐるぐると、その場で回り続けている個体。唯一、共通していることと言えば、皆、何にも囚われていない、ということでしょうか。

突然、視界が歪みました。

瞳に涙が溜まり始めたことに、少し遅れたタイミングで気づき、私は顔を上げました。すると、とめどなく、涙が溢れてきました。その涙の理由も、止める術すらも知らない私は、ただただ、涙を流しま

した。

私の涙に動揺した様子を見せた彼女は、実験室中を駆け回ると、やがて、私に、一枚のペーパータオルを渡してきました。息を切らして、必死に、私にそれを渡そうとする彼女の様子がなんだか愛おしくて、また、その間も涙は頬を伝い続けているのですから、それも、相まってどこか可笑しくて、私は、笑ってしまいました。はじめに感じていた、彼女に対する気味悪さは、この時、すっかり無くなっていました。私は、彼女のペーパータオルを受け取りました。

「新品ですよね？」

「あ、当たり前でしょ」

彼女は、気が抜けたのか、その場にしゃがみこんでしまいました。その後、お互い、顔を見合わせるど、二人で笑いあいました。

スライドガラスを手を取って、元の席に戻ると、彼女は「少し作業をしてもいい？」と私に聞いてきました。私は、構わないと伝え、邪魔にならないよ

う、彼女が作業をしている、隣の机の席に移りました。彼女の作業を、少し遠くから見つめ、私は、自分のことを、彼女に話しました。

クラスで過ごすことが苦手なこと、引きこもりの姉がいること、姉のようになるなど、常にトップの成績を求めてくる両親のこと、本当は勉強が苦手なこと、過度に期待してくる学校や、塾の先生のこと。

当時の私は、自分の限界をはるかに超えて努力していました。夏休みに生物のノートを取りに来る必要なんて、本当はなかったのです。あの日、私は、塾をさぼって、逃げ出していただけでした。

彼女は、特に私を慰めることなく、また、作業を止めることもなく、簡潔な相槌を打っただけでした。

しかし、その彼女の御座なりな態度が、私を穏やかな気持ちにさせてくれました。

その後、彼女に教わりながら、片付けを手伝っていると、窓からの光が、濡れたガラス器具を照らしました。顔を上げると、空が、赤みを帯びて、美しいグラデーションを描き始めたことに気が付きました。彼女も、同じ空を見ていました。

「ねえ、ミドリムシの学名って知ってる？」

彼女は、夕日を見つめながら、私に問いかけました。

首を振ると、彼女は少し口角を上げ、内緒話をするように、顔を近づけました。

「ユーグレナ」

彼女の声は、どこか妖艶さを持ち合わせていました。しかし、私は、それ以上に、あの美しい生物の別名を知ったことに、若干の興奮を覚えていました。

「もとはラテン語なの。由来は、そうねえ、次、来た時に教えてあげる」

彼女は、片付けに戻りました。私は、また、彼女と会うことが約束されたことに、心が躍りました。

浮かれていたのは彼女も同じだったようで、数年前に大ヒットした男性アイドルの曲を、彼女は口ずさみ始めました。私もそのリズムに乗って、体を揺らし、作業を続けました。

やがて、彼女は、先生に進捗を報告してから帰る

から、と私に先に帰るように勧めました。どうやら、

その先生は施設のついでに、ここに来てくれるそうでした。私のような、部外者を実験室に入れていることは、伝えていないらしく、私が先生と遭遇しないことを、彼女は望んでいました。私も、彼女が叱責されるようなことは、望んでいませんでしたので、その言葉に大人しく従いました。

帰り際、彼女は実験室の引き戸の前まで、私を見送ってくれました。彼女の瞳は、夕日の美しい輝きを吸収し、紅く、煌めいていました。

それから、毎週金曜日の放課後、生物実験室は、私たちの秘密基地となりました。

彼女の実験の手伝いをする傍ら、私たちは、くだらない話をして、笑い合っていました。体育科の強面の先生が、実は娘を溺愛しているとか、国語科の中年の女性教師が、実はロックバンドのファンであるとか、どこから仕入れてくるか分からない情報を、彼女は自慢げによく話しました。また、彼女は、案外冗談もいう口で、度々、私を困らせました。彼女

が尊敬しているという担任の生物教師が、まるで陰毛のような髪型で、気になって仕方ないなんてことを、真面目な顔をして言うものですから、それ以来、私は件の生物教師を見かけるたび、笑いを堪えるのに必死でした。

また、時折、互いの話をしました。彼女はあまり、自身のことを語りたがりませんでした。私が質問すると、普通に話してくれました。

彼女は、一つ上の三年生であること。

微生物と水質の関係の研究を、昨年度の春から行っていること。

生物の教員から許可を得て、実験室を利用していること。

推薦入試で、既に私立の理系大学に進学が決まっていること。

微生物の中で、一番、ユージェナが好きなこと。

彼女の話はどれも新鮮で、刺激的でありました。博識で、柔軟で、自分で道を切り拓いていく彼女の強さに、私は憧れを抱くようになりました。

ただ、教えてくれないこともありました。彼女の名前です。

彼女と会うようになって、しばらくたち、空調要らずの季節になった頃、私は、彼女の名前を聞いていなかったことに気が付きました。それまで、私は、彼女を先輩、と呼んでいたのです。

私は、彼女に名前を尋ねました。しかし、彼女は、何故か黙ってしまったのです。突如訪れた静寂に耐え切れず、私は、自分の名前を言おうと、口を開きました。しかし、彼女は、それを遮りました。

「ダメ。言わなくていい」

冷たい眼差しを私に向けていました。私は、徐々に、動けなくなりました。まるで、はじめて会った時のようでした。

「それに、名前では呼ばれたくないの」

私は、彼女の黒い瞳に捉えられ、全く動けずにいきました。すると、ガラスの割れる大きな音が実験室中に響きました。彼女の手元にあった三角フラスコが、机の下に落ちてしまったのです。

その音に、彼女は息を呑むと、割れた三角フラス

コを一瞥して、私を、見つめなおしました。その瞳に、先ほどまでの冷たさはありませんでした。

「ああ、ええつと、ごめんなさい。危ないから近づかないで。ごめんなさい。ちよつと疲れていて……。

今日は、もう帰ってほしいな」

彼女は、眉尻を少し下げて、私に優しく言いました。いつの間にか動くことが出来るようになっていた私は、何も言わず、その言葉に大人しく従って、帰り支度を始めました。

去り際、彼女は申し訳なさそうに、口を開きました。

「私、貴方に『先輩』って呼ばれるの、好きなの。後輩とか、今までいなかったし。だから、また、先輩、って呼んでほしいな」

それは明らかに嘘でしたが、私は、静かにうなずきました。彼女との時間を失うくらいなら、名前なんて知らなくてもよいと思つたのです。

その日以降、特に何か変わることはありませんでした。名を聞こうとしたあの日は、私たちの中で、まるでなかったかのように扱われました。私は、特

にそれを不満に思うこともありませんでした。毎週金曜日、私たちは変わらず、先輩、貴方、と呼び合ひ、くだらない話をして、笑い合いました。

彼女と話す時間は、私にとって、大きな価値を持つていましたが、同時に、ユーグレナを眺めることが、私の大きな楽しみとなっていました。

涙を流したあの日以来、私は、ユーグレナに魅了されておりました。その美しさは私の心を掴んで離さなかったのです。彼女は、私に、彼女の育てたユーグレナを見ることを許していました。そのため、彼女が、自身の研究活動を進めている間、私は、時間を忘れて顕微鏡に向かい続け、四百倍に拡大されたそれを、眺め続けていました。

長時間、同じ姿勢で、飽きることなくユーグレナを眺め続ける私を見かねてか、片付けの手伝いも慣れてきた頃、彼女は、窓からの採光を存分に浴び、紅く輝く瞳でこちらを静かに見つめると、徐に口を開きました。

「ユーグレナの全てを、知り尽くしたいと思わな

い？」

彼女は、空の小さな三角フラスコを、私に差し出しました。

要は、ユーグレナについての研究をしてみないか、ということですよ。私は、一も二もなく、その提案に飛びつきました。

ユーグレナの全てを知り尽くせば、何者でもない私が、ユーグレナのように、美しく、自由な存在になれるかもしれないと考えたのです。

その日から、彼女の手伝いをするのではなくになりました。

私は、彼女から、基本的な器具の操作方法や、実験室内の設備、規則について学びました。さらに、彼女から教わって、簡易的なユーグレナの培養を始めました。そして、同時に、実験計画を立てていきました。授業内での実験程度しか、知識も技術もありませんでしたから、それは、大変難しいものでした。昼休みや、彼女と会わない日の放課後は、図書室に籠もり、微生物や、生物学実験について学びま

した。時には、彼女に相談することもありましたが、彼女は、二月に学外での研究発表会を控えていました。

「これは、好きでやっていることだから」  
そう言つて、力なく微笑む彼女は、私の相談に真摯に答えてくれていましたが、会うたびに、発表会の準備のためか、やつれていく彼女に、これ以上、負担を掛けたくありませんでした。

それから、私は、生物の教員にコンタクトを取ろうと考えました。正確な知識や、技術を学びたかったからです。また、そもそも、私が、実験室を利用していることは、私と、彼女以外、誰も知りませんでした。しかし、研究を行うのであれば、正式に許可を貰う必要があります。

そこで、ある程度、実験計画書が形になってきた、冬も近くなつたある日の放課後、私は職員室に向かいました。

覚えていますか。

窓際の自席に座る貴方に、私が声を掛けると、貴方は、少し驚いた様子を見せました。生物の教員は、

二人いて、私は、これまで、貴方の授業を受けたことはありませんでした。はじめは、私のクラスの授業を担当している、若い、もう一人の先生に、頼んだのですが、彼は、まだ、この学校に赴任したばかりであり、勝手を知らないからと言って、貴方に相談することを勧めてきました。私は、彼の言葉に従い、あの日、貴方を訪ねたのです。

私は、彼女のことを伏せ、最近、微生物に対して、強い興味を持ち、自身で、研究を試みたいのだと、実験計画書を片手に訴えました。

貴方は、私の突然の懇願に、目を丸くさせておりました。周囲にいた教員も、いきなり、そのようなことを言い始めた私に、はじめは首を傾げておりました。しかし、熱心に訴える私の様子を見てか、やがて、積極的でよろしい、成績を維持できるのであれば、問題ないのではないかと、概ね、好意的な姿勢を取り始めました。

一方で、貴方は違いました。いえ、正確に言うと、貴方だけではなく、何名かの教員が顔をしかめたのです。

これまで、微生物に対して、何の興味も示していなかった私が、いきなりそのようなことを言い出したことは、不可解なものだったでしょう。また、実験室の貸し出しを許可するには、十分な検討が必要であることは、理解していました。ゆえに、その日は、実験計画書を提出するだけで、帰るつもりでした。

しかし、それまで、口を開かなかった貴方は、私が立ち去ろうとすると、不意に回転椅子を倒し、立ち上がりました。私を含め、その場にいた誰もが、貴方の突然の奇行に、驚きを隠せずにおりました。静まり返った職員室内で、見る見るうちに、顔の赤みと、生気を失っていく貴方に、私たちは、目を離せずにおりました。

「姉に、聞いたのか」

貴方の口は、緊張からか、乾ききっており、とても小さい声でした。しかし、それは、はっきりと私の耳に届きました。

私は、何の言葉も返すことが出来ずにおりました。

夕日を背負った貴方の瞳は、まるで泥の様に汚く、私は、それに飲み込まれてしまうような気がしました。貴方の発言は、私に対する問いかけでしたが、一方で、私に発言を許していませんでした。小さな貴方の声に、どこか威圧感を見出した私は、口を開くことも、その場から退くこともできませんでした。直立し、貴方の瞳に恐怖を覚えていたのは、一瞬のようにも、無限のようにも感じられました。

「ああ、あなたのお姉さんは、五年前の卒業生ですものね」

私の隣に立っていた中年の女性教師が、そう口を開きました。女性教師の発言をきっかけに、貴方の束縛から逃れた私は、その発言の真意を掴めず、どういう意味か尋ねました。

「あら、知らなかった？ 五年前にもいたのよ。微生物の研究をしていた生徒が。その子、貴方のお姉さんと、とても仲が良かったから」

姉からそのような話は聞いたことがありませんでした。しかし、その生徒について、思い当たるふし

がありました。姉が、高校時代に、一度だけ、友人を家に連れてきたことがあったのです。

美しく、優秀であった姉は、私にとって憧れの存在でありました。姉は、中学時代に、バレーボール部の主将を務め、県代表を勝ち取り、その上、県下随一の進学校である、本校への入学を決めました。高校でも、バレーボール部に入部した姉は、きつと、素晴らしい活躍を魅せてくれるだろうと、私は期待に胸を膨らませていました。

しかし、高校二年の夏、姉は、部活をやめました。

姉に何があったのかは知りません。人間関係に煩わしさを感じたのか、練習が辛かったのか、自分に限界を感じたのか、まだ小学生であった私には、分かりませんでした。ただ、姉の一番輝く姿を、もう見ることは出来ないという事実には、私は、一抹の寂しさを感じていました。とは言え、姉は変わらず、学校に通い続けました。元々、勉強にも秀でていた姉が、これまで、部活動に充てていた時間を勉強時間へと変えたことで、さらに成績は向上してしまし

た。両親も、勉強に集中できるのでから、むしろ好都合だろうといった姿勢で、家族仲に影響することもありませんでした。

二年生の冬から、姉の帰りが遅くなりました。母に理由を問われると、姉は、放課後、学校の自習室で勉強しているのだ、と答えました。その受け答えの様子は、あまりにも自然で、私たち家族は、それを信じて疑いませんでした。両親は、そんな姉に感心し、私にも見習うよう、よく説いてきました。

春休みになっても、姉は時折、学校に通っていました。この頃の姉は、非常に良く覚えています。スポーツに打ち込んでいたあの頃の輝きとは、全く異質の輝きを持っていたからです。楽しそうに、ニコニコと笑うのに、その輝きは少し不気味で、私は姉のことを苦手と思うようになっていました。しかし、単なる違和感のまま、確信を持ってないでいた私は、誰にも、何も言いませんでした。

春休みのある日、姉は学校に行っていました。その日は、突然の雷雨が猛威を振るい、仕事に行っ

いた両親から、帰りが遅くなるだろうと、連絡が来ていました。我が家は、本校から徒歩圏内にあるため、姉については心配していなかったのですが、姉は、一人の女子学生を連れて帰ってきました。「少し雨宿りをさせてあげたいの。何か拭くものを持ってきて」

姉が友人を家に連れてきたのは、初めてのことでした。姉は、小中高と、いつでも友人が多いようでしたが、決して、家には連れてきませんでした。いえ、別にこれは、不自然なことではないのです。両親は、私たちに遊ぶことよりも、勉強を優先させました。ですから、家に友人を連れてくることを嫌がっていたのです。ですが、そもそも、姉自身も、友人を連れてきたいとは、考えていないようでした。私ですら、姉の部屋に入ることは嫌がられていたのです。いくら、雨が降っているからといって、そんな姉が、友人を連れてきたことに、私は、少々、驚いておりました。

新品の白いタオルを、姉と、姉の友人に渡ししました。それを受け取った二人は、その場で顔や髪を粗

雑に拭い、姉の部屋へ向かいました。友人はすれ違  
いざまに、私に会釈をしたようでしたが、私は、そ  
の友人に恍惚とした表情を向ける姉に得体の知れな  
い気味の悪さを感じ、姉から目を離すことが出来ず  
にいました。廊下には、二人分の濡れた足跡が残り  
ましたが、いずれ乾くだろうと、私はそれを放置し、  
逃げるように、自室に引き返しました。姉の部屋は、  
私の部屋の隣でしたが、春疾風に揺れる窓に、隣室  
の雑音はかき消されました。私は、独り、机に向か  
い、勉強に没頭しました。

雨が止む気配はなく、両親が帰ってくる前に、姉  
は、家にあつた百円均一のビニール傘を友人に渡し、  
玄関まで、見送りに出ていました。私も挨拶に顔を  
出すと、廊下には、薄っすらと、二人分の足跡が残  
っていました。

休みが明け、しばらくして、姉は、性格が変わり  
ました。家族に対して苛立ちを露にするようになって  
たのです。時には、物に当たり、また、家族に暴言  
を吐くこともありました。

「きつと、受験勉強で疲れているのよ。我慢なさい」  
母は、私にそう言つて、毎日、姉の部屋に夜食を  
持つていきました。私は、母の気遣いがとんだ見当  
違いのものであることを理解していました。姉が、  
勉強以外の何かに、醜く執着していることは、明ら  
かでした。

輝きを失つた姉に魅力はありませんでした。姉は、  
もはや私の憧れでは無くなっていたのです。そして、  
私は、姉を見限りました。

夏休みに入つてすぐ、姉は風呂と排泄以外で、部  
屋から出なくなりました。かろうじて、災害時用の  
カップ麺などを深夜に食べていたようでしたが、偶  
に廊下ですれ違う姉はひどく痩せて、二年前とは見  
る影も無くなっていました。両親は、受験を控え、  
ナーバスになつていただけだという希望的観測を胸  
に抱いていましたが、二学期以降も学校を休み続け、  
とうとう大学入試当日も部屋に籠もり続けると、両親  
は、たまらず、姉の部屋の前で、姉を口汚く罵り  
ました。しかし、何を言つても返事が来ることも、

扉が開くこともありませんでした。ふと、父が無理に扉を開けようとしたとき、部屋の中から、姉は、金切り声をあげました。

「私は、——になりたかった！」

両親の罵詈雑言に耐えられず、少し離れたところで、様子を伺っていた私には、姉の叫びを正確に聞き取ることは出来ませんでした。父は、何を馬鹿な事を、ふざけるなど、散々、怒鳴り散らしましたが、その後、姉は口を開くことも、扉を開けることもありませんでした。連日、姉と両親の攻防が繰り返されましたが、やがて、両親は、姉の存在に触れなくなり、代わりに、両親は、私に執着するようになり、以前から、頭の片隅にこの未来凶を描いていた私は、その期待を当然のものとして受け入れました。それから、姉とは全く話をしなくなりました。

姉は、何になりたかったのでしょうか。

女性教師の発言に、私は、曖昧な返事をし、その足で、生物実験室へ向かいました。無性に彼女に会いたくなったのです。その日は金曜日でした。

生物実験室の引き戸を開けると、彼女は、顕微鏡を操作していました。机の上には、ペーパータオルや、内壁を濡らした駒込ピペット、三角フラスコなどが、無秩序に置かれていました。少しやつれているように見えますが、確かにそこにいる彼女に、私は、ひどく安堵しました。

「あゝ、失敗した！」

彼女は、頭を抱え、声を上げました。事情を尋ねると、以前、ユーグレナを培養していたフラスコに、別の微生物を培養する時に用いた駒込ピペットを使って、作業をしてしまったというのです。彼女に勧められるまま、顕微鏡を覗き込むと、そこには、のびのびと動く、ユーグレナではない微生物と、丸い形のまま、少しも動くことのない、くすんだ深緑色の微生物がいました。彼女に尋ねると、この丸いも

のが、ユーグレナであるというのです。

「いやあ、まさか、こんな初歩的なミスをするとはなあ。」

研究発表会に影響はないのか尋ねると、ほとんど必要な実験は終えており、これは、趣味でやっていただけのだから構わない、と彼女は答えました。

「それに、死んだわけじゃないの。休眠しているだけよ。もう一度、環境を整えてあげれば、また目を覚ますわ」

彼女は、苦笑交じりに、プレパラートを持って立ち上がると、私の向かいの席に移りました。

「そういえば、あなたも二週間前くらいから、ユーグレナの培養を始めていたよね。調子はどう？」

彼女の言葉を受けて、私は作業に取り掛かりました。彼女は、明るい表情で頬杖をついて、私の作業風景を眺めておりました。

いつも通りの、二人の時間が穏やかに流れていました。実験室内は、ガラス器具の触れ合う音だけが響き、俗世から、かけ離れているようにも錯覚させました。

接眼レンズに目を当てると、そこには、大胆に動

き回るユーグレナが視界に広がりました。キラキラと輝きを放つそれから、生命力が存分に感じられ、

私は、十分な満足感を得ることが出来ました。培養にあたって、沢山のアドバイスをしてくれた彼女に、この成果を見てほしいと思い、私は、彼女に席を勧めました。彼女は、少し試すように、私を一瞥すると、小さな世界を覗き込みました。

「綺麗」

レンズの先を眺めた彼女は、ただ、そう一言呟き、顔を上げました。

彼女は泣いていました。

涙がこぼれぬよう、上を向いて、必死に嗚咽をこらえる彼女の姿に、私は非常に驚きました。彼女の涙の理由が分からない私は、周章狼狽し、作業机からペーパータオルを一枚取って、彼女に渡しました。しかし、彼女はそれに気づかず、ごめん、ごめんと繰り返し呟き始めました。それは、明らかに私で

はない、誰かに言っていました。

ふと、彼女は、頬に涙を残したまま、私の両肩を勢いよく掴み、私の瞳を正面から真つすぐに捉えました。私は、彼女の瞳から目を離すことが出来ませんでした。彼女の瞳には、私の呆然とした表情が映っていました。

「綺麗ね。本当に、綺麗。貴方は、ユーグレナみたいに、綺麗」

彼女が私を見つめ、そう言った直後、私は、まるで金縛りにあったかのような感覚に陥りました。彼女の言葉に反応することも、彼女の頬を伝い続ける涙を拭ってあげることも、私を捉え続ける彼女の瞳から逃れることも出来なくなつたのです。痛いほど、冷たい手で、肩を掴まれたからではありません。まるで、水面に顔を押し付けられたかのような息苦しさ私を襲いました。彼女は、私の瞳を捉えながら、私ではない誰かに向かって、告白を始めました。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

縛られたままだった。

自由になれなかった。

あなたを裏切りたくはなかった。

あなたを独りにしたくなかった。

でも、あなたには、そのまま生きてほしかった。

だから、あなたには、独りで生きてほしかった。

ああ、あなたと一緒に自由に美しく生きたかった。

ああ、あなたと一緒にユーグレナになりたかった。

窓の外は闇に飲まれ、室内の白色蛍光灯が、じりじりと音を立てて点滅を始めました。彼女の瞳は、黒く淀んでいました。私は、見えない海に溺れそうになりながらも、必死に口を開きました。

「あなたは、もう、ユーグレナに、なれないのですか」

「なれない。もう、なれない」

「なぜ」

彼女は、俯き、何も言葉を発しなくなりました。

私は、酸素不足で歪む視界に、彼女の姿を捉え続けていました。

何故、彼女が、ユーグレナになれないと言うのか、分かりませんでした。私の知る限り、彼女は、最も、ユーグレナに近い人間でした。美しく、強く、自由な彼女が、私の憧れでした。

何故、何故。

必死に彼女に問いました。彼女にも、私の苦しみが、伝わっていたようでした。彼女は、真つすぐにこちらを捉え、口を開きました。

「生理が来ないの」

彼女は、私の肩から手を放すと、口元を抑え、引き戸に向かって、ふらふらと歩きだしました。しかし、引き戸にたどり着く前に、彼女はしゃがみ込んで、胃の中のを、すべて戻しました。酸い匂いが、私の五体を駆け巡りました。私は、もがき苦しみながらも、やっとの思いで体を動かし、彼女の下へ駆け寄って手を伸ばすと、彼女は、私の手を払い

ました。

「汚れるわ」

彼女は、その淀んだ瞳で、私を制しました。その瞳は、あの日の貴方によく似ていました。彼女は、私に、触れることはおろか、近づくことも、許しませんでした。

「帰りなさい」

そう言うと、彼女は、その場に倒れこみ、目を閉じました。

直後、私は、足元に違和感を覚えました。そこには、白い、泥のようなものが、どこから流れ込み、私の足を捕らえていたのです。それは、密度が非常に高く、若干の粘着性を持っていました。雪崩のように、勢いよく、絶えず流れ続け、瞬く間に私の胸の高さまで嵩を増していきました。得体の知れない恐怖に、私は声を上げていました。彼女の姿は、濁流に飲み込まれ、すっかり見えなくなっておりまして。私は、立っていることすら出来ず、やがてその流れに身を任せることになりました。滞りなく、嵩を増し、流れ続けるそれに、溺れないように、私は、

必死に顔を上に向けました。室内で渦を巻いていたその濁流は、やがて、引き戸を倒し、廊下へと吐き出されました。同時に、私も、実験室から、身を投げ出されました。

生物実験室を出て、しばらく、私は気を失っていたようでした。やがて、目を覚ますと、そこに流動体はなく、私自身、汚れ一つない状態で、実験室の綺麗な扉の前に倒れ込んでいました。私は、肺に必死に酸素を取り入れました。冷たい汗が、火照った身体に浮かび上がりました。

やがて、正気を取り戻すと、彼女の存在を思い出しました。助けなくてはいけない、そう思い、濁流に備え、構えながらも、勢いよく扉を左に引きましました。

しかし、そこに彼女の姿はありませんでした。

実験室の明かりは、いつの間にか消えており、空調も切れていました。先程まで暖かかったはずの実験室内は、冬の訪れを知らせる寒さと、静けさを備えていました。引き戸の隣にある蛍光灯のスイッチを押すと、そこには、彼女も、吐瀉物も、顕微鏡も、

白濁液も、何も残っていない空間が広がっていました。彼女専用と化していた、ガラス器具を入れるボックスは消え、生物実験室に置きっぱなしにしていた彼女の筆箱は、棚にありませんでした。その光景は、まるで、最初から、彼女がいなかったかのように錯覚させました。中央の机の上には、私が培養したユーグレナの入った三角フラスコが、剝製や、模型に囲まれて、置かれていました。まるで、取り残されたように。まるで、片付けるのを忘れられたように。それは、私そのものでした。

実験室の時計は、十二時過ぎを指していました。

秒針の動く音が、私の聴覚の全てを支配しました。私は、電気を消すのも忘れ、実験室から飛び出しました。階段を駆け下り、グラウンド脇を、一目散に駆けていきました。そして、そのまま、家まで、全力で走り続けました。道の窪みに足を取られ、盛大に転びました。街灯の安っぽい光の下、両膝にある生暖かい違和感が、流れ出た血液によるものであることを知りました。それでも、私は立ち上がり、再び、走り出しました。

その晩、私は夢を見ました。

青い液体の中で、私は、ゆらゆらと漂っていました。

ああ、私は、ユージュレナなのだ。

本能的に、そう感じました。

ゆらゆら、ゆらゆら。

誰にも邪魔をされない聖域に、私はいました。

ふと、右を見ると、そこには、一つのフラスコがありました。

中で、誰かが泳いでいました。

仲間だ、仲間がいる。

よく見ると、そこには、彼女と姉がおりました。

二人は、笑いあつて、縦横無尽に泳ぎ回っていました。

とても、幸せそうでした。

私も、そこに混ぜてほしいと願いました。

一方で、同時に、二人を邪魔したくないと願いました。

二人は、ひどく美しく、自由で、楽しそうでした。

そこは、まるで楽園でした。

しかし、突如、そこに、貴方が現れました。

貴方は、二人の間に割って入り、狂った踊りを魅せました。

やがて、楽園は白濁し、二人の姿は見えなくなりました。

私は、終始、それを眺めていました。

私に許された行為は、事態を傍観することのみでした。

たかが夢です。

彼女には、金曜日には、また会うことが出来るし、姉が引きこもったのは、受験のプレッシャーに押し潰されたから、そして、貴方は、ただの生物教師です。そう、私は信じることにしました。

だって、そうでなければ、

そうでなければ、

なぜ、私は、姉を見限ってしまったのでしょうか

なぜ、二人は、引き離されなければならなかった

のでしょうか

なぜ、彼女は、ユーグレナになれないのでしょうか

なぜ、彼女は、私を綺麗だと言ったのでしょうか

なぜ、彼女は、姉ではなく私の前に現れたのでし

よう

そうでなければ、

そうでなければ、

報われない。

月曜日の放課後、私は貴方に呼び出され、実験室  
に向かいました。貴方は、実験計画書と実験室の鍵  
を、私に差し出しました。

「君の意欲は、しっかりと伝わりました。励みなさ  
い。」

貴方は、しばらく私を凝視していました。それは、

私を探るかのような瞳でした。私は、謝辞を述べ、  
ただ、貴方の瞳を見ていました。すると、貴方は、  
ゆっくりと口を開きました。

「君は、お姉さんに似ている」

貴方の手は少し震えているように見えました。

「そうですか。でも、私は私です」

私は、首を少し傾け、肩をすくめると、冷笑を浮  
かべ、そう答えました。まるで、姉を軽蔑するよう  
に。貴方は、私の応答に、一瞬、目を丸くさせまし  
たが、すぐに、笑みを浮かべ、私の頭を撫で回しま  
した。

「ああ、そうでしたね」

そうでした、そうでした、そう嬉々として繰り返  
し、私の頭を執拗に撫でながら話す貴方は、憑き物  
が落ちたかのような表情で、私を見ていました。私  
は、奥歯を強く噛んで、貴方に微笑み続けました。

貴方は、毎度、使用後は施錠をし、職員室まで鍵  
を返すよう、私に説明すると、実験室を立ち去りま  
した。私は、いつも通り、器具の準備をして、ユー  
グレナの培養を始めました。元種は、手元に残った、

たった一つのフラスコのユーグレナです。ガラス器具の擦り合う音だけが、実験室内に響き渡りました。

月曜から木曜日の放課後、私は必ず実験室へ向かいました。当初、作成した実験計画書の通り、複数個の実験を同時に計画していたので、毎回、時間いっぱい研究活動に没入しました。時には、計画通り実験を終えることが出来ず、日が沈むのが早い、この季節を恨むこともありました。鍵の返却時に、そう漏らすと、貴方は笑って、熱心だなあ、と私の頭を撫でました。私は、強く舌先を噛んでいました。ですが、金曜日だけは、実験室に行きませんでした。もし、金曜日、実験室に彼女がいなかったら、私は、私を赦さないと思ったからです。怖かったのです。彼女を失ったことも、姉を見捨てたことも、全てを認めてしまいそうで、怖かったのです。

寒さも和らぎ、日が沈むのも遅くなったある日、貴方は、放課後、実験室を訪れました。これまでも、貴方は、たまに私の研究活動の様子を見に来ること

がありましたが、私は、何の疑問も思わず、貴方を歓迎しました。この頃の貴方は、私に對して、当初持っていたような警戒心や、恐れを全く備えていませんでした。貴方は、私が作業している間、よく、たわい無い冗談を言って、私を笑わせようとしてました。その日も、貴方と私は、雑談を交わし、和やかな雰囲気の時が過ぎていきました。すると、貴方は、急に黙り、私をまじろがずに、じっと見つめました。

「いやあ、君はやはり優秀だ」

貴方の、脈絡のない発言を、私は、軽く流そうとしました。しかし、貴方は食い下がってきました。

「いや、君は本当に優秀だよ。僕は、優秀な子は好きだよ」

私は、目を細めました。私のその表情を見て、貴方は、右の口角を上げました。すると、その恥毛のような髪を揺らし、私に近づいてきました。ですが、私の手でそれを制すると、貴方は思いのほか、素直にその場に留まりました。

「今日は、もう帰ります。明日は金曜なので、また月曜に」

私がそう返すと、貴方は、白い歯を見せました。

「そうだねえ。今日はもう遅い。また月曜に」

私は、片付けを済ませると、貴方と共に実験室を出ました。施錠し、その場で鍵を貴方に渡すと、貴方は、私の腰に手を当て、私を校門まで送り届けました。

翌日、金曜日の放課後、私は、貴方から鍵を借りず、生物実験室へ向かいました。実験室からは、ドア越しにガラスの音が響いていました。

私が深呼吸をして、引き戸を開けた直後、彼女は、手元の三角フラスコの中身を私に勢いよく浴びせました。

ぼたぼたと、私の顔や髪から、深緑の液体が、零れ落ちていき、また、白いシャツが、薄緑に染まりました。

彼女は、肩で息をしていました。中身を失ったフラスコを持つ手は震えており、顔は青ざめていました。私は、濡れた身体のまま、彼女を抱きしめました。彼女は、大理石のように冷たい身体を大きく震

わせました。

「あなたは、まだ、綺麗？」

彼女は不安そうにそう言うと、私を引き離そうとしました。しかし、その力はとても弱いものでした。

「ええ」

私は精一杯、彼女を安心させるよう、優しく、力強い声で、答えました。安堵からか、力の抜けた彼女の全体重が、私にもたれかかりました。

「よかった、よかった、うう、ほんとうに、よかったです」

嗚咽交じりに繰り返す彼女は、涙を手の甲で雑に拭きました。ぐしゃぐしゃに濡れた彼女の頬を私は、ゆっくりと撫でました。

しばらくして、少し落ち着きを取り戻したのか、

彼女は、私に席に座るよう促しました。私はそれに従い、彼女から手を放して、いつものように向かい合って、座りました。私は、机の真ん中に置かれた、ユーグレナを培養している三角フラスコを静かに眺めておりました。

「また来てくれて、ありがとうございます。でも、もう来ないで」

彼女は、低く、静かな声で言いました。

「なぜ」

「私は、汚いから」

「あなたは綺麗です」

「じゃあ、なぜ私と目が合わないの」

私は言葉に詰まりました。私は、ずっとユーグレナの入ったフラスコを見続けていました。彼女の、濁った瞳を見るのが、怖くてたまらなかつたのです。以前のような、美しい瞳を持っていない彼女と向き合うことが、怖かつたのです。

「やっぱり」

感情のこもっていない、淡白な声が室内に響きました。私はその間も、顔を上げることが出来ずにいました。彼女は、ため息をつくと、席を立ちました。

「帰りなさい」

赤子を諭すかのような物言いの一方で、有無を言わせぬ威圧感が、そこには込められていました。しかし、私は、席を立ちませんでした。私は、顔を上

げ、彼女と目を合わせました。

彼女の瞳は、黒く濁っていました。一方で、真つ黒に染め上げられたわけではなく、まるで、様々な色を混ぜて出来たかのように、輝きの原石は残されているようにも思えました。私が顔を上げたことに驚いた様子の彼女は、目を丸くしながらも、私から、目をそらしませんでした。

「あなたたちは、ユーグレナですよ」

私は、彼女の瞳を見て、宣言しました。

彼女は、顔を醜く歪めました。

「違うわ」

力強く否定する彼女に、私は続けました。

「あなたたちは、眠っているだけです」

彼女は、目を大きく開きました。

「休眠状態なだけ。ねえ、先輩。金曜日には姉を連れってきます」

呆気に取られる彼女を尻目に、私は、席を立ちました。ふと、彼女と会うことは、もうないことを悟りました。きっと、彼女も同じように思ったのでしよう。

「待つて！」

彼女は大きな声で、私を呼び止めると、机の上に置かれていたユーグレナの入ったフラスコを、私に差し出しました。

「綺麗よ。あなたは、とても綺麗」

私は、差し出されたそれを無言で受け取ると、礼も言わずに立ち去りました。何を言っても、彼女にとって、餞別の言葉になってしまうことを理解していたからです。

翌週の月曜日、放課後、私は、職員室の貴方の席へ向かいました。私に気が付いた貴方は、白々しく、実験室の鍵を探し始めました。ようやく、鍵を取り出したかと思うと、徐に口を開きました。

「ああ、今日は実験室に忘れ物をしてしまったから、僕も行くよ」

そう言つて、席を立とうとした貴方を、私は、手で制しました。

不審がる貴方の正面に立つと、私は、手にしていたフラスコのゴム栓を開けました。キュボン、と空

気の抜ける間抜けな音が室内に響くと、私は、貴方の頭上でそれを上下逆さまにしました。フラスコの中身は重力に従い、ゆっくりと落ちていきました。やがて、それは、貴方を濡らし、深緑の液体が、貴方の首筋を伝うのを、私は、瞬きせずに眺めていました。

誰かが悲鳴を上げ、また、何人かの職員が、私を押さえました。

私は、その間、ずっと、貴方を見ていました。呆気に取られた様子の貴方もまた、私から目を逸らすことが出来ずにいるようでした。

「先生、綺麗ですね」

ユーグレナを纏った貴方に、私は言いました。

これは、自己暗示のつもり言葉でした。しかし、今、改めて回顧すると、本当に貴方は綺麗だったように思えます。貴方を覆う鮮やかな緑の液体が、窓からの採光を反射して、輝いていたからです。

その後は貴方が知る通りです。私は、その場で校長室へ連行され、ひとまず、一週間の停学処分と、

反省文の提出が課されました。迎えに来た父は、私を罵り、母は声を上げて泣きました。私は、それをすがすがしい気持ちで受け入れました。

家に帰ると、姉が玄関に立っていました。普段、最低限しか部屋を出ることのない姉が、玄関で出迎えるなんて、久しくありませんでしたから、両親は非常に驚いていました。

「金曜日、彼女が待っている」

私がそう言うと、姉は、何も言わず、涙を流しました。私は、そんな彼女の脇を通り、自室へ向かいました。

金曜日の早朝、姉は私の部屋を訪ねてきました。

姉は、外の薄暗さと対照的に、まばゆいほどに輝く瞳を私に向けていました。ベッドで目を擦る私に、姉は、一冊のノートを差し出しました。それは、夏前に無くしたはずの、生物のノートでした。

「おはよう」

笑顔で私にそう言うと、姉は扉を開けて、部屋から立ち去りました。玄関の方から流れてきた暖かい

風が、私の頬を優しく撫でました。一冊のノートを残し、姉は、行ってしまいました。廊下に残っていた足跡は、全て消え、床は、元の美しさを取り戻していました。

姉は、その日から、家に帰っていません。

貴方は知っていますか？

ユージェナって、意外と培養するのは難しいのです。最適な温度、栄養、水質、その他諸々を提供しなくては、数は増えません。また、元々いたユージェナも、環境が悪くなると、休眠してしまいます。でも、最適な環境を用意すれば、また、目を覚ますことが出来るのです。そして、それは、他の何よりも美しい。たとえ、水が濁ってしまったても、それが気にならないくらいのも、大きな水槽に、移し替えてしまえばよいのです。汚れが一滴でも入ったら、純水には戻らないけれど、ものすごい、手間が掛かるけれど、何度でも、ユージェナに、なれるのです。

「ユージェナ」とは、『美しい瞳』という意味であることを、いつか、彼女は教えてくれました。彼ら

は、その名に恥じぬ、紅く輝く瞳を持っています。私は、それに魅了されてなりませんでした。しかし、私たちも、それを、持っていたはずです。どんなに醜く見えても、元は、美しい瞳であったはずです。

貴方には、それを知っていてほしかった。

彼女には悪いと思いますが、貴方には、感謝しているのです。だって、私は、貴方のおかげで、彼女に出会うことが出来たのです。貴方のおかげで、ユ―グレナに出会うことが出来たのです。

もう、金曜日に生物実験室に行っても、彼女に会うことは出来ないでしょう。でも、それが正しいことなのです。それでも、これを書くまでは、柄にもなく、馬鹿なことをしたなんて、後悔していません。もう、彼女に会うことも、姉に会うことも、出来ないという事実を、改めて実感していたからだと思いません。でも、それは間違っていることに気が付きました。だって、いつかは、私も目が覚めるから。彼女たちの下へ行けるから。

先生、貴方も。貴方もそうでしょう？

貴方も、そろそろ目覚めるべきではありません

か？



阿久悠作詞賞  
三田完  
選評

## 全体講評

四半世紀前の盛夏、阿久悠さんとタクシーに同乗したときのこと——。車が信号で停止したとき、隣の阿久さんが突然「ああいうのが詞になるんだよね」とくぐもった声で吹き、私はあわててその視線を追いました。阿久さんは車窓から中空を見上げています。場所は新宿都庁前でしたが、街の風景に特に変わった様子はない。信号が青に変わるころ、気がつきました。街路樹の葉が茂って、〈都庁前〉の交通標識をなにかば隠している。私たちは信号機が街路樹に隠れることなどないと思ひ込んで日々を送っています。夏、夏の陽の烈しさや樹木の逞しさによって、こうした意外な風景が出来（しゆつたい）することもある——私は勝手に阿久さんの胸のうちを斟酌しました。

頭のなかで巡る思念が詞のテーマ

になることは間違いないことです。しかし、そういった思念の周囲に思いがけない風景があり、意外な人間の行動がある。そういった風景や行動を小道具にして、思念を色づけしていくのが文芸という行為。阿久さんの頭のなかには、日頃の観察をもとにさぞかし多様な風景や行動が蓄えられていたことでしょう。

今回の応募作は、総じて内向きの作品が多かった印象があります。もつと街の風景や人々の行動を観察し、リズムのある言葉にしてほしかった。自信を持って大賞に推せる作品を選びえなかったのは、コロナ禍で街を自由に歩けず、詞の小道具を拾えなかった一年ゆえの残念な結果かもしれない。

受賞作品講評

佳作「紅葉かつ散る」

下紅葉かつ散る山の夕時雨

ぬれてやひとり鹿の鳴くらむ

藤原家隆

葉が紅く色づくと同時にほらはらと散る風情を表す「紅葉かつ散る」という古語に触発された一篇です。

いにしえの歌に用いられ、いまは俳句歳時記にかるうじて残っている言葉が発掘し、自分に引き寄せた作者の言語感覚に感服しながらも、「関係性」という硬質な言葉の幹旋に違和感を覚えました。

「夜の空想」

韻律の楽しさでメロディーを付けやすい作品です。

別にロジカルな展開はなくてもいいと思うのですが、言葉が並んでいるだけでは平板で、色彩ある立体にならない。ヒゲダンの楽曲をもっと研究してみても良いでしょう。

「ありふれたい」

秀逸なタイトルです。誰もが自分らしくありたいと思う時代に、あえて「ありふれたい」と口にするとは。

しかしながら作者は、この歌の状況設定を客観的に語る「ありふれたい」サーピスをせず、主観的な意識の流れを綴るのみ。結果、読み手（聴き手）は置き去りに。

上記3作のほか、「メロドラマ」、  
「ちくわ天ブルース」（受付番号1072）が心に残り、計5作をくりかえし吟味した結果、受賞作品を決定しました。大賞該当作がない理由はただ一つ。詞を眺めながら彩り豊かなメロディーを想像できなかったからです。



## 「紅葉かつ散る」

藤巻 亮太

### ■受賞のコメント■

この度は、明治大学文学賞阿久悠作詞賞の佳作に選出して頂き、大変光栄に思います。

私は歌詞に限らず様々な創作活動において、何かをストレートに表現するのではなく、あえて遠回りしたり余白を残したりして表現することで、作品がより奥深いものになると考えています。夏目漱石が「Love youを「月が綺麗ですね」と訳したようなことです。そのような日本語特有の魅力を引き出したいと思いながら作詞をしました。

今回選んで頂いた「紅葉かつ散る」という作品でも、できるだけ具体的な場面や心情を連想させることは避け、想像できる余白を多めにしました。「紅葉かつ散る」とは、紅葉で赤く染まった葉がある一方で、すでに散ってしまった葉も同時に存在しているという意味の秋の季語なのですが、秋に良い思い出がある人もいれば、悪い思い出がある人もいると思います。それぞれの思い描く秋に重ね合わせて読んでもらいたいです。

最後になりますが、このような機会を設けて頂いたすべての関係者の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

『紅葉かつ散る』

秋の夜は 涼しげに  
僕らの関係性を眺めてる  
何もない日々 何もない日々でも  
外 吹く風に見惚れます

それは心許ない遊びです  
それは消える前の明かりです  
沈む夕暮れと伸びる 影二つ  
まるで色づきはじめの紅葉です

散る 散る 散る 白々と  
紅葉かつ散る

散る 散る 散る 足元の  
紅葉が告げる

秋の風は 生ぬるい  
僕らの関係性と同じで  
何気ない声 何気ない言葉が  
そつと滑り落ち焦ります

それは心離れる気配です  
それは消えた後の姿です  
沈む夕暮れと伸びる 影二つ  
まるで風に吹かれる落ち葉です

散る 散る 散る 白々と  
紅葉かつ散る

散る 散る 散る 足元の  
紅葉が告げる

それは心許ない遊びです  
それは消えたことにするのです  
沈む夕暮れと伸びる影二つ  
まるで次の季節の素振りです

散る 散る 散る 白々と  
紅葉かつ散る

散る 散る 散る 足元の  
紅葉が告げる

一つ 一つ 知る 知る前に  
紅葉かつ散る

一つ 一つ 知る 知る度に  
紅葉が告げる

## 「夜の空想」

小島 淳之介

### ■受賞のコメント■

私の携帯電話には明治大学事務室の電話番号が登録されてあつて、事務室からの電話には「明治大学」と表示されるようになっていた。そんなわけで、昨年、受賞の連絡が来た時には、突然の「明治大学」からの電話に、何事か！と、びくついた。二度目である今回は、ちようど卒論を出したばかりのタ イミングとあつて、「明治大学」の文字に、なにか不備でもあつたんじゃないかと、また戦々恐々として、急いで電話をとつた。慣れないものである。

私にとって、受賞の知らせは久方ぶりの良いニュースだった。とかく、この世は生きづらい。気分が落ち込むこともある。そんな心境だったため、選んでもらえたこと、本当にありがたく、感謝の気持ちでいっぱいだ。

先年、選んでもらつた歌詞は、老境の心持ちを歌つたものだった。私としては自分の普段考えてること、浮かんできたフレーズを並べただけのつもりだったのだが、大学生にしては珍しいと言われた。じやあ今度は逆で行こうと、老いた女性から、若い男の子の心へ180度旋回してみた。それが、本作である。

最後に改めて、選んでいただいたこと、このような発表の機会を、本当にありがとうございます。

夜の空想

夜の空想 かなり凡庸

明日に悩む肖像

少年の夜は永いあい

向き合う机上

将来は首相 過度な理想像

夢は二十面相

こりやどうも掴み切れないあい

雨曝しの心臓

君の妄想 たぶん問答

触れられない焦燥

口説き文句は重要でえいえい

ひとりよがりな予想

君はモンロー 僕はケネディ  
海を渡る幻想  
距離感もバグっちゃってえいえい  
がんばれど器用貧乏

夢を見るだけなら  
要らない苦労  
夢を見てるだけでも  
いいじゃない相当

いつしか早朝 今日も寝坊  
昨晚の理想像  
いつの間に消えちやってえいえい  
目覚めれば候

登校の途上 君が前方  
点滅する信号  
走れば 間に合いそう  
踏み出して一歩

「ありふれたい」

灰本 陽介

■受賞のコメント■

この度は阿久悠作詞賞佳作を頂けて光栄です。

朝から晩まで研究漬けの日々の息抜きに、生活の中で頭に浮かんできたフレーズ達を繋ぎ合わせて今回の作品が完成しました。

自信はあまりありませんでしたが、「自分の表現力がどう評価されるか知りたい」気持ちと、「お金になつたら嬉しい」という邪な気持ち膨らみ、応募するに至りました。

この作品は、私が素晴らしい音楽に出会って衝撃を受けた時の心情を書いたものです。

衝撃を受けて思わずニヤけてしまうような幸せや、新しいモノに触れる時のワクワクが、自分の日常生活にもつとありふれて欲しいという気持ちを書きました。

個人的な価値観ですが、「受け手によって様々な解釈ができること」というのが良い歌詞の条件の一つであると思います。

私もその条件を意識して作詞してみましたが、振り返るとまだまだ無駄の多い作品で、尊敬する阿久悠先生のような詩には遠く及ばないと感じました。

しかし、反省と同時に、私の頭の中にあっただけの拙い文字列が評価を頂けたことを大変嬉しく思っております。

そして、その拙い文字列を表現できる機会を用意してくださった皆様に心より感謝申し上げます。  
ありがとうございます。

「ありふれたい」

薄暗い道 肩が触れただけ  
迂回してゐる途中 二人して  
人生嘘だと思ふほど  
刺さつて抜けない出会いです

日の出は中まで眩しくて  
へらへら笑つて伸びをした

絵に描けるほど ありふれたこと  
人並み月並み 喜んで  
誤魔化したのは お互い様か  
後から気づいて 嬉しくて

噂によく聞く普通とか  
自分が何かは知らないが  
希薄なネットは頼らずに

シビレで昨日を確かめる

あの言葉の切っ先に  
ヒヤヒヤしながら生きてみたい

絵に描けるほど ありふれたこと  
人並み月並み 綻んで  
騙されたのは お互い様か  
後から気づいて 転げてる

絵に描けるほど ありふれたこと  
人並み月並み 喜んで  
真に受けたのは お互い様か  
歯が浮くセリフも 噛み締めて